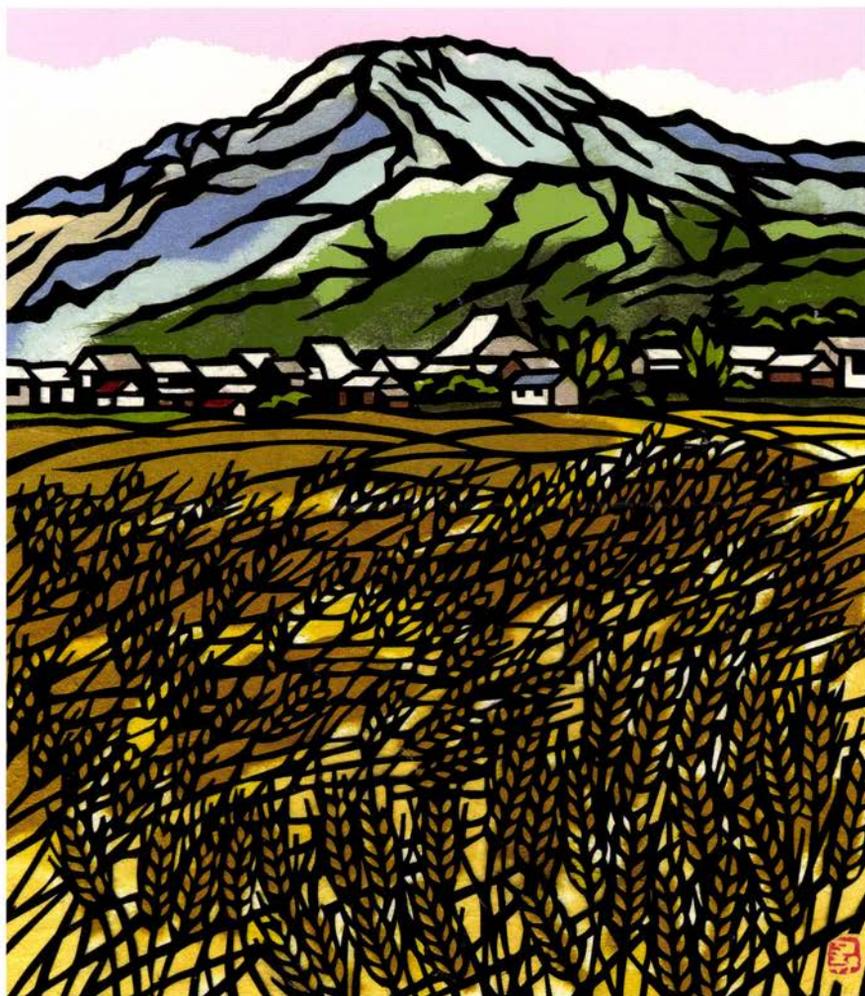


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十七年五月一日発行(隔月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇五六号



日川協加盟

No.1056

第3回 春の川柳塔まつり誌上大会

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会(川柳会)のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

(巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。)

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 五月二〇日

川柳塔社

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

生放送

小島 蘭 幸

思ったこと、感じたことを素直に表現できる「川柳」は、いま静かなブームを呼んでいます。これは昭和58年10月10日発行のNHK「よめやうたえや川柳天国」記念句集の冒頭の言葉です。昭和58年8月16日、NHK大阪放送局から、納涼バラエティー「よめやうたえや川柳天国」が、桂三枝（現、桂文枝）の総司会で、全国生中継で全国放送されました。

川柳の特集番組としては、初めてのゴールデンタイムの登場でした。テーマは「親子」で全国各地から二五、四五六句の川柳が寄せられました。大阪放送局のスタジオには百四十名の親子が招かれ、親子川柳合戦、また、秋田、熊本では生中継で川柳が紹介されました。夜八時からの生放送ということもあって、その反響は大きく、多くの人に川柳のやさしさ、楽しさを伝えることが出来たのです。

放送の最後に、橘高薫風、森中恵美子両氏の選による、ユーモア賞、ドッキリ賞、ふれあい賞の三句

が発表されました。

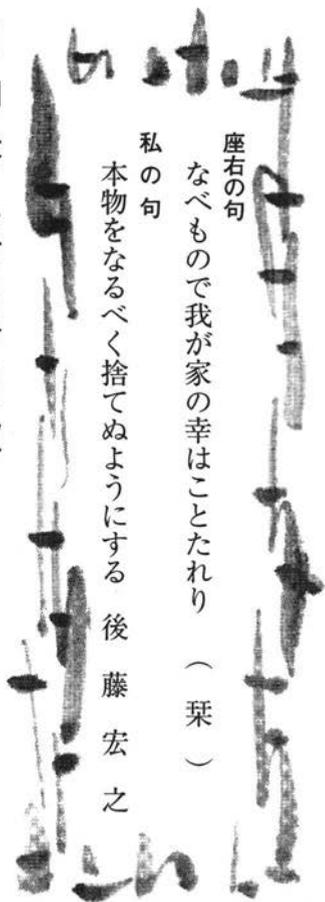
親と子はいつもボタンを掛け違い 碧 水
少年の的眞つ正面に父がいる けんじ
動物園の親子の情を見せておく 蘭 幸

今、NHK広島放送局では、中国地方向けの番組「ひるまえ直送便」を生放送しています。その中で、3月11日、第一回「ひるまえ川柳」課題「春」の選者として私が約10分間、生出演しました。

応募句六二一句の中から入選句5句と特選句1句を披講、解説することが出来ました。やさしくて楽しい川柳、文芸としての川柳を一人でも多くの人に知って頂く大きなチャンスだと私は考えています。

その為には、多くの応募が必要です。中国地方の同人、誌友の皆様の応募を心から願っています。このように今、各地のNHK放送局では、地方向けの川柳番組は放送されています。

川柳は今、静かなブームから大きなブームになっているのです。願うことなら、もう一度、ゴールデンタイムに全国放送で「よめやうたえや川柳天国」パートIIを見たいものです。



座右の句

なべもので我が家の幸はことたれり (葉)

私の句

本物をなるべく捨てぬようにする 後藤宏之

川柳塔 五月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「麦秋 伊吹山」

■巻頭言 生放送……………	小島 蘭 幸……………(1)
間一髪！……………	新家 完 司……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	小島 蘭 幸選……………(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⑬……………	木津 川 計……………(43)
自選集……………	……………(44)
温故知新……………	……………(47)
水煙抄……………	西出 楓 楽 選……………(48)
新川柳鑑賞 ⑳……………	麻 生 路 郎……………(70)
西尾 葉句抄……………	……………(71)
誹風柳多留一二篇研究 23……………	……………(72)
英語 de Senryu ④①……………	吉村 侑 久 代……………(74)
民族の詩歌 ③⑤……………	三 好 専 平……………(75)
愛染帖……………	新 家 完 司 選……………(76)
檸檬抄「旗」……………	牧野 芳 光・古久保 和子 共 選……………(80)

間一髪！

新 家 完 司

家内は6人姉妹の5番目。長姉は京都、2番目は三木市の不便な所に、それぞれ今は一人住まい。84歳と81歳。

三木市の義姉から電話があったのが1月31日の朝。「夕べから京都へ何度も電話しているけど出てこない。何か聞いてみる？」と言う。こちらからも何度か掛けたが応答なし。さて、どうしたものかと思案。ちようど翌日の2月1日から坐禅会主催の「仏蹟参拝」でラオスへ出かける予定だったので、私だけ別行動させていただき、安否を確認後、前泊の関空前ホテルで合流することに決定。

1日朝、スーツケースだけバスに乗せ、私は「特急スーパーはくと」で京都へ。地下鉄とタクシーを乗り継いで義姉宅着。両隣にご挨拶して確認したが、どちらも「何も聞いていない」と言う。

前日の夜に、近くの交番の電話番号と鍵を開ける「錠前屋」の電話番号をネットで調べてケータイに入れていたので、先ず交番へ。事情を説明して立ち会って

〔主 婦〕

一路集「素通り」

〔さばさば〕

初歩教室「弁 当」

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

追悼 白根ふみさんを偲んで

せんりゆう飛行船⁵³

■エッセイ 川柳への誘い

インスピレーション・ナビ 印象吟

第三回 春の川柳塔まつり誌上大会

四月本社句会

句会燦燦

各地柳壇(佳句地十選/菊地政勝・米澤淑子)

五月各地句会案内

柳界展望

■編集後記(ひとこと/梶谷和郎)

両川洋々選……(83)

梶谷和郎選……(84)

小林わこ選……(85)

山口光久……(86)

山岡富美子……(88)

松山芳生……(90)

政岡日枝子……(91)

新家完司……(92)

小川注湖……(93)

大西泰世……(94)

岩崎真里子……(118)

朱夏・勝弘……(140)

……(138)

……(136)

……(123)

……(122)

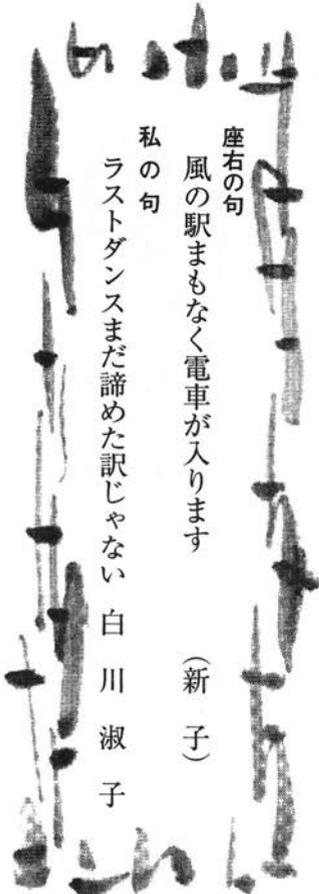
座右の句

風の駅まもなく電車が入ります

(新子)

私の句

ラストダンスまだ諦めた訳じゃない 白川淑子



くれるように依頼。次に錠前屋へ電話すると「安否確認の場合は警察官の立ち合いが……」と言うので、「今こちらに向かっている。急いでくれ!」と懇願。スクーターでやって来た若い警察官と玄関周りを調査。郵便受けに新聞が三日分溜まっているのと、留守宅にしては電気メーターの回転が速いのが不気味だった。

30分後にやってきた中年の錠前屋、懐中電灯で錠穴を凝視、道具箱から何やら出してコチョコチョコとしたらパチン!「開きました」。その間30秒ほど。

錠が開いた途端に若い警察官の表情がキリッと引き締まり、「私の後についてきてください。何事があっても手を触れてはいけません!」とプロの口調。「○○さん、居られますか?」と声を掛けながら、部屋を一つずつ調べて行く。

義姉は2階の寝室で、布団から転がり出て倒れていた。声をかけると、か細い声で返事したので生きていると確認。電気毛布からの微かな熱に救われたのだ。

救急車に同乗して病院へ。家内へ状況説明。三木の義姉に来て貰うように依頼。京都駅に戻り「特急はるか」に飛び乗り関空前ホテルへ。午後6時からの結団式の乾杯に20分遅刻して参加できた。

川柳塔

小島蘭幸選

寝屋川市 森 茜

信じねばならぬきれいな喉仏
哀しみの屋根に白さぎ舞いおりぬ
濃く淡く藍ひしめいて空は寂
森閑と町並みまぎれもなくこの世
広辞苑の重さよ乗したままに
君の居た日のぬくもりに灯される

富田林市 中 崎 深 雪

足萎えも夢の中では走りっこ
障がいも教えてくれた未知の地図
不便より不自由よりも無視がいや
五七五に感謝自分を視れるから
神さまが染め分ける百色の青
空色を描きたいが絵の具は無力

藤井寺市 太 田 扶美代

点のようなどもしびだけど抱いている
義弟のために祈った夕茜
豆を挽く手間も楽しいコーヒ党

桃の花母の過保護がなならない
お祝いをくださるならば春色で
桃色が再び似合う歳になる

箕面市 酒 井 紀 華

満月に吸いこまれそうペダル漕ぐ
デコボコを丸くおさめるカスミ草
古稀すぎて儲け話を戒める
新しい恋のはじまり帽子買う
モンロー真似る八頭身の白い猫
北国のおんなは強し雪を呼ぶ

篠山市 酒 井 真 由

某月某日私の椅子がない
ほーっとしていたら矢弾がとんできた
ひとさまが決めて下さる私のランク
空っぽになってボサ・ノバ聴いている
放課後の校庭乳母車が過ぎる
花の城水かけろうが立ちのぼる

札幌市 小沢 淳

生と死のたった一字が悩みごと
さくら咲く親類縁者ばらばらに
ご飯おかわり自由に飢餓のころ思う
表までぎつしり書いた師のハガキ
タテガミも尻尾も捨ててから蛇行
楔打つとこを時時間違える

松江市 石橋 芳山

石つぶて憤怒の波は治まらず
浮かれてたようだ鱗が落ちて
幻覚の先を導くように蝶
さげすみも罵声も俺に降っている
モザイクの中から青春を掴む
ほんものがあるかも遮断機の向こう

札幌市 三浦 強一

うっかりのアイラブユーが金婚譜
奥の手に使う女の涙壺
ちびちびと銘酒ビールは一気飲み
極楽か目覚めてみればまだこの世
五回で切れたけしからん電話ベル
趣味は別妻旧姓で翔んでいる

出雲市 竹 治 ちかし

爽やかな妻の寝息に晴れ続く
ひと時代過ぎて無口のニュータウン
こだわりを丸め潰してから元氣

日々消化出来ないままのケセラセラ
女房がルールブックという我が家
にらめっこ笑いをとって負けておく

鳥取市 森山 盛桜

コルク栓ほどの弾力ほくに無い
過去もこう有ればな消せるボールペン
強面の弱み猫舌とは笑う
ズック靴時代遅れの春も良し
ユーモアはブラック僕の質だろう
幻聴で振り向く事が多くなる

鳥取市 岸本 宏章

いいじゃない十八歳の選挙権
ここだけの話はしない花の下
飲み薬増えていのちがまた延びる
鶏の羽根も羽ばたくためにある
全没もいいなゼロから出直せる
献金に見返りいらぬとは思議

弘前市 高瀬 霜石

贅沢はこれにきわまる青畳
一石二鳥虫干し兼ねて昼寝する
他人さまに見せてはならぬ足の裏
味方にも敵にもなるだろう段差
戦いに向かない人もいる戦士
友だちが再入院をしたという

榎原市 安土理恵

亡母ならば黙って泣いていただろう

かわいそうなおばあさんにはなりとない

百年もたつたらみんな風になる

消えようか紅のほのかにあるうちに

休止符は打ったがギリオドはまだ

引越してあと十年を春にする

和歌山市 木本朱夏

まだ青い時間の中をわたしたち

雑音をひろい集める春の耳

掴みそこねた星を見上げていた父よ

ちちははが肩を寄せあう花の下

黄昏れてようやく駅が見えてきた

約束をやぶつた春のにがい指

大阪市 古今堂 蕉子

春一番ダウンを脱いだ街を行く

日本の四季文化遺産にしたいもの

自販機に間違いました言うてみる

監視カメラは手鏡のなれのはて

疑問符をあつさり解決するスマホ

完全な丸はないよと闇の声

松江市 松本文子

渋茶飲む私と同じ味がする

住民票欲しいと狸たちが来る

いろいろあつたが黙つてることにする

一週間迷い子になった塔誌抱く

山陰の空青空だバンザイだ

好きと書く相手が居ないけど平気

大阪市 谷口 義

今日は何かありますのと昼の月

消したかと思えば水になっていた

神様の見込み違いということに

さんずいへんは只今旅に出ています

生年月日に重しがついている

万が一の話と自動販売機

大阪市 熊代菜月

亡夫の愛あの日冷凍したまんなま

欲しいもん一つになんかしほれない

百均が唯一私の憂さ晴らし

人並みに生きた至福の八十年

茜空友住む町の遠さかな

ぐち言える相手が一人また消える

京都市 高島啓子

蠟燭のゆらぎに心音を合わす

少しずつ力を抜いているのです

呼ばずにするばそれにこしたことはない

その辺のところわかっただけならいい

大方の話は手前味噌である

ジョーカーを使いそこねた落ち椿

和歌山市 楠見章子

花咲いて気づく忘れていた笑顔
音楽っていいね二十歳にすぐ戻る
転ぶまでずっとスイングしていたい
行列の中で連帯感が湧く
口癖のアホがたびたび出て困る
気立てが好くて少し手強いいい女

吹田市 山本希久子

ぬくい言葉いただく財布に入れておく
笑顔が消えたスタミナ切れた証拠だな
恋しくなったら紙ヒコキ飛ばそ
経験則に従う今日の散歩地図
許せること許せないこと雨になる
隣国の首相が横を向く余寒

三田市 福田好文

身内には鷹になりそな顔がない
寝起きからアナタアナタと小煩い
妻と娘とよく似た質でよく揉める
場の空気読み間違えて浮いている
自慢話楽しく聞いたことがない
聴診器外した医者が時計見る

鳥取市 倉益一瑤

心配の種を奥歯で噛んでいる
欲捨てた筈の尻尾が隠れない
梅満開今年もきつと生きられる

コーヒーが冷めてあの日は返らない
句読点ばかりの手紙書いてます
黄昏の写メはのっぺらぼうで来る

長岡京市 山田葉子

着るサブリ花柄フリル春が来た
菜の花で一品食卓にも春
アンテナを広げて春をキャッチする
ほどほどのとこでは口は止まらない
誤字脱字多くなっても励んでる
ちよつとだけテンポ合わせて歩けたね

大洲市 中居善信

目には目を何時か日本の駆けた道
バラの刺薄ら笑いをしてるのか
念仏がまだ生きている村に住む
人の裏覗くと寒くなるころ
油断すると座骨神経痛になる
何だかんだと七十に役が来る

米子市 竹村紀の治

授かった歯十三本になり傘寿
トコトコと喫茶店まで旅をする
命日も誕生日にも花と酒
親戚を集めてくれる仏様
一汁一菜焼酎を一献
日の丸弁当の梅は王様だ

河内長野市 山岡 富美子

魂がときどきショートステイする

ミステリーゾーンがあつて深い森

手放したものが煌めく万華鏡

ロボットのヒト化が進むサスペンス

あやとりの糸が介護で纏れだす

春雨に煙る廃炉と汚染水

橿原市 居谷 真理子

この国を清めたくつて梅が咲く

今年また男雛の横に置く女雛

おい冬よ春など真似ることはない

猫よりもでかい鼠になつてやる

神様は鞭を振り上げるでしようか

ご存知の通りいつかは死ぬのです

羽曳野市 三好 専平

ゴマをする力があつて生きのびる

原発にたよる企業の裏表

空爆が生んだ瓦礫とテロリズム

愛憎を越えたか和む春の潮

上りより下りに命かけている

パチパチと目を見開いて生きています

香芝市 大内 朝子

七十年の平和九条様さまね

傷心へ日にち薬を貼り替える

愚痴吐いてはいて姉妹で笑い合う

春色をモディリアーニの首に巻く

羽化をした噂話が風に乗る

穀脱げばまだ描けそう未来地図

三田市 堀 正和

まだ僕に春の便りがやつて来ぬ

皺の手をじっと見詰める誕生日

モノクロがカラーになつて行く噂

三猿もマナーのひとつかもしれない

そのうちを持ち兼ねている本の山

見るだけになつてしまつた野球好き

東かがわ市 川崎 ひかり

境界線あたりに落ちている不満

戦中派羽毛布団が軽すぎる

人間の無力教えてくれた海

自然体徹し切れない白髪染め

ガン切除また老春を楽しまん

ただ見てるだけで元気になる海

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

理想ばかり求めて肌が荒れている

ざわざわと春のうねりはこの身にも

おいくつですか聞かれてからの人嫌い

晴れた日は愛をいっぱい買いに出る

炎になりそうで指切りの指捨てました

さくらさくらお城の風は気の短か

岸和田市 岩 佐 ダン吉

こうなれば苦勞も味にしてやろう
手の温みやはり信じることにする

逆風に耐えた男だ目でわかる

一周の遅れ私は気にしない

笑顔など見たこともない鶴彬

色変える君に言いたいことがある

大阪市 川 端 一 歩

早起きの読書が今日のはじまりで

八十歳まだデッサンのままですが

挨拶を交わせる人はみんな好き

伸び代はまだありますと脳がいう

もう一度逢いたい人が一人いる

モノリザが泣いたらどんな顔になる

大阪市 津 村 志 華 子

不機嫌な朝は鏡を見てごらん

無為無策今日一日を棒に振る

まだ元気花の誘いに乗ってみる

ハルカスから飛んでみるかい奴風

鬱の字がこんがらがっている乱視

雨の夜の灯りは泣いているような

大阪市 栃 尾 奏 子

苦しみに満ち潮まではあと僅か

含ませる乳 母親という時間

幸せを乗せて闊歩のペビーカー

米をとぐ指の間の無限大

母になった記念日が来る五月晴れ

眼裏で輝く人生の奇跡

豊中市 藤 井 則 彦

念力に頼ってみようポックリ死

懐はさすがに深い笑い方

スマホでも貸してあげたい雪だるま

職場から温みが消えたIT化

エンディングノート開けては思案する

エア・ケイのショットに箸もふと止まる

堺市 奥 時 雄

モンゴルにチャレンジしてる大相撲

高いのに声も出せない溜席

臥牙丸の背中で勝負見落した

ベテランは怪我しないよう土俵割る

ミイラほど包帯巻いたプロ力士

遠藤の人気イケメンだけでない

西宮市 西 口 い わ ぶ

生き方を変えた震災二十年

テレビから竹灯籠に手を合わす

楚楚とした袴姿に春の雪

うれしい日雲の形もみな笑顔

ルーベから見えるものなど知れている

シナリオはもうなくて好い自在です

高知市 小川 てるみ

三寒四温裸木が息をととのえる
やさしさも愛も母には負けている
なるようにハンドル切ったのは私
王朝の栄華を語る遺跡群
石造彫刻珠玉の中の宇宙観

高知県 小澤 幸泉

友逝きて花見の宴が遠すぎる
自惚れも落ち込みも消え老いひとり
エレミヤのなげきの淵に我も立つ
自画像をやっと見つめるまゆ二本
遅れ咲きの梅が桜と重ね合い

松山市 古手川 光

訃報欄眺め余白を考える
傷付けりやしつべ返しをする地球
バイキングお皿に欲をてんこ盛り
不器用で口三味線はよう弾かぬ
呱呱の声今人生の初舞台

西予市 黒田 茂代

気の付いた方が給油をすることに
貰い物の耳当てとても暖かい
日持ちする水仙の花いとおしい
こころビッドにしとこう春の来る前に
春兆すほのかに耳のうしろから

唐津市 坂本 蜂朗

主婦業が苦だという人楽な人
主婦業を軽視子供が減ってくる
老いてなおご婦人の前背伸びする
亡き父母に会えるあの世の音がする
オレオレをからかつてみる暇潰し

唐津市 山口 高明

大臣と投資家喜ぶだけの株
僕だって嘘と人參大嫌い
七光り届かぬ世界アスリート
矢車の音カラカラと鯉およく
他人さま見えぬ所に干す下着

熊本県 岩切 康子

立春や俸せ連れて福寿草
乗り過ぎて欲した口は葉えう
芝少し駄目にしてでも草を抜く
行き違いメールに頼る外はない
会う度に手造りそつと渡される

弘前市 浅田 隆樹

独りなら多分南の無人島
杉林十年あつという間だな
金持ちも貧乏人もスマホ見る
電子音何がどれだか判らない
酒呑みのレットレルいまだ色あせぬ

弘前市 稲見則彦

アスファルト見えてずんずん春となる

さて何を蒔こうかしらと土に問う

廃校の花壇に春が咲き乱れ

稜線を越えると静か春の海

スマホにはスマホの良さと言うけれど

弘前市 岡本花匠

ふくろうカフェ縁起福貰う

テレビニュースふくろう喫茶ネタにする

豪雪も恐れず生きた花球根

マラソンを孫完走と電話口

味噌汁の朝餉で五体弾ませる

弘前市 今愁女

堅雪に線香刺して春彼岸

軒のしづく芽を覚ましたは露の臺

密かにもホワイトチョコのときめきよ

残生の今日がいちばん若い日よ

サクラサクわくわく待つて祝い金

弘前市 須郷井蛙

少子化に必要なのかりニアカー

設計図なくともしつかり花が咲く

年金はダウン税が増してくる

地下地下と土竜もあきれ果て

三角な話ばかり政治論

弘前市 高橋洋子

ワンコイン善意で心温まる

友の一押し歩幅を広げてみる勇氣

多数決蟻の列から踏み出せず

鍋ひとつレトルトで足る妻の留守

お念仏お一人様でボケ防止

弘前市 福士慕情

徘徊の妻と一緒にウォーキング

そっとしておこう越冬した蠅だ

引き出しに過去の想いを眠らせる

四面楚歌ひとりで呷る苦い酒

歳月に持病の数を増やされる

黒石市 相馬一花

厚着して参加している野球拳

新任の蝶は化粧を薄く塗る

やんわりと叱れば孫もおとなしい

町角で幸せを売る占い師

ガムを噛み会う人達に投げキッス

青森県 松山芳生

だんだん緩くなる仏教の戒律

モナリザの寝顔に節々が緩む

心行くまで深夜に聴いているワルツ

うっとりしてると変っていた画面

そよかぜに誘われて遠出する綿毛

さいたま市 星野育子

月毎にイベントがある商店街
無駄骨と見たことが生かされる

子の歳に驚き我が歳を思う
軽くなった猫の生命の重さよ

三・一 一もう四年まだ四年

東京都 まえで とよこ

箸のさき砂糖はあかん塩あかん
雪中にんじんほんのりあまい雪の幸

キンカン三つアンテナシヨップのおまけです

中二階の畳ひえびえ祖母ねむる

しろい扇をひらいたような祖母の髪

調布市 伊勢田 毅

映画祭無料で名画梯子する
拝むのも年功序列ある社葬

オーナーの貧乏ゆすり論す母

春の夢うつらうつらの安楽死

クローゼットそのまま眠る亡妻の服

横浜市 小野 旬多留

琴の音も仲間に入る梅まつり

連ドラが一言居士にさせている

申告は相も変らず手で渡す

株高になにもいわないプチ平和

女子アナのみんな美人の不公平

横浜市 菊地政勝

怠けたらそのまま老けてしまえそう
宿坊の朝に坐禅という試練

五線譜を外して生きる型破り

左脳だけ発達したか話し好き

台本の見直しをする夫婦旅

富山市 島 ひかる

どっこいしょこらしよと登る山がある

山歩き滑ると怪我のせぬ谷間

慎重に荒れた山道帰路はバス

珍しい味に出合える道の駅

鵜が鯉を丸呑み見てた露天風呂

可児市 板山 まみ子

引きこもる子がいることはひた隠し

さよならも言わずに消えた子の悲劇

御嶽に白煙未だ春彼岸

孫よりも猫が可愛い年になり

左遷地へ自己責任という仕置

大山市 金子 美千代

私の流儀が出来てきたひとり

あれもこれも今ではいとおいしい月日

都会だと分かる息苦しい空気

健康にいいとテレビにおどらされ

つくしつんつんとカゲちよるちよる春だ春

大山市 関 本 かつ子

高熱の孫に直ぐには行けぬ距離

若者のカップラーメンだけのレジ

書き直し考え抜いた方が没

広すぎる趣味の間口を閉じ始め

ケイタイを忘れてこんなにも気楽

京都市 清 水 英 旺

蟻螂の斧すら折れて喜寿無念

愛情の香りブレンドして叱る

春を呼ぶ雨はワルツのステツプで

句読点にも力がこもる決意文

寒ゆるむ鶯を聞く散歩道

京都市 藤 井 文 代

正論も反対あってあかりさす

幸せはあかりだけではもの足りぬ

百均は便利さプラス捨て易い

お喋りの雀呼んでるゴミ出し日

赤い血をたぎらせている孤独な夜

京都市 榊 井 宏 子

生きる意味さがす聖書に正信偈

テトラポッド胸を痛める拉致家族

お茶摘みはシルバー仲間のアルバイト

ぼちぼちと書いて締切り過ぎていた

わたしからますますおんな抜けて冬

八幡市 今 井 万 紗 子

約束はいいな四月のカレンダー

花吹雪約束どおり母が逝き

春めて約束ごとがまた増えた

花丸は貰えずこの世卒業す

最後まで笑える気力残しとく

大阪市 池 上 清 治

悪筆の問いに返信出しあぐね

答えにくい問いにはうまく話題変え

問いかけてはつと気付けば知らぬ人

川下り柳の芽ばえ愛でて行く

夕食は何と問う癖子も孫も

大阪市 江 島 谷 勝 弘

ジイちゃんが抱けばよく寝るゼロ歳児

検診は毎年同じCランク

美味しい安い飲み屋をみいつけた

紋切りでいいのだ誰も期待せぬ

白内障手術後の明るさに酔う

大阪市 榎 本 日 出

トンネルを飛んでゆくのはリニアカー

天国は必らず行ける夢の国

人間もいつか宇宙の星くずよ

熟年と言われてからは慌てない

サーピスで素晴らしい撒飛んでくる

大阪市 榎本舞夢

冬ごもり友は未だに出て来ない
片道切符返事ないのが気にかかる
雛祭りうれし便り連れて来た
サクラの頃笑顔で会える信じよう
見守り隊挨拶はずむ通学路

大阪市 大川桃花

汚染土が間借りしたまま四年過ぎ
つきさりで見てる瀕死の洗濯機
啓蟄にストーブ壊れ思案する
任すならリスクも視野に入れておく
竹トシボ越えたい屋根がひとつある

大阪市 奥村五月

カミソリと言われた父も認知症
お迎えの近いばあちゃんまだ貯金
定年後ピントの合わぬ妻と僕
妻に借り返せぬままに五十年
聞いたがて孤独の女の長電話

大阪市 笠嶋恵美

氏神様の福豆やさし福の味
歴代の暖簾が重い楽茶碗
修業積む味がうれしいカニ御膳
講演会死の概念を覆す
盆梅の思いのままに七分咲き

大阪市 小谷集一

飛ぶ余力少し残して夢を追う
日向ぼこ五百羅漢の顔を真似
全身の力を抜いて気を入れる
お祝いの額を夫婦で議論する
孫育つ早さで老いが追ってくる

大阪市 坂裕之

挑戦は歳に関係なく続く
信頼が根底にある友の檄
春の風思いのほかにきつかった
剪定はイヤと大空目指す木々
坂道を避けてゴールが遠くなる

大阪市 田浦實

お蔭様と素直に言える有難さ
良いことは照れ臭いから陰でやる
鍛千日練万日と武蔵喝
正義より家族は情で結び付く
初人荷妻の釘煮をつまみ食い

大阪市 津守なぎさ

啓蟄をめどにすっきり大掃除
桃節句少女にかえるちらし寿司
花だよりワクワクさせる遊歩道
旅日記元気な頃がなつかしい
陽がさして粉雪舞った散歩中

大阪市 寺井弘子

かさかさも艶やかにした老いの恋

遣り繰りの家計に妻の知恵袋

三分粥なつて家族に笑み浮かぶ

身の丈に合った生き方問われてる

温暖化地球にかげり現れる

大阪市 原田 すみ子

弥生の空ばあばと孫とプチ遠出

弁当に詰める栄養と応援

逃げられぬ介護へ後出しジャンケン

何人も斟酌しない神の空

白内障振り向くことが増えてきた

大阪市 板東 倫子

待ち兼ねた春動き出す気配なし

連休を楽しむための寝貯めする

戦艦と遺骨見付けた海の底

面白い程つまらない古いギャグ

祈るにも神も仏も居ぬ現世

大阪市 平嶋 美智子

ああだこうだ言いつ娘を頼り出す

四五年は見てやれないと娘に言われ

腰よ膝よ五年間はもつてくれ

木も花も春の光を纏つてる

花見会日本晴れと満開と

大阪市 伏見 雅明

蹟きが私の視野を広くする

鼻先でドアが閉まった終電車

うしろから撃たれ名譽の戦死する

明日あたり開くつほみを急かす水

円安になればなつたでモノ騰がる

大阪市 升成 好

借りに来た嘘に貸さない嘘をつく

じっくりと探せば部屋にちゃんとする

几帳面は止めよとストレスに言われ

まず乾杯つもる話はそのあとで

掌の中で生れる京和菓子

大阪市 松尾 柳右子

立春を迎えているがまだ寒い

電線に雀が三羽話してる

孫娘たずね来た日の嬉しさよ

献立の出来る楽しみ老いの坂

青空に両手を上げて深呼吸

大阪市 山崎 君子

紅いバラ明日開くかな美しく

古びなに愛着を持つなつかしさ

国会議員真白い髪もほつぽつと

テレビ見て昔なつかしお手前を

となりの子卒業式におしゃれして

大阪市 山本 加お里

露の躑指のさきから春がくる
ちぐはぐに坂を歩いてきた命
ピンチでもチャンスを待つてマイペース
木の根っこ掴んで登るハイキング
母の歳越えて元気な老いの坂

大阪市 吉内 タカ子

色紙離かけて笑顔の女だよ
片付ける余裕が少し三回忌
この足で余生を咲かす鍛え抜く
一言の冗談こわい世に学ぶ
昭和より悲しいニュース身に滲みる

堺市 柿花 和夫

思案する時も楽しむ花鉢
愚者の知恵半跏思惟像まねてみる
最後まで本音を隠すのも情け
写経百卷あふれた五欲収まらず
悪気など無いご陽気な見舞客

堺市 源田 八千代

以心伝心噂の友がやって来る
金柑の甘煮生姜湯携えて
満開の梅公園に従妹呼ぶ
おすそ分け行ったり来たりする近所
系列の施設を巡る高齢者

堺市 齋藤 さくら

雛人形飾った頃は若かった
安売りも値上げも二人マイペース
勧誘の電話にお金無いと切り
ストレスは指輪を買って吹き飛ばす
ホワイトデー自分の為にチョコを買

堺市 澤井 敏治

脱原発叫び続ける土踏まず
涙の音花びらの音311
今の世にも欲しい彦左の意見番
ふたり芝居日々一幕の禅問答
きつちりとくさめが春を告げに来る

堺市 遠山 唯教

春一番吹いてモチベーションあがる
友つよし癌に梗塞受けて立つ
父として話したいこと山とある
テニススクール最年長になりました
キラキラと光るむかしがなつかしい

堺市 内藤 憲彦

道の駅春の息吹を買いに行く
ハッターリを言うて眠れぬタイプです
私って嗜めば嗜むほど味が出る
花粉症昭和の頃は知らなんだ
メジャー蹴りふる巢へ帰る心意気

堺市村上玄也

頑固者へ誰も忠告などしない
広げ過ぎた風呂敷畳むのに苦労
忘れたい過去に蓋して前を向く
八合目辺りで萎む老いの恋
あれそれが通じなくなる老夫婦

堺市矢倉五月

童謡が十八番軍歌よりは良い
外出を止めて思案の見舞状
君の事開いて畳みまた開く
二階から降りて来ました青い鳥
使い勝手の良いばあちゃんできてやろう

堺市山本半錢

五・七・五身辺いつもドラマあり
身近過ぎ出来たドラマが恥ずかしい
生き甲斐の長いドラマに花が咲く
随分と生きて米寿にまだ足りぬ
熟年の戦意懐深く秘め

池田市栗田久子

あの日から五年法要にもゆとり
語り合う思い出の中白いバラ
猪名川の流れが春をうたい出す
入学に少しはしゃいだ文房具
お約束若葉の頃に逢いましょう

和泉市横山捷也

前歴は知らぬ同士でウマが合う
昨日今日明日も一人の春炬燵
サングラスかけて話題をすり替える
満ち足りてから望郷の念が湧く
カタログを眺めしばしの目の保養

茨木市島田誠一

支持率のかげんで蜜を塗る施策
お見舞と称し斥候視察来る
高下駄の響きでつくる和テイスト
母の目は見透かされそでまだ苦手
休日は妻の指揮下で又疲れ

茨木市藤井正雄

苦しさが表に出ない片えくぼ
鳩首評議思案の末の先送り
スカートで老いを引立て街へ出る
行間を恋の一字が往き来する
おらがくに新幹線の北陸路

大阪狭山市矢野梓

水仙の香を横抱きに墓参り
散歩道季節の変わる音を聞き
通帳と余命の先を計り兼ね
片付かぬ事も寒さの所為にして
明日から遣ると言う日がいとも過ぎ

河内長野市 植村喜代

ランドセル喜んだのに母入院
ちよつと馴れて入院の娘とメール
疲れますメールよりやつぱりテレフォン
目標は遠くにおいて夢を見る
柳誌のおかげ退屈はしない

河内長野市 大島ともこ

日本が誇る物作る技残したい
枝葉広げ過ぎて足元見えてない
病得て命の重さバネにする
大入袋金星取れと背中押す
子を育て親を送つて風になる

河内長野市 梶原弘光

ワンランク下げても欲しいサクラサク
金持ちなら良しかキャンブル依存症
あっちふらふらこっちフラフラ風見鶏
自己責任自問自答の長い夜
ルーキーが試食をされるオープン戦

河内長野市 木見谷孝代

従つてばかりは自分見失う
久しぶり孫と笑いの渦の中
綱渡りやめて階段一歩ずつ
横顔を描いてとせがむ黄水仙
ほどほどに食べて動いて風邪ひかず

河内長野市 黒岩靖博

ぞくぞくつと一目惚れして今の幸
風呂掃除しながら入る終い風呂
雪降ろし命がけだと老夫婦
徘徊に絶えず見張りの苦勞詫び
駅前に外国ツアー花ざかり

河内長野市 坂上淳司

びびつたが受けて良かった癌手術
先行きを懸念した子に介護され
若禿を悩むな皆すぐ老いる
ハグをして溶かしてあげる雪女
湯豆腐で一献外は細雪

河内長野市 谷久美子

階段を飛ばして急ぐ長い足
石段の下から老いの寺社参り
やって来た花粉黄砂にまた悩む
やる気無い日は一日が長過ぎる
贅沢も偶には良いと上臈

河内長野市 辻村ヒロ

ご褒美のエルメス眺めダイエツト
花だより旅のプランが追っかける
万歩計おしゃべりならばすぐクリア
海鳴りに残った火種慌てだす
磨かねば私の根っこ怠け者

河内長野市 藤塚克三

お互いがまた探しもの苦笑い

食間に飲む薬だけ残ってる

無農薬拘るわりにサブリ好き

使い捨てのマスク取り置く戦中派

花車なのに血の気多いと医者が言う

河内長野市 松岡篤

やんわりのNOをYESと勘違い

名門に入学の後息切れて

検査後に何かおかしい医者顔

人気機種モデルチェンジで店の隅

パソコンもデータデータでメタボ気味

河内長野市 村上直樹

綺羅星の中から選ったのにと妻

税務署に隠すものなど何もない

非常コックの用意はよいか再稼働

雑草の意地オレ流に生きて今

世事雑事思案さて置き花見酒

河内長野市 山室光弘

研ぎ澄ました空気が凜と吹く受験

親と子が敬語で語るふくよかさ

若い命までも守れず湧く憤怒

デリカシー知らぬと責めるこの平和

心打つ言葉も見えぬまつりごと

岸和田市 雪本珠子

無理をして笑い涙腺ふくらまず

夜の街ときどきガスを抜きに行く

今の世はドライでないと生きにくい

ブランドが風の戯言聞いてやる

エアメール他国の匂い持って来る

四條畷市 吉岡修

初対面名刺持たぬのは気楽

パソコンを閉じて時代劇見る時間

魚偏読めないままで食べている

スマイルを分けて下さい菩薩さま

体力に脳力気力夢と消す

吹田市 太田昭

人間の性妬んだ人に妬まれる

卵酒に酔って昔を皮肉られ

抽出しの昔の嘘を焼き捨てる

地球儀を回すとしがみつくニホン

口下手を庇ってくれる笑い皺

吹田市 木下敏子

露の臺優しい春をつれてくる

カレンダー楽しい予定花盛り

穏かな日々を送っている歩幅

何事もいい方向へ転ばせる

弱点を包んでくれた春霞

吹田市 藏田光子

戦中を跨ぐドラマは好まない
老いのせいか過激なドラマ避けている
チャンネル権子にゆずつては見そこなう
草や木の芽ぶきにほっと気もゆるむ
芽吹き時のぞみ大きく門出の子

吹田市 須磨活恵

花添えて日々穏やかに亡夫供養
目を閉じる亡夫の音が聞きたくて
無になれず馬鹿にもなれず生半可
川柳で私をメツタ斬りにしよう
無理をせず一人こじんまり暮す

吹田市 野下之男

命の値なんてこんなに安いのか
値段など見ないでいいよランドセル
足腰も言う事聞かず昼寝する
良い日だね窓辺の桜語りかけ
本物より美味しく見える寿司パンフ

高石市 浅野房子

春が好き老人だつときめくよ
デイサービスお連れが出来た二三三人
お花見に行く約束も出来ました
あれもクリアこれも出来たよ頑張れる
話したい会いたい人はみなあの世

高槻市 井上照子

パソコンに脱帽やはりペンをとる
励ましの言葉を杖に生きている
戻れない夢でよかった汗をかく
ヨッなんてかけ声で立つ老いた脚
聞き直す耳もやっぱり年をとり

高槻市 指宿千枝子

独り居の余寒を見舞うジヨウビタキ
啓蟄を待つて居ましたはナメクジ
台所から外へも匂うくぎ煮です
稚魚たちは跳ねた形で煮つめられ
子や孫に春一番を届けましよ

高槻市 片山かずお

悔やむのが嫌でやることやってみる
大物が策士か笑顔絶やさない
病室へ入る笑顔で声かける
努力したのにマグレでしょうと皆が言う
好き好きと言ってるうちに好きになる

高槻市 島田千鶴子

春の庭雑草すでに陣地取り
春一番野山に魔法かけていく
早や咲きの桜情報気が騒ぐ
加齢だと言われ反論出来ません
藪椿猫を抱えて日向ぼこ

高槻市 初代 正彦

優しさに羨もちよつと埋めておく
由知らぬまま代継いでいる家紋
耳鳴りの慣れて今宵もよき伴侶
控え目に見えてしっかりとんもの嫁
伝統の暖簾を守る若い腕

高槻市 杉本 義昭

心配の種が消えてたレントゲン
被災地の森に絆という根っこ
退屈で緩み始める顎の骨
ネクタイを結び直してひた走る
昭和史を掘ればでこぼこくねり道

高槻市 左右田 泰雄

庭仕事すませたあとの茶がうまい
背を伸ばしふとふり向けば梅の花
春浅し顔をくすぐる風の音
階段の手すりにすがり初詣
のつぽビルくつきり浮ぶ初御空

高槻市 富田 美義

新婚の小鍋に戻る子の巢立ち
晩成と言うが助走が長すぎる
後期高齢だれも褒めぬが元気なり
ワンランク下げて呼吸を楽にする
健さんの寡黙を真似る妻の前

高槻市 富田 保子

割り勘の二次会に出るウーロン茶
断捨離の中から生きる知恵拾う
釣銭が少し多いとうろたえる
昼のバス緑の多い街と知る
ポケットが多い服が好きな孫

高槻市 原 洋志

涙まで用意している道化服
終着駅赤や茶色の顔もある
くどくどがこびりついてる母の留守
もういいかいグーで春待つふきのとう
王様を悩ます世論調査表

高槻市 安田 忠子

家中に光輝くお雛さま
幻の優曇華遠い日を思う
達筆の友の字乱れ夜の底
飛び乗って調子が狂い医者通い
アナログのテンポが好きで走らない

豊中市 江見 見清

建て前では命のクラス分けはない
逆転の知らせ待ってる風呂の中
酒の席で聞いた裏話を忘れ
久し振り水溜りですとんでみる
ほちほちとは食べない昭和のひと桁

豊中市 松尾美智代

二番目の希望叶ってさくら咲く

二キロ減願って歩く寒い朝

心の中渦巻いている生と死と

不平不満言って幸せ取り逃がす

飽きもせず我家のお昼掛けうどん

豊中市 松村里江

散水に小さな虹を生む至福

水面下私の足も細く見え

着ぶくれて目線で計る空いた席

穴埋めに私でよけりや唄います

さりげなくブランド着てる神戸線

豊中市 水野黒兔

せせらぎに春は耳からやってくる

森の木の春の息吹とハイタツチ

山彦から春の切手で来る便り

舗装のない路地にほっこりほとけの座

絵馬の数だけの願いに春兆す

富田林市 片岡智恵子

やさしくされて心の貯金増えてくる

許す気はないが男の飯を盛る

許されぬ罪はまとめてあの世まで

後に道はあるが前には道は無い

元気ですからまだ病院に通えます

富田林市 関よしみ

逢うときも別れの時も花の雨

囀が瑠璃色で来てより戻す

すぐ傍の枝かも知れぬ青い鳥

子育てはゆとりと知った母は知恵

いかなごの釘煮を今日も炊いている

富田林市 中井アキ

包装は優しい形してました

スクランブルエッグと戦の話など

なな坂を越えてますます味深い

縄のれん端っこにいる泣き上戸

4Bで心の髪を温める

富田林市 中村 恵

誰が住む洒落たレトロな赤い屋根

モナリザを真似てもぎこちない微笑

流し目に一撫でされてから虜

難しかった一つの注文が

どなたにもバリアフリーのおもてなし

富田林市 肥山一文

孫たちのがやくひとみ家中に

散歩して元気を保つ米寿まで

失言がああ勢いを萎えさせる

お国柄治安もよくておもてなし

さすが安倍総理ヤジにも負けてない

富田林市 山野寿之

梅さくら春へ走っていく電車

少子化の遺産はブランコの孤独

悠久の月を写して千枚田

満天の星は明日へ続く窓

大輪を掴む受験の灯は蕾

寝屋川市 富山 ルイ子

馥郁たるかおり満開庭の梅

豌豆にもう花が咲く六・七・十

同居中風邪引きありがたみわかる

三寒四温啓蟄にまだ雪模様

復興はまだ遅遅として丸四年

寝屋川市 平松 かすみ

母の死も結局物の不足から

一人寝に時に母さん呼び寄せる

この道を唄えば涙腺がゆるむ

はこべらを摘んで試食をしてみたり

ママチャリを乗り継ぐためにヘルメット

寝屋川市 森田 麗

春が来たバロメーターとなるくぎ煮

くぎ煮待つ笑顔浮かんで小分けする

蠟梅に一・一七日重ね見る

蠟梅も微笑みやがて春の声

隠し金など無いと母頑固です

羽曳野市 安芸田 泰子

歲月や昭和一桁みな八十路

水面下で手を繋いでる雑魚の群

諦めがいいのですぐに眠られる

安心をすると背中が丸うなる

有頂天歳を忘れた後遺症

羽曳野市 宇都宮 ちづる

春一番絵手紙添えて釘煮来る

玄関に雛を並べて春を呼ぶ

梅便り桜前線ほど聞かぬ

百越えた母持つ友があちこち

少し惚け入った方が幸な百

羽曳野市 徳山 みつこ

三月寒蛇も蛙も二度寝する

笑おうかまだか沈丁花の思案

甘酒に生姜効かせば亡母の影

ダイヤと石ころ甲乙はつけられぬ

まず嫁にいうて息子の意見きく

羽曳野市 永田 章司

靖国に世界へ語る言葉なく

白黒を付けて作った敵味方

春一番要らない黄砂お土産に

一強の開いた道を軍靴行く

七十年表舞台は戦後っ子

羽曳野市 藤原大子

枚方市 海老池 洋

日向ほこゆつたり明日を考える
だいちゆきと二歳の瞳かけ値なし
頼ることに慣れていこうとおぼろ月
勝敗を越えた握手に拍手する

安倍首相にテレビの前で意見言う

羽曳野市 吉村久仁雄

合格の声受話器からあふれ出る

受け柙もあふれ至福の皿の酒

どんぐりの背比べほどのランキング

猫舌のままでぬるま湯ぬけ出せず

青信号待てずに右折する日本

東大阪市 北村賢子

生き延びた金魚世話焼く老二人

悲しすぎる地球美しすぎる月

なんやかや言うても共に生きた道

人形が旅して繋ぎ合う絆

はなまるの予定が増える春曆

東大阪市 佐々木満作

迷路から抜け出せないでいる翼

一端に孫は個室を希う

良いご縁ありますように鈴鳴らす

居合わせた医者に命を救われる

満月にピアノソナタを聞く至福

幸せの種へせっせと水をやる

気休めのサブリメントをとり続け

今日もまた発見のある散歩道

夕刊も隅ずみまでも読む余生

小さくなって招待席にいる代理

枚方市 小林わか

わかりよい母のレシピの味が好き

頼まれごとすぐに請け負いすぐ悔やむ

メイドイン何と上手に真似る国

たやすくは渡れない橋たんとある

これほどのできもう一度とは言えません

枚方市 丹後屋 肇

フロンティア耕すペンを放さない

外出着いちゃもんつける孫娘

弁舌に一票の耳傾ける

三寒四温後期が息を詰めている

ダウンジャケット蠟梅の主張聴いている

枚方市 寺川弘一

古希過ぎて診察券を持つてない

神さまのわたしスベアで居るつもり

朝刊よりも夕刊そっけなく読まれ

見覚えのある人に会い目を伏せる

桜前線ドミノ倒しと競い合う

枚方市 二宮 紫鳳

マイガーデンフレッシュ野菜のおもてなし
ひな人形春の陽ざしに目を細め
食卓に笑顔こぼれる春レシビ
ブライドを捨てて身軽な老いの坂
自分色やっと見つけた六十路坂

枚方市 二宮 山久

山水の石に癒やされ古都の旅
飛石に祈りをかけた幼き日
梅一輪咲いて子供のはしゃぎ声
年輪を重ねゆるがぬ石頭
ほら春が来てます土手の散歩道

枚方市 藤村 亜成

惨めさを悟り不発する怒り
抗えぬ雪 心奥に降り注ぐ
他人の痛みが理解できるなんて嘘
まだ説得が足りぬ頑なな扉
真っ白になりたい昇天してみたい

藤井寺市 伊藤 アヤ子

ちよつとの勇気で湧いた生きる道
診察券歳の数ほど溜ってる
体重も葉も増えてゆくばかり
病室から眺めた景色はビルばかり
退院の日は外は雪身にしみる

春とろりお伽話の中にいる
古都の春ゆっくり時が過ぎてゆく
優雅とは言えぬが不足ない老後
梅を干す母の背中を見て夏
多喜二の小樽と裕次郎の小樽

藤井寺市 鈴木 いさお

夫の居た席は今でも其の儘に
エンジンがかからず春は遠回り
はてなはて何処かで会った気もするが
ネジ巻きの時計信用しています
春彼岸いまでも会いたい人ばかり

藤井寺市 高田 美代子

上げ膳据え膳主婦は夢みる食事どき
断念したらし素直に紙パンツ
婆ちゃんは惚けたからねと言っておく
聞いてないそぶりの顔に少し笑い
ビルの谷間お寺参拝見落され

藤井寺市 増井 ヨシ枝

饒舌な言葉萎びてくる恐さ
一思案して立ち上がる外は雨
花たちの産声がする嬉し朝
平仮名で咲いた花です母の日に
冬枯れじゃないよバラ達の芽吹き

藤井寺市 吉田 喜代子

3・11東北の地に春遠く

あちらこちらの味を頂く春くぎ煮

御裾分け美味しい時のお漬物

愚痴言わず可愛く生きる老いの知恵

一冬を越したメダカの子沢山

藤井寺市 若松 雅枝

花咲いて骨董市も人だから

賽銭を弾もう明日は発表日

儲からぬ工場継ぐ子に嬉し泣き

子等集め遺産は無いと言っておく

乗り越して思わぬ穴場発見す

松原市 森松 まつお

うまそうなおデンに酒を追加する

ペアシューズ誰か気付けてくれないか

パソコンの将棋なかなかやりよるわい

外は雨起きるか寝るか午前四時

ロッキーマのテーマは僕を鼓舞させる

箕面市 広島 巴子

花便り友の誘いの声弾む

啓蟄を過ぎてわくわくウォーキング

春霞黄砂に花粉目が潤む

亡母の声しそうな方へ行く迷路

黙禱し復興の今思い遺る

守口市 井上 桂作

今日もまた夢を求めて昼寝する

オギャーと生まれ悦ぶ赤ん坊

流れ星地球もいつか遠い夢

難しい語句を並べて御満足

素人に理解できない歌が好き

八尾市 内海 幸生

直滑降できたところで醒めた夢

揉めごとは隣に届くほどでよい

料理するときだけ刃物持つように

即効の薬ほど持つ副作用

輪廻転生耐えればきつと良い朝が

八尾市 高杉 千歩

愛国心に燃えた日もあり選挙権

有難う口癖にして笑い皺

断捨離へ値札のついた僕の服

竜巻情報どうすればいい観覧車

領いてくれる友いて春近し

八尾市 宮崎 シマ子

ランドセル買わぬ一族みな大人

老は鈍感何を投げても当たらない

昨日逝った友に電話も通じない

せめてせめて春履く白の靴を買い

鮭食べたい漁師の父はもういない

八尾市 村上 ミツ子

啓蟄へわたしも町へ出かけよう

確実に雨のち春がやってくる

友の一句が早朝のラジオから

ざりざりの暮らしへプラスする笑顔

空き家増えちよつと不安になっている

八尾市 山根 妙子

旅の宿コック間違え水浴びる

いい具合川柳行きのバスが来る

仲の好い夫婦は加減上手です

苦虫の顔からギャグの出るギャップ

迷いペン終活ノートが進まない

大阪府 桑田 ゆきの

お喋りで脳活してる知恵袋

祖の魂籠る土蔵に小半日

内緒ごと役者一枚上の母

春雷の父の喝とも心打つ

出勤の靴ピカピカに魂入れ

大阪府 野田 栄呼

一歳児にいがった心和まされ

同居して不協和音が行き来する

悩みごと角度を変えて顔を出す

品位ないヤジを飛ばすか寝ているか

張り切つて掃除した日は来ない客

大阪府 初山 隆盛

春に恋愛に炎えますめぐる四季

春一番暗いしこりを吹っ飛ばす

愛一途妬心ふつつ煮えたぎる

星二つ愛の軌道を外れない

鎌倉の旅を残してそのまんま

大阪府 米澤 俣子

吐いて吸ういのちを繋ぐいいリズム

犬かきのままで向う岸が近い

アクセルは踏まず惰力で生きている

菜の花の続く向うは浄土だろ

脳回路のコック壊れて物忘れ

神戸市 白川 淑子

生きているだけで合格水を飲む

灯に濡れる老境の坂着ぶかれて

みんな留守お札数えるお婆ちゃん

怖いもの見たさ十年先未来

何もかも無かったことに通り雨

神戸市 能勢 利子

信じてると言われドキツとする私

また財布信じられない所にある

信じてた育児書今にそぐわない

薬を信じ老木地に還る

ベストセラ―の聖書読破なんて無理

神戸市 福原悦子

春の野を少し歩いて触れて見る

通院日カルチャーと予定表を見る

義理と見栄熨斗袋は身軽です

走馬灯絆嬉しい湯の香り

生姜湯飲んで今日は寒い日だ

神戸市 松井文香

逝く友の見送り出来ぬ家族葬

追いついて追いつ越したいと思う今

平凡な幸せ求めたい余生

性善説信じて見えた別世界

旅帰り門灯を見てホッとす

神戸市 山口美穂

春は名のみをひとりで歌う今朝の冷え

春の陽気も部屋干しにする花粉症

いかなごが一気に神戸を春にする

世の不穏知らず春だと露の臺

忘れるを素直に詫びて老い生き

神戸市 山崎武彦

添えられた一筆書きが謎のまま

ほろ苦い片恋でした十五歳

迷うてる心にレモン絞る朝

パンカーもブッシュもあつたなあお前

酔ってるな赤提灯の天下びと

明石市 梶谷和郎

ゆっくりと噛んで味わう余命表

蛇行する川に寄り添い生きている

片道切符もらった日から合わかぬ目

反省をゆるり紐解く仕舞い風呂呂

往生に一畳あれば済む身です

芦屋市 黒田能子

眩いているのです気付いてほしい

決心はまだだ終りのベルが鳴る

ツーカーで分かるだなんてありえない

何回も辛いニュースを聞かされる

一致団結ひと吹きの父の笛

芦屋市 竹山千賀子

切り札が内ポケットにある余裕

家族写真真みなラッキーな顔をして

指先の気儘に耐えるベンの胼胝

飛ばされたところで咲こうと種の意地

出番待つ補欠の意地を知るベンチ

尼崎市 市坪武臣

ひな人形今年も飾る爺と婆

キャンセルを信じて待つてゲットする

ブレーキを上手に掛けて生きていく

厳しかった亡父の叱咤が道しるべ

何食べたい五時になったら妻が聞く

言葉数少ない方に気を許す

尼崎市 長浜美籠

意気投合して箸を割る音揃う

ちよつとした幸せコンビニでチョイス

気遣いがなんと嬉しい蝶結び

もう何も言うまいハンカチを握る

尼崎市 春城年代

いちにちを感謝でしめる夕あかね

おこしやす亡母のことばがついて出る

布教のふたり電信棒で長話

うちの電話番号すらすら言えたことがない

客用の布団しばらく部屋の隅

尼崎市 藤井宏造

讚美歌を結婚式で歌わされ

顔上げて歩く人ふえ春ですね

ネクタイを遺影の妻に聞いてみる

電子音相手はあきてきた一人

生き恥を恥と思わぬようになる

尼崎市 藤岡りこ

アルバムに金婚までのドラマ見る

春の小川群れるメダカの新入生

使いこなさぬうちに新たなスマホ出る

絵馬抱え文殊さまにも春が来た

親切を受けて家路はほのほのと

有り難や今日もきのうと同じ朝

尼崎市 山田耕治

老人が前へ立ってもスマホ繰る

じいちゃんと爪の形もよく似てる

人形の警官立ててあるカーブ

宅配にすると大きいツツラとる

加西市 金川宣子

愛してる言えばボケたと疑われ

趣味の道広げて学ぶボケ防止

点と線繋ぐ旅路の時刻表

時刻表誤植はないと信じてる

行き帰りつり革立ちのダイエツト

川西市 山口不動

少年の心のままに本が好き

自治会の香典に要る領収書

無事祈るイスラム国の老人よ

手術後にやめたタバコをまたはじめ

ジイジイはバイキンマンと役振られ

篠山市 北澤稠民

なさけなや畳の縁にけつまずく

空想で金の成る木を買いました

怒るんじやなかつた私の聞き違い

着ぶくれて傍目気にせぬ齡となり

しのびよる老化の波に逆らえず

篠山市 酒井健二

三田市 北野哲男

半世紀たつてもたどる青春期
寡黙するその体力を蓄える

ああ選挙またも上げ底マニフェスト
語り部が減つて民話が消えてゆく

また春と出会う命に感謝する
山の音沈めて眠る山の神

山ほどのサプリを飲んで不摂生
日の丸を売つてる店が見当らぬ

居留地の疲れをいやす甘いジャズ

褒められて未練残さず桜散る

三田市 石原歳子

宝塚市 田中章子

行楽の時季にいつでも花粉症
川の水やさしい春の音がする

わたくしの春が来ましたイカナゴ煮
米を研ぐ楽しみ奪う無洗米

甘い物食べて鏡でみる笑顔
後れ馳せながらお肌の手入れする

計画は妻の予定を聞いてから
狭い道どちらもバックしたくない

故郷がいつしか遠くなつてゐる

恥じらいが残るひとりで貼る臀部

三田市 上垣キヨミ

西宮市 秋元てる

春霞タイプの人を見失う
添いとげて前には出ない影法師

雪だるま笑い崩れた様に溶け
杖なしで三途の川も渡りたい

身二つに分けたい義理のある誘い
バンザイの嵐二浪にサクラサク

ほんのちよいいい事あれば一日保つ
お寺にも殺虫剤が置いてある

五重丸つけてあげたい産んだ汗

和太鼓よしんしんと降り雪の里

三田市 尾崎一子

西宮市 足立茂

雛飾る貴女と私同い年
寒い日もメールで安否温い声

行間に滲み出ている深い意味
ぬかるみの百円探し鍵落とす

軋む戸を開けて無沙汰の春彼岸
ふる里は帰る子を待つ小宇宙

献金のことには触れぬ選挙戦
マウンドに伝令飛ばすあと一人

天然の私のままで野を駆ける

私のこと好きかと聞かれひと呼吸

西宮市 緒方美津子

雪解けてスポーツの花咲き揃い

判つて友を失う羽目になり

戦争を子供が好きといわぬよう

排ガスに耐えて新芽の御堂筋

やっぱり元へかえりたい仮設の灯

西宮市 亀岡哲子

鍋もバッグも軽いのが良い春がきた

誘われてステークへ行く派手づくり

友達の派手さに未だ追いつかぬ

あはやなあと肩を叩いて言うてくれ

大阪のおばあさんですワツハツハ

西宮市 福島弘子

春めけば影法師さえ喋り出す

冴えている今夜の私月のせい

思い出は青いりんごの君と居る

初蝶に誘われこの世まだ未練

気にかかるネールアートの家事育児

西宮市 山本義子

愚痴もろもろお昼寝すると消えました

爪を研ぐだれをどうこうでもないが

強がりの面ははがれて素のまんま

無事平穩いまがいいなら良しとする

八十路過ぎ今がほんとにいとおしい

西脇市 七反田順子

賀状こそ友の安否を知るチャンス

それなりに生きる実力備えてる

年金のため息ついて感謝して

両隣お耳が遠くなりはった

営業の笑顔忘れずふるさとへ

姫路市 古川奮水

土割って朝陽に笑う路のとう

腹八分心筋梗塞なしと言う

お受験に爪など飾る閑は無い

父さんが笑うと夕食ひかります

窓ガラス磨いて春へ脱皮する

奈良市 阿部紀子

男の子武者の如くは生きにくい

終の住処自宅かホームそれが難

胸の奥軍靴の音が聞こえてる

カタログの魅力に負けてバッグ買う

お土産がお見舞品に代わるとは

奈良市 岩本浩二

枯れてなお煩惱未だ冷めやらず

同窓会鬼籍の友が座の主役

円満の秘訣問われれば忍と言う

形にすれば牛蒡の様な我が余生

お迎えが来ぬうちたと呑んでおく

奈良市 大久保 眞澄

花柄からタオル地ハンカチも老いる

奇数にもキーキ切り分け民主主義

方向音痴三途の川に行きつけず

七転び転んだままもまたよろし

見よう聞こう話そうそれが自然体

奈良市 加門 萌子

川柳が趣味と言えないもどかしさ

愛犬の世話が趣味だと逃げている

世の中もとても変わった味気なさ

物騒な世だ外出は心して

子を持って人は幸せ一杯に

奈良市 辻内 げんえい

アラアの神叱ってほしいテロリスト

地球儀で孫の学力確かめる

主語のない妻の話聞き流す

日替わりランチ割り勘してる老夫婦

孫が去にゆったりつかる一人風呂

奈良市 天正 千梢

待つて承知した一件落着

約束が出来て飯のうまいこと

ひな祭り昼のごはんは花ざかり

血は争えん子も孫も垂れ目

一冊のノート出て来て気を良くし

奈良市 米田 恭昌

奈良町を昔の風が走り抜け

お供えが目当てで孫は鉦叩く

プロポーズ気迫に負けて半世紀

暗中模索余生手探りするばかり

青春の涙のしみた始発駅

生駒市 飛永 ふりこ

おめでとう桜も君にする握手

うどの白口からふわり春が湧く

振り向くと切り抜けたのが夢のよう

お隣の引越しヒューと索莫が

誇示すると実績さえも崩れ出す

大和郡山市 坊農 柳弘

空白のページを記念日で飾る

見て聞いて食べてデバ地下下半時

陽春の誘いにニューフェイスの笑顔

言い訳が追いかけてくる菜種梅雨

透き通った笑顔零れる茶摘み唄

奈良県 安福 和夫

産直の味届くまで間が欲しい

コンビニのお陰で都心より便利

駄菓子屋が自販機ルーム味気なし

コンビニが造る新たな食文化

今はもう便利社会に溺れそう

奈良県 谷川 憲

指先まで幽玄に舞う新能

氷雪の底に流れる春の音

楽しみの晩酌止めた再検査

遺品のなか元気な笑顔埋もれてた

飼犬は会話が分る顔をする

奈良県 中原 比呂志

タブレットお使いください尊徳像

尖った芯で書かれた社会面

生かされて奇妙な糸と絡み合い

将来を見据えて若木ねじ曲げる

絶筆のくやしき白い行があり

奈良県 渡辺 富子

すれ違うところを春の陽にかざす

花吹雪ふと哀しさがこみ上げる

栄光の過去を肴に友と酌む

二つ三つ許し病いと妥協する

気が付けば老いの樹海へ立つふたり

和歌山市 上田 紀子

綺麗だよ一度も聞けず四十年

カラフルでビタミン剤のような友

胃袋がなくても生きるその凄さ

神の御加護そろそろ番が来て欲しい

体力と気力で勝負巡る四季

和歌山市 喜田 准一

思いやりきつく言う時言わぬ時

念押ししてトゲが刺さった場の空気

夢に夢乗せて世間を広く見る

運不運献金補助金うらのカネ

人の世は言葉ひとつの右左

和歌山市 坂部 紀久子

老いるとは口から先に動き出す

老いるとはわたくしでない朝鏡

老いるとはさっきの事が空白に

老いるとは一日探し物に暮れ

老いるとは五ミリの段差大ごとに

和歌山市 武本 碧

播いた種思いも寄らぬ花が咲く

カルチャーショックそれから続く白い道

心にもパリアフリーを抱く介護

就活へ子のたてがみがたくましい

細胞をリニューアルして踏み出そう

和歌山市 玉置 当代

どとどとどあれから四年もう四年

収束もできぬ原発再稼働

一枚ずつ脱いで春風待つ土筆

さくらさくら音符が踊る春になる

かりそめの平和明日へ続くよう

和歌山市 土屋 起世子

桜さくら発光体のランドセル

良い町だ子ども元気に騒いでる

肩を揉む可愛い手にも策がある

失敗談愉快な人と褒められる

上を見ない暮しに眠り深くなる

和歌山市 福本 英子

二羽連れで来てた目白が今朝一羽

ダイケアーへ往く途だけは覚えてる

手洗いもうがいがいもしてて風邪をひく

年寄りが褒めて育てた子が叱る

握手した数を信用して落選

和歌山市 古久保 和子

春が来たキリンに花の冠を

道端で摘んで玄関春にする

コーヒーと紅茶で朝からのコント

身の丈の穴は時々微調整

時止めてこれから繭になるのです

和歌山市 堀 富美子

痩せよ増やせとドクターの無茶を聞く

有難う亡夫の汗で今日を生き

弱者には届かぬ総理四捨五入

あとのない秒針なのに炬燵抱く

振り向けば幸せ色の絵が廻る

和歌山市 松尾 和香

山鳥も遊ぶふるさと墓参り

きのくに線山にみかんの実り見る

幸せの風の流れを掴み込む

タブレット抱いてやりたい曾孫見る

四苦八苦母の言葉を思い出す

和歌山市 松原 寿子

刻々と焦りばかりが付きまとう

演技なら闇のトンネル抜けられる

沈黙をほぐすコーヒー胸に染む

羅列するばかりではないありがとう

糸電話樹海を抜けて通じ合う

岩出市 藤原 ほか

ゆるキャラに誘われ道の駅に寄る

この糸を辿れば母に出会えそう

旗を振り私の居場所主張する

おにぎりにギョツと詰まった愛がある

春雨に心の迷い洗われる

海南市 小谷 小雪

雑巾も使い古しが柔らかい

ひび割れた心にも保湿クリーム

既報のとおりお伺い致します

風除けになってもくれる木と遊ぶ

下に来て御覧なさいとされ梅

海南市 堂上泰女

納得のいかないままに娘を許す

父母も歩んだ筈の銀の道

暖房に守られ冬の蚊が騒ぐ

目白の番来ては励ます老夫婦

退院の夫へ紅白梅が咲く

紀の川市 宇野幹子

結論をせきたてにくる砂時計

同胞が逝って一合減らす酒

探梅の空と溶け合うスニーカー

肩パッドやっぱり力むくせがある

それからの川に介護が流れつく

紀の川市 北山絹子

マッサンとこっそり逢った白昼夢

正論を吐く鬼がいて救われる

少年の心に鬼も住んでいる

前向きに生きて行こうと決めた春

雑踏の中で姑を見失う

紀の川市 辻内次根

抜け殻はシャットダウンをした後に

枯れかけています一輪挿しの花

遅々として進まぬ時間飛ぶ時間

腺というところが緩くなっている

冷たさは多分最後と思う雨

田辺市 岡本昇

トリックと違って見てるコマージュ

諍いの妻に適度な車間距離

足踏みをして待ってやる思いやり

念入りにハンコの手入れ年金日

善し悪しのコントロールはまだ出来る

橋本市 石田隆彦

二軍には行かぬ決意の春キャンプ

国を割る戦哀れむ碧い空

余生です時間の浪費お許しを

いい答出してた脳に翳りみえ

懐の深さを知った母の海

和歌山県 岩本美智子

左右の目明るさ違う愛おしい

不思議ふしぎ夢の中ではよく見える

当り前の朝がうれしい髪をすく

春の雪写真の母も震えてる

3・11凍てつかせたい放射能

鳥取市 有沢せつ子

響き合う仲間があつて頑張れる

百均へ行くたび初の物がある

歩かぬ日スクワットだけ五十回

臆病でここ一番に知恵が死ぬ

相植をうって空気を丸くする

鳥取市 池澤大鯨

父手造り机使つて六十年

O型はさばさばしてることにする

目的地へ一目散という真面目

買出しに出れば毎日似たような

祝日に日の丸立てぬ意地がある

鳥取市 加藤茶人

どれ飲んで良いのかサプ利多すぎる

強がりを見せる鼻歌だつてある

人生のおまけ徘徊ボケ痴呆

ジイジイの響きが心地良く抱かせ

いつか来た道そんな世論が怖い

鳥取市 岸本孝子

芽吹く木に活入れられて万歩計

寿命延び生きて行くのも大仕事

返事を延ばし断りにくくなつてきた

ころころと選挙の度に揺れる基地

散歩にもメモと鉛筆持ち歩く

鳥取市 竹口清信

痛い目に合つて人間強くなる

春よ来い諭吉を連れて早く来い

また今度どちらも当てていない

花見ても欠伸しても春は来る

ふるさとが限界と言う札はられ

鳥取市 中村金祥

騙るまい敵は己の内にある

いい夢が励みになった手術の日

病室で他所の家庭をちと覗く

同部屋の夫婦に学ぶことがある

ストップのサイン逃さぬ勘磨く

鳥取市 永原昌鼓

雀卓を囲み深めた家族の和

力こぶ亡夫にあつたか見損ない

年金を杖に米寿の山登る

あの丘を越えれば亡夫待つ浄土

まだ卒寿なんて言いたい十年後

鳥取市 夏目一粹

悠然とぼっかり浮かぶ亡父の雲

這いあがる力見ました兜虫

どうしようもないのに金と夢よぎる

人柄はやっぱり顔に出るようだ

慰めのためなら嘘もいいだらう

鳥取市 西川和子

冬ごもりちよつと手の甲白く見え

へそ曲り白い鴉にしてしまふ

凝りもせずまだ止まらないお節介

手作りを孫がきれいに平らげて

孫が来て今日のドラマを盛り上げる

鳥取市 春 木 圭一郎

始めての印象だけで決めつけぬ
この人に会うも最後と思ひ会う
品のよい呑み屋行きたくなっている
もう一度会いたいほどのアホな人
生きているだけで慶びがあるたい

鳥取市 平 尾 菜 美

目の前に置いて安堵の備忘録
知らぬ間に書体崩せぬまま老いる
キッチンで仕切る宴がよく弾む
介護椅子目礼をして通り過ぎ
どろどろの迷いさらりと寺まいり

鳥取市 福 西 茶 子

洗濯機壊れ食費を削る羽目
たかが五キロされど五キロのダイエツト
春なのに夫は一步も外へ出ぬ
ふきのとう食べて心身春モード
雑草も私もぐんと陽へ向う

鳥取市 前 田 楓 花

命ある日まで桜は一途です
青春のかおり確かなエネルギー
五百円玉使わず貯めて車買う
ささやかな幸福貯まる貯金箱
馴染んでる私の癖がついた靴

鳥取市 横 田 春 名

ぎりぎりの値引き社運をかけている
晴れた日も雨にも文句ばかり言う
ミスマッチばやいた嫁の善さを知る
こっそりと愚痴捨てた姑善い顔だ
棘とげをまるい言葉で少し抜く

鳥取市 吉 田 孔 美 子

温暖化姿の小さな畑にも
地の果ての猫の芸さえすぐ見える
血管の掃除ロボットすぐ欲しい
小舟で真似るタイタニックのポーズ
やられっ放しが一番悪いのだ

鳥取市 吉 田 弘 子

悔しさに耐えた月日を倍生きる
五十五年終止符を打つ米作り
食料難なのか赤い実食べ尽くす
おんぶした孫を見上げる頼もしい
数値出ぬ歯の痛さ医者解るまい

鳥取市 両 川 無 限

それからの日々が楽しくなるメール
手の平に痛点がある愛の飢餓
春の栓抜くと大地がよくしゃべる
おしゃべりがとても楽しくなった手話
記念樹に芽ばえた小さい志

倉吉市 猪川 由美子

宇宙葬いっち最後は流れ星

行間に滲んだ皮肉見逃がさぬ

疑惑閣僚辞めて済むものではないぞ

ヤジ飛ばす総理さすがにお疲れか

佳子さまのマスコミ露出どっと増え

倉吉市 牧野 芳光

野良猫を拾って招き猫にする

パフォーマンスに「てにをは」を変えただけ

憤懣を放り投げたら落ちてくる

うぬぼれを捨ててナツメロ聴いている

保証印父は黙って捺している

倉吉市 山中 康子

新鮮な刺身のような匂がうまい

洒落っ気な百二の姉に怖じけてる

母の膝戻る亡骸抱きしめる

下心もうかくせないちぎれ雲

介護師の屈託無さに教えられ

米子市 後藤 宏之

夜寒でも桜舞台の袖で待つ

私には準急ぐらいが丁度いい

風呂上りかわい胸とバスタオル

湯たんぽを二ツ抱えて夜を越す

やせがまんしながら喜寿が過ぎていく

米子市 後藤 美恵子

春一番樹木の眠り醒まさせる

子どもらの羽ばたく空が汚れてる

ありがとうに苦勞一挙に吹き飛んだ

酒でなくカラオケで酔うバーが増え

野良犬がすぎる目付きで庭通る

米子市 中原 章子

アルバムにきれいなわたしだけ残す

この世ですら居続けられる場所でない

旨い物食べてやりたいことをする

頑張って昭和一桁顔を出す

神様に見透かされてる陰日向

米子市 成田 雨奇

幼な児を囲んで笑う葬のあと

隠すことないよ日本は全部島

言い訳はしない忘れたことにする

酒の爛二十数えてちようどいい

今日は今日明日は明日コップおく

米子市 吉田 陽子

根雪まで流してくれた通夜の雨

お布施に余るお経をあげていただいた

方向音痴夫を立てているのです

脳トレの家計簿鍛えがいがあ

ローカルクイズ足引つ張ったのはわたし

鳥取県 石谷 美恵子

花粉症姉妹の中で一人病み

カサブランカの花粉ゴメンとみなちぎる

胸奥の花は咲いたりしぼんだり

久し振り胸の振りが鳴り止まぬ

泣きそうな予感へ胸の戸を締める

鳥取県 岩崎 和子

カレンダー捲り三月風ぬるむ

ほんとうに微笑む春はもう近い

猫まねく日差し溢れるサンルーム

サンルーム日差しふんわり猫動く

読書する夫卒寿で春うらら

鳥取県 斉尾 くにこ

人込みで独りになれる文庫本

一行へ立ち止まっては長居する

活字とのまるい会話にまるい午後

本の森わけ入る知的冒険者

コートから寒さがしみる迷い道

鳥取県 竹信 照彦

炬燵から抜け出せないで見る吹雪

厳寒の中で卒業式の孫

合格を待つ身切ない三世代

荒れる日は池で寒鮎鯉釣った

さあ春だジャガイモ植えて雲になる

鳥取県 西谷 悦子

一对でいる温かさうとまじさ

一本の木として姿勢正さねば

ぶれぬよう呼吸守って二輪草

心技体ハツパかけねばサボリだす

楽しさのなかった昨日裏返す

鳥取県 細田 裕花

春の絵に合格通知飛んで来た

言い訳をしても忘れたのは私

犬きらい犬の言葉はわからない

ゆつたりと笑うあなたに隙がない

花贈る敵になるかもしれないが

鳥取県 山下 節子

階段を上る決断膝にきく

インフルの予防接種が効いてよし

第二幕頑張り過ぎはもう止めた

子等巣立ち第二幕です古い二人

写メールで事故の様子が届けられ

松江市 小川 注湖

修身で旗降る亀を学ばせる

日記帳わが生き様に文字が揺れ

土俵下粋な和服を見るテレビ

八十路のベッド故郷遠くなっている

にぎにぎする子の未来には自衛権

松江市 川本 畔

トンネルを脱ぐたび海が笑い出す
水少し含み哀しみ希釈する
元気かと聞かれデンデン虫と言う
雨だれかいいいキリンの涙です
月明り無言で掴む葱坊主

松江市 藤井 寿代

団塊世代 位置についてを繰り返す
ドンマイドンマイと図太く生きている
元栓が緩み日本も銃を持つ
落款を押したら抜けていく個性
コルク栓都合良い事だけを聞く

松江市 松本 知恵子

冬山に自生椿の鮮やかさ
暖房の部屋で食らった猫パンチ
もどり寒冬の孤独を連れて来る
一番星出て空のトラック野郎
亡き夫のケータイルルル鳴らしてる

松江市 三島 淞丘

引き金の指よ冷静取り戻せ
自意識過剰オトコはそれで丁度よい
ポトル一本心の窓を開け放つ
積年のペンを置くにも要る勇氣
泥舟で渡る世間の波高し

出雲市 石倉 美佐子

立ち止ってはならない川柳の小道
桜木も花開く日を知っている
精一杯咲こう吾が人生を春の日を
細雪牡丹雪降る日は夫とお茶にする
古い吾が家の一本の桜の木

出雲市 伊藤 玲子

春の陽に誘われ泪壺に蓋
「お帰り」と現れそうあなた
口遊む「おもいで」歌詞の切なくて
生真面目をチョンと破いて笑わせる
メダカすいすい君が呼ぶまで群にいる

出雲市 岸 桂子

押しピンの責任感が錆びている
砂場には昨日の夢がそのまんま
川柳の話ばかりをして見舞う
仏飯のゆげから今日が始動する
降りしきる雨約束は破れない

出雲市 小白金 房子

説法の灯心の鬼にげる
家族の目信じ羊が寄ってくる
おもいやり心を交す春のお茶
春眠を誘う農家の掘りこたつ
荒むしろ育てた頃の優良児

出雲市 多久和 敬子

トンネルを越えたら春がもうそこに
カレー派とラーメン派とで揉めている

一言が言えずに今日も悔い残る

新聞に軽く包んでお裾分け

鏡見て自分で自分慰める

雲南市 松本 昌

人口の減るこの町に新庁舎

最大の雇用は市役所過疎進む

さもあらん嫁の立場と姑と

家柄は知らぬが長押し槍があり

老人性涙腺炎と言っておく

島根県 伊藤 寿美

横浜へ受験に行つた赤い靴

マッサンを時計替りにする朝餉

雑踏の中で緑を消す蛙

コンセント抜いて退路を断つておく

弟の癌の転移を聞く弥生

広島市 岸本 清

春近し体内時計遅れがち

夢抱く春合格に笑顔咲き

春告げるオープン戦のうぐいす嬢

成果主義民間よりも国会に

混雑も渋滞もない蟻の群れ

竹原市 石原 淑子

山際を染める朝陽とコーヒーを
還付金あれこれ描いて消えていき

ドア一つブライバシーと孤独死と

どこでもドア六十路最後の誕生日

キラキラと進級の孫若葉萌え

竹原市 岩本 笑子

菜の花や今日は病院行く日だが

誰も知らないから生かされている私

野菜より背伸びしてはる草の意地

焼酎の湯割りで終る夫の酒

何度でも咲きます椿待つてます

府中市 藤岡 ヒデコ

世代交代町内でさえ知らぬ人

今にして主役の頃を懐かしむ

上昇気流そうだから美容院

今からでも追いつく努力してみよう

インフルの熱には負けた医者嫌い

宇部市 平田 実男

札束がテコで人間よく転ぶ

真白いマスク美人にしてくれる

肩書きが取れて自分の顔になる

永田町リコールしたい人が増え

交付金出して危険を眠らせる

(前月分) 松江市 川 本 畔

快晴に今朝はわたしを丸洗い

少しだけ威張った人を憎めない

二月の沼よどうも聞き耳立てている

淡雪は命貧しいもの濡らす

丸め捨てたページを思い出している

(前月分) 京都市 榊 本 宏 子

ムンクより妻の笑顔が怖い時

生きるのに欲が出てきた無料パス

東海道まっすぐ行けば我が家です

喜寿の女子会孫の受験と墓の事

軒先にはしご吊るしたまま無住

(前月分) 鳥取市 平 尾 菜 美

ありがたや決意固めた嫁が来る

ちゃん呼びの嫁が笑顔で振り返る

お茶の間の嫁が笑顔に徹してる

嫁さんの愛書き置きの中にある

大家族気兼ねの嫁に配慮する

第148回 大阪川柳の会

日時 6月2日(火)午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「苦」 立野 野薫 △「水」 松本 榎子
△「孤」 岩佐タン △「いろいろ」 森中恵美子
会費 1000円 欠席投句 6月1日まで 本田智彦宛

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

第66回 玉野川柳大会

とき 7月5日(日) 午前10時開場
ところ サンライフ玉野
(玉野市総合文化センター前)
玉野市宇野2-2-20 TEL.0863-21-5111
JR宇野駅より徒歩10分
JR岡山駅より洪川行き特急バス約1時間
玉野市役所前下車 徒歩2分
兼題と選者 (男女選者による共選)
「創」 筒井 祥文・本多 洋子
「挽歌」 徳永 政二・吉松 澄子
「魔女」 小島 蘭幸・森田 律子
「煽る」 桑原 伸吉・柴田夕起子
席題 当日発表 前田 一石 選
読み込み可・欠席投句拝辞

投句締切 11時30分
会費 2000円(軽食・発表誌)
問合せ先 〒706-0132 玉野市用吉651
前田一石 TEL.0863-71-1781
主催 川柳玉野社

あかつき川柳会 創立15年 「あおぞら」第3号 誌上川柳大会

課題と選者 (各題2句 共選)
「70」 北野 哲男・古今堂蕉子
「活」 赤松ますみ・高瀬 霜石
「ひらく」 大田かつら・藤原 一志
自由吟 太田紀伊子・川端 一步
特別企画 全投句者から一人一句抄・自
選句欄を設け誌上に掲載。このページ
が誌上大会参加者名簿になります。
必ずご投句ください
投句料 1000円(切手)はご遠慮ください
投句締切 7月31日(金) 消印有効
投句先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14
江島谷勝弘 TEL.06-6933-7351
問合せ 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-206
鈴木いさお TEL.072-952-6855
賞及び発表 各題最優秀句に賞呈
発表誌「あかつき」10月号全投句者に呈
主催 あかつき川柳会

川柳塔の

川柳讃歌 ⑬

木津川 計

半分は鬱でわたしが出来ている

吉田 陽子

低くて重々しい声で「芳一！」と呼ぶ侍の命じるままに盲目の芳一は高貴なお屋敷で壇の浦の合戦を琵琶で弾いた、筈が墓地の中の安徳天皇の御陵の前でうたっていたのだ。

命じられるままに墓場に行ったのは爆笑王桂枝雀さんでもあった。家人の留守中、宅配便が届いた。その包みの紐で自死した。宅配人がそうせよと命じられたと思えたのだろう。枝雀さんは重度の鬱であった。鬱と聞くと僕は親しかった枝雀さんを思い出して今も辛い。だから陽子さんを僕は本当に心配するのです。

深刻な話はお日さまの下で

大内 朝子

「二人が睦まじくいるためには／愚かであるほうがいい／立派すぎないほうがいい／立派すぎることは／長持ちしないことだと気付いているほうがいい／…正しいことを言う」と

きは／少しひかえめにするほうがいい／正しいことを言うときは／相手を傷つけやすいものだ／／氣付いているほうがいい／…ゆつたり ゆたかに／光を浴びているほうがいい」

吉野弘の「祝婚歌」を読むと僕はいつも泣きたくなる。深刻な話もお日さまの下がいい。

主題歌もマッサンもいい嫁がいい

中居 善信

主題歌が耳に馴染んだのはあくセント通りに中島みゆきが作曲したからだ。嫁の良さは日本語の不利を目標の動きでカバーしていたからだろう。実際エリーの目の使い方に抜群の演技力があつた。

マッサンに感心したのは演じた玉山鉄二が京都の生まれ育ちで広島弁に徹したことだ。モデルの竹鶴政孝が広島県人だったからだ。広島県人が聴いても違和感がなかったという。よほど語感が鋭いのだろう。善信さんに頷く。

磯自慢わたしは歳をとりました

辻内 次根

着流しで下駄履きが近くを歩くときの僕のスタイルだ。ある日、おばあちゃんに連れられた四、五歳の女の子がじいーっと下を見て歩いてくる。僕の下駄を見ていたのだ。妙な格好と不思議に思えたのだろう。

行き違うとき、こんな会話が聞こえてきた。

「昔の人はみんな着物着て下駄履いてはったんや」「あのおじいちゃん、むかしのひと?」

次根さん、お互い昔の人になりましたなあ。

珍しく車内で新聞読んでる

北野 哲男

実際、昔の人は新聞を車内で読んだ。満員の通勤電車では扱げられない。だから夕刊2紙はタブロイドになった。それでも読み手は少なく、ことに若者はスマホに夢中だ。

「スマホやめるか、大学やめるか」と入学式で信州大学長は問いかけた。時代錯誤の反論もあるが、本を読もう、友達と話をしよう、自分の頭で考えようと語った学長は正しい。哲男さん、空いた車内では新聞を読もう。

真似ごとを少し覚えて嫁にゆき

今井 万紗子

失礼ながら万紗子さんも真似ごとを少し覚えて嫁がれたのです。最初から完璧の主婦にどうしてなれよう。落語に女のアホが一人もいないのは生活の場で女はみんな賢くなっていったからだ。料理に子育てに家計のやりくり、内助の功に…、アホな男は賢い女にたしなめられて貧乏所帯はからくも維持されてきたのだ。万紗子さん、ご息女はやがて真似ごとどころか、本物一人前の主婦になられます。

(「上方芸能」発行人)

白選集

小島蘭幸

僕を忘れた点滴の義母を見る
義母の手に触れた最後の夜だった
死に化粧言いたいことは無かったか
青空は義母の笑顔よ義母送る
句を語る僕がテレビにいる不思議

宮西弥生

春光の泉魚も子も主張
このドアを開けると眩しい畜たち
いく先が見えない背に傷の数
束縛のない公園に子が光る
若ごぼう八尾発信の元氣玉

八木千代

春の切手
山なみを越えれば春へまっしぐら
ふつうに歩む昨日と誤差のないように
テレフォンの先に水先案内人
ポストまでは二足歩行で行けるはず
こころ届けてくれそう春の切手なら

旅三日今抱くウツを捨てに行く
ゲリラ豪雨のすごさ深海魚は知らぬ
弁舌は巧みだけれど愛が無い
戦力外通告プロの根をこがれ
友情のバラは疑問符など抱かぬ

両川洋々

板尾岳人

誰にでも僕を褒めてる憎い妻
針の穴覗くと見える母の舟
便秘ぎみ死ぬのは少し先にする
戦争に征きたいけれどバスポート
太平洋でメダカを釣って来た自慢

奥田みつ子

歳下の兄嫁が逝き言葉なし
庭の梅待ってた義姉はもう居ない
亡き父母の心も重ね手を合わす
友の知恵借りて迷いを吹きとばす
老いてなお迷える羊空仰ぐ

河井庸佑

難題が友の助言で道開け
資金繰り受けた情けが身に染みる
手の内は見せず五分五分石並べ
これ以上追求しない母心
土壇場で継った恩は忘れな

川上大輪

バランスの悪さは笑顔不足かも
悪い夢だった目薬さしておく
一期一会出会いたくない人もいる
透明な水に騙されそうになる
ときどきは眼鏡のずれを直して

小西雄々

天網もたまには漏れて神なげく
奮い立ってみたが今年ももう臍月
重そうなピアスが少し気にかかる
ポケットも口をあけたい喋りたい
言葉の裏が少しは分かる年になり

斉藤 効

百円の税金百の使い道
しつとりと撫でると石も語り出す
語り部の訛りで生きてくる伝記
蟹は泡ぶつぶつ試行錯誤する
搾乳は軽音楽を聴きながら

新家完司

八百万の神より多い賽銭箱
神さまも神主さんも飲み仲間
仏壇の中にも春の風入れる
春風に耐火金庫は冷えたまま
デリケートなハートを守る皮下脂肪

津守柳伸

心病む追悼式の両陛下
おむすびの美味さを知っている庶民
招待の旅は部屋食カニ三味
雨台風錦市場の人いきれ
枯れ葉舞う風情ひっそり高台寺

遠山可住

頭から足へじわじわ老いが来る
それぞれの花のいのちよ句を咲く
郵便局で忘れた一円とどけられ
パンダの子なみに抱かれた記憶なく
年金がゆっくり腰を落ちつけぬ

都倉求芽

南風往きつ戻りつ春を呼ぶ
春は来る わかっても遅い春
まな板が下手だ下手だというリズム
風呂温度今日の日和へ1度下げ
震災日陰に残る無人駅

土橋 螢

八十五歳そんなに無理をしないで
尻っ尾隠して善人の真似をする
友だちを賞めて仲よくしてもらう
父ははのうしろの山に雪が降る
国を愛するこの青空がある限り

西出 楓 楽

孫六人物入りなのをよるこぼう
サングラスのお方にジヨークことさらに
歳とつてゆくほど好きになるわが家
見回せばメリーウイドーたんといふ
冷蔵庫にビール忘れたことがない

仁部 四 郎

一円の嘘でドラマの幕があき
これからもよろしくという初任給
十円をあの時借りてダイヤ婚
しあわせは月謝を払う定年後
国債を買えば家計簿赤ランプ

林 瑞 枝

名医との出会い寿命がまた伸びる
ちちははの足跡背筋から消えぬ
風の子の拍手で風の泳ぐ空
腕に虹抱ける若さを借りて来た
チャリテイスヨー皆熱唱の声を張り

前 たもつ

太陽と雲に寄り添う余生です
いい幹事飲めない者に差をつける
川柳に笑い取り入れホスピスコ
大阪城いい汗かいてひと回り
健やかに八十代を生きている

政岡 日 枝子

老いの仲間と珈琲店で遊んでる
どの群にいても私だけ沈む
淡々と背後にせまりくる暮色
穴埋めて埋めて家族らしくする
淋しさは何も書くことない日記

三宅 保 州

騙し合いなら人に負けると言う狸
所により事故が起こるでしよう今日も
平行線のままのレールで役に立ち
ヤマトと言えば戦艦と言うご同輩
道ならぬ荷物を背負い込んでいる

川柳 水流会 第11回 誌上川柳大会

兼題・選者 各題2句
未発表作品に限る 重複投句不可

「慕 う」	安田 翔光 } 共選
	上野 悦子 }
「 幻 」	野島 全 } 共選
	辻 嬉 久子 }
「 残 る 」	村上宅 水筆州 } 共選
	小島 保州 }
「 扉 」	森中 惠美子 } 共選

投句要領 所定用紙または便箋に4題 各
2句 計8句を列記。住所・氏名・
電話番号・所属川柳社を明記のこと

投句料・賞 1000円(定額小為替ほか・発表誌呈)
各題選者の特選1句・準特選2句に
賞状・賞品謹呈

締切 5月30日(土)

送付先 〒671-1104 姫路市広畑区才4-12-306
三好 律冬 方 水流会事務局 宛
主 催 川柳 水流会

第18回 鳥取県川柳文芸大会

日時 7月12日(日) 午前10時開場
場所 新日本海新聞社 5階ホール
(JR鳥取駅 南口から徒歩3分)

兼題と選者

「決める」	久保田千代	選
「喉」	足立千恵子	選
「熱い」	平山 繁夫	選
「化ける」	春木圭一郎	選
「なぜ」	両川 無限	選
「ネット」	平尾 正人	選
「老」	細田 裕花	選
「苦い」	平尾 菜美	選

席題なし 出句各題2句 当日締切 11時30分

会費 当日 2000円(軽食・大会誌呈)

欠席投句 1000円(大会誌)

欠席投句締切 7月7日(当日消印有効)

用紙自由(事務所にて清記)

投句先 〒680-0074 鳥取市卯垣1丁目110

夏目 一粹

第18回 鳥取県川柳文芸大会実行委員会事務局

第16回 生駒市民川柳大会

日時 7月19日(日) 12時30分 開場
会場 生駒市コミュニティーセンター
(セイセイビル)

近鉄生駒駅から南へ3分

事前投句 「平 穩」 小金澤貫一 選
ハガキで1句 6月20日締切

出席者に限る

宿題 各題2句

「ひとつ」 居谷真理子 選

「泳ぐ」 大西 将文 選

「ひめやか」 吉川 哲矢 選

「ティッシュ」 阪本きりり 選

「消す」 森中恵美子 選

出句締切 13時30分(欠席投句拝辞)

会費 1500円(発表誌呈)

事前投句先 専用ハガキまたは普通ハガキにて

〒630-0253 生駒市新旭ヶ丘14-7

松本 榎子 宛

問合せ 松本 榎子 TEL.0743-74-6588

主催 生駒番傘川柳会

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

水いらず きつねうどんへ箸を割る
鯛よりもピフテキにする誕生日
ほろほろの旗だが父は手放さず
もめている土地とも知らず春の草
ざくろ割るおんなの業を見る如く
いわし雲 鱗の数とわが罪と
フライパン さんまの詩を忘れしや
初版本 誤植のままで値が上がり
職人がネクタイをするめでたい日
置き薬よく効く母も今は亡し
酔眼に美女ばかりなり酒や佳し
意味もなくただ万歳をして別れ
札東で裏をたたけば軽く開き
まぼろしの兵士は雪の夜戻る
銀行は視線の中で札を読み
生き死にや今朝も変らぬ顔洗う
凡夫婦半分ずつの知恵で暮れ

水煙抄

西出楓楽選

福山市 藤後卓也

冬眠から醒めて綺麗な絵の中へ

春が来る嘘の上手な蝶連れて

ハンカチに包む仕合せだつてある

葉の花の笑顔に今朝の絵を貰う

夢いっぱい入るポケット持ち歩く

口下手が真面目に綴る春の文

河内長野市 穂口正子

ひとまずはざっくり縫った恋の傷

老いらくの恋のほつれをかがり縫い

一日の帳尻合わせ仕舞風呂

おーいメガネどこに居るんや出しておいで

老いた今金の力を思い知る

犬も逝き身辺整理でもするか

高槻市 松岡重子

手鏡に心の中をのぞかれる

しんがりに母が寝込んで風邪終る

合併で巨大建築欠伸する

一杯のコーヒーパーンを眠らせず

ほめること探して帰る参観日

勘という武器が膨らむ母の位置

宝塚市 井上風花

義理チョコと言いつつ赤く染まる頬

チョコよりも饅頭ほしい高齢者

ヅカガール足音軽く春を呼ぶ

店先の花にひかれてホットティー

絵にかいた花では酔えぬ花見酒

アベ政治こわいけれども株は買う

玉野市 片岡富子

目標があるから今日も前へ出る

温もりに飢えて並べる木の器

多機能にもて遊ばれて連れあう

利き腕に頼らず両手使っている

友と会い昭和の心懐かしむ

ユニクロに夫のセンス任せている

岡山市 工藤 千代子

水溜り跳び越えたのに水たまり
春なのにこっそり飲んでいる薬
切実になったピンピンコロリ終活と
ネガティブを叱る私の昼下がり
死ねませぬ部屋の汚れが気にかかり
沈丁花春を知らせて散りました

札幌市 斉藤 宏子

プチ家出ぐるつと散歩街の中
糸切れたマリオネットは独りすね
三味線の糸もロックの波に乗る
3・11木々の新芽の応援歌
冬明けか春の知らせのなごり雪
誕生日独りで祝うバラ一本

シドニー 坂上 のり子

会津福島人の強さを知らしめる
ありのままどんな風にも吹かれよう
ひんやりと秋が漂うゴミの朝
背に冷気ふつと感じる虫の声
生きることは命がけだと知るこの世
永遠に続く幸せなんてない

箕面市 大浦 初音

腹の虫治めてひとつ深呼吸
友の訃報見上げる空に星ひとつ
フクロウは不苦勞と言ひ福を呼ぶ

いつのまにまわり歳下多くなり
衣食住足りて人生中の中
建前と本音のはざまゆらく意志

福岡県 本田 さくら

朝起きる心体に捻子を巻く
風強しせんたく物が肩を組む
極上の空の青さにふとん干す
うちのトイレちひろの子たちキヤツキヤツキヤ
誕生祝クリスマスローズひそと咲く
雪国を思えば寒いなど言えぬ

大阪市 大治 重信

ひと眠りすれば変るよなやみごと
横文字で何の会社かわからない
T P P 合意は無理と牛がなき
戦争の亡霊武蔵海の底
筋道を立てて話せと膝を寄せ
この世には未練はあるが金がない

米子市 見山 温子

継続は力と孫に言い聞かす
雪が降ることたつの番とテレビ番
孫自慢してはならぬと空気よむ
検診日卒業ですよい笑い笑顔
古里は雪にすっぽり春を待つ
回覧を持って出たまま昼になる

松江市 武島 千代枝

目覚めれば先に起きてたふきのとう

鶯の一声追うている窓辺

あせらない花はまだまだ蕾です

労りの言葉で癒える気的病

変り映えしない日記で今日を閉じ

出雲市 黒目 英男

辛抱しこれからのぼる七十路坂

男気のカープ黒田に期待する

株高を実感できぬ好景気

生き様を川柳うたに託して啓発す

血液の検査で知った黄信号

雲南市 菅田 かつ子

背伸びしてみてもやっぱり届かない

古びた器へ愛の溢れそう

八十年生きてやさしい笑い皺

ところとところとところと聞く法話

老松の姿に祖父や亡父の顔

岡山市 藤成 操江

コーヒーにパン代りばえせぬ朝の膳

会話してメール出来ればそれでいい

本当は自覚している意地っ張り

駆け引きの策は苦手で落ちる穴

丸い背はわたくしだったウインドウ

笠岡市 藤井 智史

若者になったつもりのハイボール

気がつけばデクレッシエンドの恋でした

婚活が無理で終活考える

トーストにべったりバター塗る至福

幸せの最短距離にいる魔物

瀬戸内市 東 横 ますみ

善人の真似をするから肩がこる

休日は五臓六腑の栓を抜く

唯一の味方わたしの影法師

ジャンケンポン負けた順から風になる

少しでも媚びてみました春の宵

岡山県 池田 たか子

冬籠り梅の香りに半歩出る

焙烙も亡母もおぼろに雛飾る

沈む気に笑みがこぼれる桃の花

素っぴんが怖くてマスクするチャイム

他人様と比べないよう不幸

岡山県 高岡 茂子

合格の知らせ待ってるノシ袋

宿題のないのを選ぶ趣味講座

三日分まとめてつける日記帳

さびしいねオレオレからも電話ない

シュレッダーかけたい過去を積んでいる

岡山県 田中 恵

アンテナを張って図太く生き延びる
癖のある文字がやさしい花便り
いかなごが春一番の味で来る
ワンパターンのおかずに笑顔盛り付ける
今日もまたいつも通りを繰り返す

尾道市 小畑 宣之

春が来た肩肘腰の痛みとれ
新しい国は武力で生まれない
最新のスマホも明日は古くなり
淡々と日は過ぎ欲しいアクセント
本心を打明けやつとよく眠れ

尾道市 日谷 寛

生きてゆくことを支えて家族の和
家族っていいな心に灯を点す
ほころびを直す家族に知恵がある
家族が耐えた反抗期倦怠期
家族にも自由不自由運不運

三原市 鴨田 昭紀

七人の敵とまみえた大いびき
魂を抜かれて貝になっている
納得がいくまで磨くスリガラス
任されて男の顔になっている
世間体ばかり気にする疲労感

山口市 中前 幸子

黄昏のワルツを夕焼けの風と
春の絵をゆつくりと描くカフェテラス
人生いろいろ糶を一匹飼ってます
涸れ川にころんと干涸らびた思考
消えない影と昭和を語り継ぐノート

松山市 栗田 忠士

まだまだと明日へ続く舵を切る
一線を引くと空気が軋みだす
スーパード野菜の匂を見失う
端っこに座って風を読んでいる
ミディアムです今の私の焼き加減

北九州市 小松 紀子

苦を脱出人にやさしい風になる
当り前の日常とても有り難い
がまん我慢お腹の虫はそう言った
俺オレに騙される程金がない
いつ聞いてもとても嬉しいありがとう

佐賀県 真島 久美子

歯医者さん死刑執行待つように
じゃんけんのパーは心を包む紙
カラス来て夕陽は夕陽色になる
変わり者地球人ではあるけれど
食いしばる歯だしっかりと治療する

弘前市 高森 一 吞

もう四年一本松が震んでる
復興の掛け声だけがこだまする
三陸のおいしい牡蠣で元氣だす
仮設でも肩を寄せ合い夢を追う
復興の足を折つて原発だ

塩竈市 木田 比呂朗

休日を数え吐息をつく五月
出不精を押し出すように日本晴れ
休診はこよみ通りと無愛想
色褪せを自覚しているベアルック
野党にもグレー献金ある不思議

東京都 川本 真理子

定年を迎えた空は弥生晴れ
一つ荷を降ろして道を振り返る
玄関に使い込まれた杖を置く
光の春奥ばかり見た目を転ず
還暦の空にこころを解き放つ

東京都 高岡 弥生

言葉減りそろそろ来るか反抗期
子のお陰一人前の親になる
痩せてたね一年前の写真見て
ありがとう いつも私の抛り所
見てわかる子の行動は親譲り

横浜市 川島 良子

見逃したSOSの重い罪
締切りへ爆発させた脳回路
思い出が捨てられぬまま春巡る
長寿より今日を笑って生きてみる
新しい一歩へ風が柔らかい

横浜市 長島 亜希子

病癒えた友が笑顔の輪を作り
魚の食べ方息子舅にほめられる
ブラームスのサーピス付けたうちのカフェ
知らなかったで済めば人生楽だよ
遠くから食べ頃ミカン分かる鳥

豊橋市 藤田 千休

薄味に浮いてる妻のおもいやり
健さんがエンドマークと共に消え
万雷の拍手が好きなアンコール
理由などいらぬ発展的離婚
葉桜をまだかまだかと待つ毛虫

愛知県 樺嶺 志

背骨折れ咳も笑いも高感度
ごろ寝する他に術なし背の痛さ
入院は凄腕發揮減量に
体重は減ったが不変腹回り
痩せた頬引き締まったと友が言う

大阪市 浅井 公平

年賀状生きていますとご挨拶
孫成長かわい期間すぐすぎる

カレンダー予定殆ど通院日
友とあうユニクロシャツがはちあわせ

氷張り歓声響く通学路

大阪市 磯 島 福貴子

雪の下じつと春待つ福寿草

年金日ATMが騒がしい

先輩も年金暮し割り勘で

大阪駅やつと聞いたよたかじんを

北国へ誘う列車ラストラン

大阪市 内 田 志津子

山茶花の影に隠れた春捜す

寄付金と支援金とは違うのか

春を待つ三寒四温感じつつ

宮参りジジババ親の宴と知る

お水取り春待つ民に火の粉舞う

大阪市 宇 都 満知子

アルコール無口が消えて出る本音

口下手に思い汲み取る妻がいる

心齋橋飛び交う言葉多国籍

格差増し子らの行く先黄信号

定期便身体案じて来る電話

大阪市 太 田 としお

老いてゆく寝てる間にちよつとずつ
だんどりは葬儀屋さんにまかせましょ

喧嘩する相手がいててお幸せ
玄関にクリムトの絵は遠慮する

天国はベッドルームにありました

大阪市 高 杉 力

日用品まずは百均確かめて

まず見ないビデオせつせと撮り溜める

乗り換えてひと駅くらい歩かされ

慣れて来た頃にお別れパツク旅

六十五犬を飼うこと迷う歳

大阪市 田 中 ゆみ子

さあ四月何かわくわくするような

堪忍袋時々開けて陽にさらす

雪解川忘れ上手は生き上手

完璧を目指した頃のこわい顔

烏賊焼きの匂い寄り道しようかな

大阪市 松 田 聡

残忍なニュースに慣れてゆく怖さ

株式もこれはりっぱな博打です

見たくない日が続いている週刊誌

記念日になるとマスコミ大さわぎ

平和維持七十年の重さ知る

大阪市 平賀 和

我が息子彼女と春を連れてきた
天地の気いっばい貰う春の風
我が家では今年の漢字縁とする
恙なく生かされ天に感謝する
人生は今がピークと螺子を巻く

大阪市 藤田 武人

禁断の園歓迎は魔女のキス
片べりの靴が語ったデカの汗
魂は武士竹光を刺している
ふと見れば苦楽を刻む深い皺
見上げてる子供目線に合わせます

大阪市 若本 安代

梅桃と咲いて味方を呼ぶ目白
鬘姿難波に春を連れてくる
世の流れスマホを操作する力士
啓蟄に出てはみたけど小雪舞う
スニーカーうきうき春が弾み出す

池田市 上山 堅坊

独り者何も巻かない風呂上がりが
百変化する浮雲をじっと見る
疑ってますます深くなる迷い
生きてる限り飽きない白い飯
蛇口不調ぼたりぼたりと耳障り

貝塚市 石田 ひろ子

震災後四年に重い記事を読む
電飾を着せられ枯木狼狽える
寒のもどり気持の緩み叱咤され
啓蟄の虫もうろろ寒もどる
花粉症らしマスクして御住職

貝塚市 吉道 あかね

マフラーをスカーフにする春の風
子がなくて長居をさせるお嬢さま
診察券増えて加齢も順調に
断捨離を迫られている衣更え
デイサービスの車の多い町になる

交野市 田岡 久幸

一日を窓際に坐す冬の雨
立春の日の色うれし名のうれし
疾風の如く来りて去る息子
僅かずつゆるみいるなり冬の底
風邪を引きぶらぶら暮らす型が出来

堺市 梅木 澄空

自分ではしびれた句だが没でした
ヨン様にしびれて止まぬ義母米寿
気が利いて間抜けな嫁が理想です
最後やと車を赤に古希半ば
寒い時期暇なこっちゃと散髪屋

堺市 近藤 治子

しびれ切れ催促をする手打そば
告白にしびれそのままゴールイン
別れたくないから話やめられん
お別れを思い飼えなくなるペット
喫茶店集うママ友リフレッシュ

堺市 羽田野 洋介

鉛筆を転がしたって出ぬ答え
経験の不足補ういい度胸
歳重ねたい絆がより太く
形勢をひっくり返すと根性
何気ないその一言が許せない

堺市 大和 峯二

被災地の笑顔に触れて元氣得る
長寿には喜びたいが迷う国
増税が私の夢を縮めてる
うまい酒飲めてるうちは元氣です
プレーキを備えていない右カーブ

高槻市 三谷 白黒

筋肉を鍛えるはずが痛くなり
御先祖が食べてたものを食べなさい
メモしてもメモを忘れてお買物
お銚子を逆さに振って我慢する
二日酔反省しても日暮まで

豊中市 荒木 郁子

献血で太い血管ほめられる
ステンドグラス心の闇を慰める
メンテナンス必要なのは私達
入院であの世のことを意識する
めぐり来る歲月未だ傷癒えぬ

豊中市 荒巻 夢

忘却を与えた神の真意とは
何もせず貶すだけなら楽ちんだ
省みず自己責任を言い募る
世の中の風にやすやす流される
憎しみや恨みの連鎖果てしなく

豊中市 上出 修

東北に聞こえてますか春の音
山焼きの黒い大地に新芽出る
春惜しむ桜前線追っかける
京の庭借景の山一人占め
風を読み儲けたいなあ今年こそ

豊中市 貝塚 正子

借りた傘返しに來たと逢いにゆく
十を知るところには一を忘れてる
残るほどもらってみたいお小遣い
お前もか息も絶えだえ洗濯機
拝啓と敬具の中に有る本気

富田林市 小出修三

お誘いは加齢と言ってお断り
菜園の出来の講釈また楽し

褒められた言葉の裏にある妬心

野心持ち四つに組んだ青い日々

泣き上戸笑い上戸が差し向い

東大阪市 織田登子

梅だより友の知らせで飛んで行く

菜の花を愛でた後には胃袋に

花が咲く部屋かたづけ旅に出る

通勤の電車にゆられ柳誌読む

遺影から今日もお出かけにが笑い

藤井寺市 田付絹枝

今年こそシンプルライフ始めよう

出掛ける日ドリンク飲んで貼り薬

三度目にやつと聞こえた老いの耳

鍋の昆布まだ役立つよ塩昆布

何処からかくぎ煮の香り湧く闘志

箕面市 寺井柳童

散髪屋カットしように髪がない

災害の悲しみ消えず南無阿弥陀仏

魚の目に涙復活の大漁旗

政治家の疑惑言い訳聞き飽きる

食べるだけ食べて気にする血糖値

八尾市 前田紀雄

長生きをすると病気が寄って来る

追伸に術後元気が問う便り

只管に社会復帰を乞う術後

女房と主治医に頼る食養生

見舞われて元氣も貰う娑婆の声

大阪府 神野千恵子

あれはきつとドラマなんだと言いきかす

無為の日が続くそれでも今生きる

無責任男がコメディイだった頃

再生紙たたむと過去の癖がでる

春という響きが凍る3・11

神戸市 長川哲夫

百歳の琴弾く母の春の海

千の100霞が関に手紙書く

百点はとれぬものです民主主義

お別れはダンスの後と母白寿

二進法一〇〇の夢を追う

神戸市 玄番美恵子

遠回りそれからきつとある至福

無口な子スマホの指はよく喋る

同じ趣味知ってそれから深い仲

たわいないお喋り弾む散歩道

復興へそれから四年長い春

神戸市 富永恭子

子の顔を見たら小言もオブラート
ふわふわのパンとおはよう有る朝
思い出は歳をとらずにあのまんま
幸せの形で降ってきた出会い
口数が多い割には伝わらず

川西市 大坪一徳

企業戦士言われてみればそうだった
本社ビル無名戦士の忠魂碑
出世するタイプの目線上を向く
自分でも気付かぬ本音句に出てる
川柳誌他人の暮し垣間見る

三田市 九村義徳

女房の愚痴聴く耳が悲鳴あげ
墓参り見知らぬ人もコンニチワ
フルコース締めはいつもの葉のむ
孫見るとすぐに出たがる諭吉さん
思春期の子を持つ娘らしい

三田市 多田雅尚

啓蟄を待ってましたと小鳥来る
花便り届いた頃になごり雪
マッサンに夢中になって鍋焦がし
壁ドンも好きが本当はハグが好き
爆買が終われば黄砂攻めて来る

宝塚市 丸山孔一

月光を一人占めして影と行く
反対はいい対案を出せ
無い筈がもしや俺にも相続税
一億光年そんなもんわしゃ知らん
路郎氏も薫風氏も居る花の里

南あわじ市 萩原狸月

決めましたそうか嫁くかと父無口
五年後を待つ楽しみのある若さ
献金と言えばきれいな袖の下
宝石店軽い財布じゃドア開かず
携帯を持たずJAF呼ぶ術がない

和歌山市 磯部義雄

地下足袋を履いてやる気のボランテア
生存を示す独居の軒の旗
定年でやれやれスーツお蔵入り
食卓に並ぶ健康食ばかり
気が重い大卒までの教育費

和歌山市 北原昭枝

ひと色がほしい絵皿に春を盛る
約束を果たす絵ハガキ届く春
菜の花の彼方へ夕陽紛れ込む
山坂を越えてこの世の情け知る
あの人があつと来そうな春の窓

和歌山市 平田元三

泣かせたりくしゃみさせたり針葉樹

隠蔽の数に謝罪のまこと問う

続出の新語に辞書が追い付かず

歩道橋渡る人なくただの鉄

王子来て子等も憶えた英国旗

岩出市 村中悦男

名湯の華の土産に旅気分

人間が怖いと鬼が出て行かぬ

復興のアイデア歴史抱きしめて

新団地重機もちゅうちよする歴史

それからが見たい朝ドラまた明日

紀の川市 楠原富香

退院に久方振りの紅をさす

ふる里が恋しくなった煮ころがし

窓際でつながっている寒い首

日配りでわかる夫婦の生きた道

ポランティア無欲の汗が光ってる

和歌山県 森下よりこ

仏さまへたまに供えるワンカツプ

健康寿命伸ばす体操自分流

来なくなつた畑半年荒れはじめ

一人ぐらしのわたしにやさし仏さま

失敗した弱気尾を引く今日の運

鳥取市 大前安子

丹念に拭いた窓にも雪が来た

それぞれの歩幅で進む群れに居る

元氣一番孫の口から返される

着替えるように娘すばやく主婦となり

たらればにまだまだまだ心乱れます

鳥取市 近藤秋星

長い冬春は短い直ぐ夏だ

特養へ来て誕生日八十五

年賀状書きさしそのまま特養へ

古里の昭和の星が一つ消え

安々と春にはさせぬ冬の意地

鳥取市 坂本とも湖

被災地へ健気なスマイル凜と咲く

半生を語れば長い酒となり

無視すると一寸の虫眼を覚ます

死ぬまでに一度宇宙へ出掛けたい

繰り返す政治と金の問答だ

鳥取市 田中天翔

ミニ菜園天地返しを待っている

天地返しにわか百姓腰にくる

天地返し明日は一日寝て過ごす

土いじりDNAが止めさせぬ

柏手を心で打って投函す

鳥取市 谷口 回春子

煩惱に心の中を見透かされ
勘ぐりが心の中を弄ぶ

今日も元氣と木魚の音が隣から
親になり初めて分かる子は宝
巢立つ日は必ず来ると覺悟決め

倉吉市 岡崎 美知江

胃の中でちよつと解けない罪さわぐ
ちよつとだけ結び目ほどき楽になる
ヘルシーと聞けば飛びつく熟女達
イエス・ノーはつきり言わず尻尾ふる
風ばかり読んで決意が定まらず

倉吉市 中村 毅

無欲とか無我とか僕に似合わない
歳かなあ一週間の早いこと
深夜便ラジオ私の子守り歌
嘘吐かれ吐くよりましと言ひ聞かす
愛煙家納税しても追いやられ

米子市 加藤 正二

国会は知らない金が降ってくる
よい暮し寝ても起きてても文句なし
一言で心突きさす五七五
米寿まで指折り数え自炊する
日變りの天氣に体文句言う

米子市 田村 周子

生きるのも死ぬのも一人定めです
巢を後に羽ばたく子等に幸あれと
紅梅が咲いて良いことありそうだ
孫娘早寝早起き嫁修業
齒周病手入れ長生きしてやろう

米子市 永井 三津子

病んで知る子の優しさ頼もしさ
子に支えられ語りつくせぬ愛もらう
幾度も子の背に侘びた病みし事
退院しまず仏壇へ手をあわす
我家つてほんとにほんと素晴らしい

米子市 野川 宣子

助走からすでに勝負は決まっていた
大事な人風が浚って行つたきり
遠い日の日記泣いたり笑つたり
日記帳どこを繰つても前向きだ
気配りに客座布団も畏まり

鳥取県 橋谷 静江

鏡見る気持になれぬ雨の朝
人前で突然出たよドッコイシヨ
寄り添って初めてわかる気心が
家に居て相撲観戦ありがたい
春風が吹けば畑へ出たくなる

松江市 相見 柳 步

火は消した恋の炎は常に燃え
五分前首がながあくなつてくる
近そうで遠い「あなた」ということば
伝言を贈る金色リボンつけ

松江市 山 根 邦 代

調理役毒味の役もして一人
寂しさを笑顔に変えた青い空
帰郷する友に合わせてミニ茶会
ストレスの世の中気持ち大らかに

安来市 原 煩悩児

米二合炊いて二日三日の爺
喜怒哀楽消えて久しい爺独居
日本のテロか怖かったオウム教
自爆テロ内戦怖い核やガス

岡山市 丹 下 凱 夫

灯明が揺れて亡き母顔を出す
汚染水流していない洩れたと言う
振り込めサギ金がないから大丈夫
片ときも離しはしない酒とペン

岡山市 前 田 恵美子

今日もまた御飯みそ汁うまい朝
メジロ来て朝だ朝だと高く鳴く
私の夜明け探して今日も旅
鏡見てまだいけるよと眉をひく

岡山市 永見 心 咲

笑わせてあげる一緒に泣いたげる
小指にも不協和音が絡み付く
爪立ちで春を招いている帽子
興味ないふりで応援歌は巧い

備前市 森 ふみか

傷ついた枝にも花芽春きざす
水鳥は去つて要らないパンの耳
秒針を止めて余生の深呼吸
愛されて愛して子孫連綿と

竹原市 若 年 幸 子

痛いとかやんわりと突く妻である
転勤の春ありがとうを饞別に
花吹雪噂話をまき散らす
花筏余生の春をゆつたりと

竹原市 土 井 輝 恵

戦争の愚かひしひし朝ドラマ
年金へ添うた値段の化粧瓶
ギシメシと住が老いてく私も
ニュースアナ怒りの言葉ポロリ出る

三次市 伊 藤 寿 子

恩師柳友恵まれし人生よ
店番の寸暇ピアノの楽譜よむ
音大へ夢を持った日青春譜
三婆会わたしにだけは夫いる

宇部市 高山清子
言い切つて親友と微妙な車間距離
鉢巻きで止めても落ちる思考力

方言をテレビ奨励してくれる
高齡は氣遣い重く受け止める

防府市 坂本加代

背を伸ばす酸素がほしい水中花
第三のコーナー曲がるもう一步
願ひ事子どもを練り返す
やり練りはお金も暇も作り出す

松江市 神野きつこ

お雛様今年も箱で眠りこけ
冬將軍弥生の空に雪が舞う
春風窓もガタガタ不眠症
春疾風月光だけが美しい

今治市 渡邊伊津志

花は色人は心と老いて知る
先ず意味が正しく響く詩作り
恥という文化は何処に消えたやら
何度でも落ちた穴から発芽する

大洲市 花岡順子

手の込んだ電話に迂闊氣付かない
玉入れの籠へ届かぬ玉ばかり
もうそこに春の音する散歩道
怒つても褒めても笑う人と居る

高知市 三谷松太郎

早熟も晩成もなし日向ほこ
羊水を母ちゃんおれに飲ませ過ぎ
おんぶしてひよいと揺すつて持ちやげてよ
可愛子ちゃんほかの才能捨てちゃいな

佐賀市 清水園實

業者らはいらぬと言えどまた電話
孫電話合格と言ひ祝ひ待つ
知らぬ客隣の犬もほえてくれ
新しいスポーツシューズ下駄箱に

唐津市 岩崎實

眺望が料理の味を引きたてる
梅一輪歌や俳句ののつてくる
すこやかに災厄払う流し雛
佐賀城下愈々豪華雛の家

唐津市 吉富節子

開発が自然破壊を連れてくる
負けるかと治らぬ病に挑戦す
米寿祝友の手製の造花くる
卒業に親もほろりの子の答辞

佐賀県 門井孝

あれそれで解る夫婦で五十年
長生きをしたくて散歩歩を増やし
空地には太陽パネル並びます
期待した親の財産ゴミの山

熊本市 杉野羅天

勝ち残る為の差別化なんだとさ
ネクタイフリー制服への反動
天邪鬼吸うだけ吸えと言えばやめ
青い空偏西風が持つて行き

山鹿市 前田幸子

水仙にふんわり和む春の雪
ドア開けて私の用はなんだっけ
啓蟄だ春です心引きしめよう
遠慮なく酔うも楽しき独居かな

山鹿市 三谷直男

誠実は見えた事もない漢字だろ
良心は生まれた時から持つてない
見たくない聞きたくもないバカし合い
マスコミも少しましなネタないか

山鹿市 柳田白沙

メガネかけ疑って見る常識を
小犬の眼言いたい事はお見通し
美辞麗句なにより勝るありがとう
極楽はまだ空きないと父の声

沖繩市 森山文切

頑に守る歩けという規則
組み替えた脚には恥じらいが残る
外される時を只管待つ視線
密やかな罪が入っている財布

札幌市 富永恵子

山裾に春のきざしか耕運機
流行の過ぎた衣服に惚れ直し
電飾の光と影にある暮らし
踏み出した一歩の先に砂利の道

登別市 小林碧水

マネキンも春のかたちという並び
春の雲ふんわり母が焼いたパン
土筆呼ぶ野へ誘いだすスニーカー
焼香に並ぶ他人のかたちして

弘前市 吉川ひとし

風を斬りのしのし歩く肩パッド
ジーパンの穴から冬が逃げ出した
表札の中で呼吸をしてる亡父
離陸した子等の未来に架かる虹

つくば市 嶋本 喬

空振りの春一番が倍返し
弁当だ古米を庭に鳩雀
補聴器の説明をする大音声
お転婆の孫が夢見るプリンセス

八王子市 川名洋子

お辞儀した形でバスを降りて行く
母のいる足踏みマシン捨てられぬ
チャームポイントの笑窪で勝負する
正面に美女が座って落ちつかぬ

横浜市 巖田かず枝

願うこと子等が笑つて暮らす日々
お隣と仲の良いのが自慢です
消しゴムで消せない程の失敗談
一匹と二人惚けずに暮らしたい

伊勢原市 小田幸子

甘味うま味時が鍛えて円熟味
若き日が今日の食より今支え
コッコツとゼロに向かつて積み重ね
熟成の臭いと香り紙一重

川崎市 成田せいじ

ネクタイを替えて慶弔ハシゴする
靖国が日中韓に溝を掘る
ヘソクリを隠す女房と鉢合せ
歌舞伎座を持つて行きたい黄泉の国

佐渡市 高野不二

値上げから賃上げ迄が遠すぎる
ふとつた人の出番もあつたコマーシャル
黒ネクタイばかり御用が多すぎる
税抜きに値にだまされて又つかみ

静岡市 渡辺芳子

白髪の子になつても夢を持つ
陽だまりでいい音楽と毛糸あみ
時によりピエロで生きる大事です
遺伝子か土佐のイゴッソー生きている

江南市 脇田雅美

肝臓に調子はどうだ聞いて飲む
陰口より意見があれば話そうよ
年金の元を取るにはあと五年
言い訳に自分の本音見え隠れ

京都市 櫻崎篤子

金閣寺雪の帽子がよく似合い
ほめる人なき山茶花の満開に
春ひと日雛人形になつて見る
ベットにも自分の席の有るマイカー

大阪市 田中廣子

白い帯雪の大谷目を見張る
忘れ物明日迄かかるとどかしさ
隠したら自分が探す破目になり
ふらふらと寝ぼけて起きる春の朝

大阪市 寺本実

縁のない神にもすがる受験生
義理でよいチョコの一つも持つてこい
やかましく騒いだ後にある孤独
春からは免許返してさあ歩く

大阪市 梅里南天

銀河の駅で待つてるからね遠太君
小書店を見つけたら本を買い
電子辞書聞いて旅するよその国
作句より眠りの磁石が強く引き

大阪市 橋 本 典 子

春風に背中押されて夢を追う
アドバイス素直に聞ける耳ほしい
静かなる情念燃やし椿散る
一輪の水仙生けて迷い消え

大阪市 前 川 善 之

知るも良し知らぬも良しと生きていく

活発な意見も聞かずにする閣議

看板の女性大臣皆辞職

アメリカが我儘通すTPP

大阪市 宮 村 満 寿 恵

発車ベル涙で見えぬ窓の外
神前で誓ったはずが別の道
別れてもつもる感謝は増すばかり
宿命と思えど別れ辛いもの

大阪市 吉 田 知 之

文句言う自分のことは棚に上げ
目標をたてると日々に張りが出る
句作りで心の糧を貰ってる
飲み薬カプセルになり有難い

泉大津市 助 川 和 美

入学式に合わせて咲けと蓄積る
昼食から始まる子らの日曜日
見ないでね両手塞がり足で蹴る
ランチを誘う桜模様の便箋で

河内長野市 森 田 ひろこ

春節だ黄砂と札東どつとくる
ぴちぴちとはずむ音して芽吹く庭
卒業式皆ピチピチの制服で
目覚めての音消え失せる雪の朝

河内長野市 渡 邊 修

当りクジ夜中に一人ニヤニヤと

週二回妻はドラマの主人公

北陸にソロバンはじく皮算用

豪栄道期待を込めて大合唱

堺市 増 田 わこう

日本は冬が去ったが春はまだ
地震には津波おまけで連れてくる
役の無い議員野次だけ上手なり
政活費生活派手にする議員

豊中市 源 田 啓 生

行く先を決めてないのにエレベーター
幸せな雲はちつとも止まらない
老齢を逃げず耐えろと言いつ続け
衣食足りなお礼節は失われ

豊中市 南 正 代

カニかふぐか親のふところ当てにして
コタツからヨッコラシヨで電話切れ
言うたらあかん口止めしても孫の口
五七五数える指もさくら色

寝屋川市 荒川 鈍 甲
ひどい世になったものねと母しきり

兵隊をどこでも出すという話
憲法を読めば読むほど出る元氣
暗いから僕らは明日を模索する

寝屋川市 岡本 勲

こわいのは妻のソフトな取り調べ
伝統を継いで我が家に金がない
跡取りと嫁の来手ない過疎の村

いずれ皆黒いリボンの箱の中

寝屋川市 大同 美江

旅先で持参の薬飲み忘れ

惚けぬうち自分史書いて郷想う
五七五と走らぬ筆は老いなのか
誕生日調べて届くサーピス券

羽曳野市 磯本 洋一

七〇年海神の声届く今

四年経て見えない御化け除染中
老梅を一枝求め仏壇へ
三高を待ってた娘アラフォーに

羽曳野市 仲谷 真一

胸踊る春場所近し南風

溜席やっぱり力士大きいなあ
きなくさい発言続く安倍総理
森の中眠れる美女を捜してる

金剛山の片栗草に心寄せ

意思表示出来る嬉しさ十八歳
独り言言うて相槌打って居る
日焼け止め塗り日傘をも忘れない

羽曳野市 安本 美喜
枚方市 河田 洋子

二度三度石に躓き年を知る
石橋を叩き世間の波を越え
代々と漬物石は受け継がれ

頂いた石が我が家の家宝です

枚方市 坂本 ミヨノ

満月が花見弁当覗き見る

春香る弁当五臓六腑しみ
元氣そうね慌てて笑顔絞り出す
喜怒哀楽笑顔絞ってマイペース

枚方市 松原 保

いろいろな道が有るから民主主義

AKB老いた耳には歌詞不明
ワイドショー話題尽きない乱れた世
歩く影見れば背骨が曲がってる

大阪府 小栢 こずえ

そこかしこ糖尿の敵菓子が有り

脳味噌の貯金寝転び柳誌読む
断れば誘い来ぬかと気にかかる
言えぬ愚痴日記に書いて憂さ晴らす

大阪府 高木道子

いかなごの季節小鉢を待っている

姪っ子が角を隠して嫁ぎます

B面の生活楽し笑いじわ

葬儀屋に儲かりますか聞けません

大阪府 西川冷子

山裸獣道まで見通せる

開幕し大きな旗振るJ・リーグ

冥土への日帰りツアーないかしら

春一番雨も交えて襲い来る

大阪府 畑中節子

気の晴れる老いの良葉無駄話

老眼鏡外して脳も一休み

母の味舌がおぼえている御数

リハビリのつもりで動く家事畑

神戸市 井上忠貞

フトコロに聞きつつネタを注文す

手袋の先がしびれる朝の冷え

ライバルの懐に入り危機回避

ふところ手陣頭指揮はとれません

神戸市 上田和宏

ふところに故郷がある亡母が居る

初めてのデートの跡をフルムーン

野良猫が決まった時間にやって来る

電話越し詐欺師の声は優しくて

神戸市 興水弘

福耳も金に縁なく聞き上手

頑張ったよ用済みなどと言わないで

あの人と逢える明日は杖しまう

飲みすぎて言いたいことも飲んじやった

神戸市 山根弘子

失言で自慢の鼻をへし折られ

たそがれて明日の命は神まかせ

やる気だけたれにも負けぬ傘寿坂

プライドをすてたら空が青かった

伊丹市 平井富夫

妻出かけ一日だけの俺天下

夢希望髪と一緒に飛んでった

言い訳も口数多く嘘がバレ

飼犬も妻になついて吠えてくる

小野市 田中辰夫

うつむいて踏み締め歩く老いの坂

よっころしよ年寄りネコも日なたぼこ

四十年妻の手のひら飛び出せず

くぎ煮炊く後ろ姿が弾む妻

小野市 藤原泰宏

古稀が来て長期の夢は省いている

マスクして美人が見えずつまらない

病氣した人を待つてるお医者さん

ウィークデーゆっくりできた花さじき

加東市 黒崎 美紗子

紅梅が咲き春こいと呼んでいる
デイサービスタ花まるついてかえりくる
もうすぐと木の芽ふくらみ春をまつ
寒くても緑毎日のびている

川西市 日野岡 和之

おおらかに生きて人生楽天地
聞き役に徹し満足共白髪
脳トレに筋トレにもなる孫の世話
泣き笑い子育て母の百面相

篠山市 佐々木 勇

一・一七記憶を語るルミナリエ
嬉しい日前へ行ったり戻ったり
画像だけ見てるテレビのあほらしさ
ハンドルを握ればほくの小宇宙

篠山市 藤井 美智子

人生の華もちよつぱりしほみ気味
生きづらい怖いニュースの多いこと
争いと自然異変の苦の地球
頑張つてけじめ大事に一人者

三田市 足立 つな子

うそのない素直な心自負がある
かれる身に生氣呼び込む寒の水
ママちゃり夕餉の仕度虎落笛
健やかな心身飯のうまいこと

三田市 今西 廣子

古稀過ぎて女難の相に御用心
童謡より孫は下手でもエグザイル
おーいお茶永谷園で今日生きる
ひん曲がるキュウリ茄子も意地がある

三田市 上田 ひとみ

柔らかな時間まつたり読書など
目覚めれば小さな迷いだと気づき
話したくなつたらそつと聞かせてね
変わつていくことは生きている証

三田市 辻 開子

昭和から平成茶の間が消える
桜咲き娘も孫も待つ年金日
体から春の訪れ少しずつ
春近い冬の衣装が嵩高い

三田市 野口 晶子

歯がういたおべつかたまに嬉しがる
同じなら安さで並ぶランチ時
初出馬サラブレッドの血が騒ぐ
手鏡に美人じゃないと文句言う

西宮市 株元 玲子

おどろいた百均メガネ二十持つ
「ただ今」の無事な笑顔にホツとする
透視して覗いてみたい脳の中
脳細胞にそつとやさしく子守唄

三木市 山口久子

米寿過ぎまだまだ元気デー通い
占師自分占い迷ってる

バラの花良き師の顔とうりふたつ
老いてきてわが身で母の苦勞知る

奈良市 尾畑なを江
こだわって作る私のにぎりめし
日本語の解る猫との癒しあい

春眠に日頃の不満持つてかれ
ふる里は遠くにあつて泣けるとこ

香芝市 山下純子

財布より中身が欲しい誕生日
満天の星の出迎え里帰り

あらすじを読んでみんなの仲間入り
春の風バステルカラー着たくなる

田辺市 大峠可動

四月馬鹿人におくれて世におくれ
どの雲を追うても僕の絵は同じ
平凡に生きて重たくなる物価
直立不動で昭和のポーズ

鳥取市 奥田由美

夫が居るからヤル気出す日日の家事
泣きたい日母の写真をなぞる指
投句する馬力減速三回目

丘二つ越えたところのネオン街

鳥取市 高原かおる

芸術の秋を見つけて来た画廊
なにげない言葉ずばりと言っている
弱点をずばり突かれて手も出ない
正確に動くロボット手術する

鳥取市 津村律子

震災の格差農家に皺寄せる
一人では風呂に入れぬ怖さ知る
手を借りてパンツを上げる日も近い
恰好よく歩きたいだる影に聞く

鳥取市 山下凱柳

一言居士肝心な時役立たず
脇役に徹するこれも人生だ
何かある歯の浮くような褒め言葉
ふるさと納税ちよつと田舎に御奉公

倉吉市 田中紀美恵

母の懐の深さに顔をうめてます
深い冬眠春のお花は美しい
怒られた自分が蒔いた種拾う
手口動くまだくたばれぬ百寿まで

倉吉市 堀かずこ

春がきた溜息グチはやめました
人生を人それぞれに満喫し
世渡りがうまい人でも落し穴
春の陽が散歩しよう誘います

境港市 中井虎尾

春が来りや何故か白鳥北帰行
夢を追い宝くじなる税納め

待っていた咲いたサクラに恋心
桜見てさくらサクラと唄う口

米子市 生田和之

恐いもの歩きスマホと飛び出す児
堂々と義理チョコですと渡される

妻の愚痴尤もだよと黙り聞く
九条に武蔵が語る不戦の詩

米子市 池岡たけし

天仰ぎ無理難題を願ひ上げ
御機嫌を損ねたばかり雨になり

青い空下手な願ひはしても駄目
四季通し恵まれたとこ古里は

米子市 小野鶴子

愛車撫でガタが来るまで一緒だよ
他人の目ストレス背負い肩重い

雛祭り蓬ひし餅亡母思う
古い脳退化の道をまっしぐら

鳥取県 飯野菖子

生きている朽ちて合わない菌車で
人生路菌を食いしぼり生きてきた

落ちこぼれそんな私に青い空
行き違い気付かぬままの老いの日々

鳥取県 下田茂登子

一人とは自由のようで自由ない
年金のお陰で一人暮らししてる
免許更新認知テストも受けている
喋りより経文唱え一人いる

鳥取県 田口清帆

走馬灯すぎゆくものは風ばかり
筆洗う明るい明日を描くため

だんだんと祈る姿になる余生
かけらでも心に沁みる思いやり

(前月分) 山鹿市 三谷直男

この冬の寒さはまるでいじめっ子
有識者と呼ばれ顔出す恥知らず
道徳を学ばせるべきは政治屋ども
どこよりも信用出来ぬ日本人

第29回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月13日(日)

12時30分 開場

ところ 堺市立榎文化会館 3階
第1講座室

(泉北高速鉄道 榎・美木多駅
より徒歩3分)

宿 題 (各題2句・出句締切13時30分)

「遊 ぶ」 鴨谷瑠美子 選
「追 う」 太田としお 選
「おかしい」 河内 月子 選
「グ レー」 本多 洋子 選
「互 角」 楠本 晃朗 選
「ちゃっかり」 西 美和子 選

席題なし 各題2句 出句締切 13時30分

参加料 1000円 各題秀句に呈賞

連絡先 堺川柳協会

〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3

会長 河内天笑 方

TEL.072-278-4706

主 催 堺市文化団体連絡協議会

新川柳鑑賞 (39)

麻生 路郎

電話口花千代さんは舌を出し

(豆 秋)

ところは色街、芸者姿のあでやかさ。受話器を手にして「待ってまんねで、ウソやおまへん、ワテ、べた惚れだんね。(と云って、ペロリと舌を出す) みんなにひやかされてばかり……照れくそうて照れくそうて(と云って又ペロリと舌を出す)、来てくりやはれへなんだら、ワテ焦れ死に死んでしまいまんがな(と云って長い舌をペロリと出す) 斯うした色街情景を巧みに詠んでありますところが無い。花千代さんが浮彫りされて、この世界を髣髴させるところ、しかもユーモア味を感じさせる技巧は作者の独壇場である。これこそ所謂豆秋ばりの句の上乗なるものか。

ハンサムの人から女給先に酌ぎ

(草一郎)

女給がお酌するのに、無意識のうちにもハンサムの人から先にお酌をしていたと

言うのである。ただそれだけのことであるが、軽い穿ちの句として興味がある。斯うした心理の探求が手際よく果されるところに川柳することの面白さは尽きない。

送詞謝詞仲居はずりかしこまり

(麦太楼)

送別会風景のスケッチである。送詞と言うのが型の如く行われる。別に惜しい人ではないにしても、一応は惜しむことになっている。謝詞と言うのが又型の如く行われる。しかし、この方は去るにのぞんで感無量の涙を流す人もいる。そんなやりとりの言葉が交される間、仲居さんはズラリと目白押しに並んでかしこまっているのである。光景が眼に見えるように詠まれている。

ダンサーの亭主だそうな葱を買い

(麦太楼)

日はとつぷりと暮れた。市場はもう仕舞いかけている。一人の男がネギを買ってゆく。別にいいでいるさまも見えない。一人者とも思えないが時々ネギを買いに来る。

「アレ、ダンサーの亭主だそうな」

とは市場の声である。夜更けて戻る妻のために、スキの準備なのである。明るいよくな暗いような、そうした二人の生活の巧みに描いたところが作者の手腕である。

首相あわれ営業用の笑顔もし

(花 村)

カメラマンに、一寸お笑い下さいと言われてニコリと笑うのを、「営業用の笑顔もし」と皮肉られたのである。芸者や女給の営業用の笑顔なら兎も角、首相ともあろうものが、営業用の笑顔までせなければならぬとはあわれな話ではないかと思つたのである。面白いネライの句。

首相云う雨のふる日は天気がわるい

(伍 健)

首相ともなれば、もつともらしいことしか云わない。揚足をとられまいと云う意識が自然と当り前のことをもつともらしく云う。そこを皮肉つたのである。

当選御禮今から公約忘れます

(春 雄)

さて選挙となると、なるべく当選しそうな口約を数限りなく並べ立てるのが立候補者の常である。その全部が全部の口約をまともに受けとる選挙人もいないであろうが、その幾分でも果してくれたらと其の候補者に一票を入れる。それが積み重なって当選する。そして当選御礼となると、それを限度に公約を忘れますというのである。皮肉な句でなる。

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

女曰く波の音をきいてますの

摘み草の腰をのばせば揚雲雀

舌打ちをするしくじりも古稀なりし

羊飼いの少年になりたいと思う夕陽

呑み友達どちらも髭をはやしてる

路郎忌やビールのあてはうざくなり

いっしかに膝抱く姿不死鳥忌

細雪だんごの皿を二つ置く

蠅の止まっていただんごをくれるなり

紫陽花や色即是空昼の雨

マンションに旅の一句がかけてあり

憎さも憎し礼儀正しいライバルで

初旅や車中の声は雪の富士

ライバルの頭仲々禿げてこぬ

どこやらに自慢がまじる嫁の里

牡丹や我も湯客の一人なり

一人一人話せばみんないいお人

つまらないことをおぼえている女房め

主人みずから出すは冷蔵庫のビール

インタビューしようむないことをきくものぞ

くっしやみの出かける顔を見たりけり

スケッチの見上げる空は既に秋

蓮の花一会の旅は続くなり

誹風柳多留一二篇研究 23

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・山田昭夫
石川道子
清博美

180 すんでる足もとでちうくといひ

清賛
これで遊ぶ。

小栗 「ちゆうちゆう」は鼠の鳴き声であるが、実際の鼠が出てきたのではなく、「鼠花火」のこととする柳雨「年中行事」に従う。表で涼んでいる足元へ誰かが火を付けた鼠花火がシューシューいいながら転がってきただけという、夏の風物詩。

暑ひ事ねつみに庭をかけさせる 三三三
足元トをねつみのあるくあつ事 二二三
(参考) 『和漢三才図会』(巻第五十八) (東洋文庫)

鼠花火というのがある。三寸ばかりの葦の管を用い、葉末をそれに盛って作る。火を口葉につけると忽ち榊櫛(しゅしゅ)という音を出して走る。小児は

181 たてかけた長持へ来てせみがなき

小栗 土用干しの風景をそのまま詠んだ句だろう。衣類を出した長持も乾燥させるために、風通しのいいところに蓋を取って立て掛けておく。そこへ蟬が止まって鳴いているのである。
清賛

182 みともないはづ借金のかたによび

小栗 形は、抵当。担保(「江」)。持参嫁の句。借金解決のために貰った嫁であるからみともない筈だというのであ

る。句を直訳すると「借金の形として嫁を貰った」ということであるが、形は借主が返済能力の保証として貸主に差し入れるものであるから、嫁イコール形と考えると辻褄が合わない。辻褄の合うように解釈すれば、借金で首が回らなくなったので、その返済能力強化のためにみともない嫁を貰ったという文脈にならうか。それとも、別の解釈があるか。

借金ハぬけて外聞わるひ春 二六三
ことよふなよめを見いゝ帳をけし 天五倍4

石川 借金の返済が出来ないため、その家(貸し主)のみともない娘を嫁に迎えたというのではないでしょうか。嫁に貰って借金棒引き。

清 礎稿でいいでしょう。川柳によく見られる文体。

183 八宗けんがくいろはの品川の

小栗 八宗兼学は、①仏語。八宗の教義を、すべて兼ね修めること。②転じて、広く物事に通じていること(「日」)。

寺方では八宗兼学という言葉があるが、なるほどお坊さんはいろは茶屋だの品川遊

廓だのあちこち修行においでになるね、という意。仏語で坊主を表す技巧句の一。

品川ハ現世未来へうれる所 莒二五

品川で汝是畜生と腹を立 六一五
清 賛。

184 ぎつに手をひかれてびつこ舟にのり

小栗 「ぎつ」と「舟」の取り合わせだから、舟饅頭(隅田川の船中で売春した女)の句である。ぎつに手を引かれているのは、足の不自由な客とれないこともないが、梅毒で歩行もおぼつかなくなつた舟饅頭本人のことと思う。

たつ事のならぬを舟であきなハせ 拾八三
山帰来などあつたためのおちよ舟 明六智三
伊吹 賛。「びつこ、舟に乗り」でなく、「びつこ舟に、乗り」なのでしょう。

山田 礎賛。「びつこ舟」とはどんな舟ですか？

清 礎賛。びつこの女が、商売をするために、ぎつに手を引かれて舟に乗った、というのでしょうか。

これより下の無い最悪悲惨な売春。
船まんちうちよつくと細イ浪か打チ

明元鶴4

185 ぬりたつた孫の手をひくきともなき

小栗 厚化粧をした孫の手を引く(あるいは、孫が手を引く)のはみつともないというのであるが、川柳の約束から考えて、老人と孫ほどの年齢の女人女性との取り合わせを詠んだ句だろう。考えられるのは妾か新造であるが、さてどちらだろうか。柳雨氏は「吉原志」で妾の項に採つておられる。

決め手はないが、「手を引く」という光景は、妾宅よりも遊廓の方が自然な感じがするし、老人と新造はパターン化した題材であるので、ひとまず新造ということにしておく。なお、これも拘らぬが、「孫が手を引く」と読んだ方が、よりみつともない気がする。

孫よりハ可愛イそふで買に行 叢二
とらまつて下りなと新造こゑをかけ 拾七六

細井 新造とした方がよさそうですが、時に応じて娘ともとなへたり 拾二六

山田 新造説に賛。「孫綱手を引く」賛。

清 同。

186 雨やとり日和の方へかけて来る

小栗 夏の夕立など局地的にドツと降る雨を詠んだ句だろう。雨宿りをしていた人が、少し向こうでは晴れている様子を見て、そちらへ駆けて来るといつた光景。

雨やとり四五丁と水をうち 一一九
せみのなく所迄いつてもをぬき

清 賛。 安六宮2

187 深川らしいがうつらへ二人り来る

小栗 鶉は、歌舞伎劇場用語。高土間の後一帯の座席。前に横木二本を渡してあるのが鶉籠に似るのでいう(「江」)。

芝居小屋の鶉籠敷へ深川芸妓らしいのが二人来ているというのであるが、何が面白いからならない。深川の佃(あるいはそこにいた私娼を「あひる」と称したらしいので、「あひるが鶉へ」の洒落かとも考えたが、そのような安女郎(四百文)が棧敷へ来るのも不自然とも思える。それだけの句か。

山田 分かりますせん。何故二人なのでしょう。

清 実態を詠んだのではなく、「あひる」が「うつら」への掛詞を面白がつた句に過ぎないと思う。なれど、二人の必然性分ならず。

英語 de Senryu ④1

麻生路郎句集 『旅人』

英訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

おしゃべりの中にも 夫人虚栄が出

chattering

married ladies

expose their vanities

君・君 もう少し静かにし給へ 蠅

Hey, you!

Mr. Fly!

Quiet down!

chattering おしゃべりに夢中の状態 married ladies 既婚女性 expose さらけ出す
vanity 虚栄心 Mr. Fly 蠅を擬人化

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳⑤

1949年出版のブライスのSENRYUでは、women(女性)を詠んだ川柳が掲載されています。それら古川柳や戦後の現代川柳に近い作品には、当時の男性から見た女性像が明確に捉えられています。川柳こそ時代を映す鏡、時代性に富んだ短詩であることが明白です。ブライスの英訳と彼の解説を読むと、ブライス自身の女性観も見えてきます。「」はブライスの解説です。

①口説かれて娘は猫にものを云ひ(古川柳)

(The girl talks / Only to the cat, / Being made love to.)

「娘は彼女に恋心を抱く男性を嫌いではないが、その気恥かしさを露わにせずに猫に話しかけている。「少しぐらいは気にしているのかい」と彼は云う。「なんて柔らかな猫ちゃんのお手で」と娘は云う。でもこの二人の間には言葉ではない別の会話が流れているのだ」

②その頃の女はいふがまゝになり(路郎)

(At that time, / Women / Were so obedient !)

「この川柳は昔の女性に言及し、現代の女性よりずっと(男の好きなように)させようとし、またそうされることを喜んだ」

①ににじみ出る二人の情感は、まるで演劇の新派の世界を彷彿させます。②は、『川柳塔』の麻生路郎の自虐的諧謔とも読めますがいかがでしょうか。ブライスは(いふがまゝになり)を *obedient* (従順な、素直な、言う事を聞く) の一語で表現しています。この語彙が全体を支えています。

参考文献：R.H.Blyth 著 SENRYU (北星堂書店 1949) pp.59-60.

民族の詩歌 (35)

川柳のニュー・ウエイブ

三好 專平

ヤングの川柳がこの頃脚光を浴びるようになってきている。やはり、若い人たちが時代の先端を行くというのは今も昔も変わらない。習慣や言葉がどんどん変化している。——小中高と共に面白い。生徒たちの感性をやしなうために、また町おこしのイベントとして。本誌でも、2014年7月号で紹介された。

まずは小学生の部。
ちゃんとねてスッキリおきて朝ごはん
チューリップお花の中が水たまり
たんぼぼがふわふわとんでわらった
菜の花に体あずけて風の谷
あかるいなあかりなしでも月あかい

次に中学生。

鏡餅中に子どもがかくれている
甲府行きブリクラとったよハイチーズ
先生はなんでそんなにえらいんや
人はみな人生という橋わたる
真実が好きな瞳を持っている

高校生。

虐待死親はしつつけというけれど
破たんして不安がのこる融資先
自爆テロ平和に暮らす日は来るか
ユネスコに伝統文化認められ
テストにも3分欲しいロスタイム
スマートフォン普及とともに減る会話
クーラーのスイッチオンがやる気オフ
夏のエコ一つの部屋に顔並ぶ

サラリーマン川柳がこれらに続く。
ケイタイで尻たたかされる外回り
ロトシックスたった六個の難しさ
パンナコッタナンノコッタと孫に訊く
ホテル族昔はタバコ今メール
外国語より意味の分からぬヤン語かな
ママチャリの出番が来たよ原油高

ビリーして妻のパンチが威力二倍
ポイントのためにサイフを新調し
KYはうちの職場じゃコノヤロー
GPSアフター5に起動する
うちの嫁後ろ姿はフナッシー
倍がえし言えずに今日もおもてなし
俺のライン何故か家族の名前出す
ままごともゴミだし役は男の子
ブリクラに映る娘は誤表示だ

どうですか、分かりますか。「おもしろ
日本語学」の小矢野哲夫先生でもわか
るのがたくさんあるそうです。三省堂国
語辞典第七版(2011)からちよつと
だけ。

・ナウ ・おニュー ・アクセ ・アंक
レット ・温製 ・怪優 ・開湯 ・結果
・猫砂 ・ふわとろ ・リフレ ・腕皿
・ラグ

嗚呼、拳げるだけでツンデレと、ピミョ
ウに私の心が壊れてくる。しかしと、蚕
勇を奮い立たせてムチャブリといきま
すか。ミスるかな、そうなんや。エ。

愛染帖

新家 完司 選

(投句) 278名

松原市 森松まつお
せかせかと歩いてゐるが暇である

(評) 何かに追われているように、少し前かがみでせかせか。超多忙のように見えるが、暇つぶしの散歩。歩き癖は生涯直らない。

大阪市 栃尾 奏子
シャンブーがふわりと変える世界観

(評) 大事件に遭遇したわけではない。深遠な哲学書に啓蒙されたわけでもない。爽やかなシャンブーからヒントを得たのだろう。

鳥取県 竹信 照彦
長靴で歩くと辛いウォーキング

(評) 膝から下が汚れないように、作業用に作られた長靴。雨天の散歩に履いてはみたがブカブカで重たくて、たちまち戦意喪失。

岡山市 藤成 操江
検診日体重計に乗せられる

(評) 女性にとって、スリーサイズとか体重などは特に秘匿しておきたい個人情報。それを、いともアッサリ「はい、どうぞ!」。

松山市 神野きつこ
賞状も勲章もなく太るだけ

(評) 賞状や勲章は、誉めて自尊心をくすぐって従順にさせる手段ではないのか。そんなものより、健康で食欲旺盛がイチバン!

松江市 石橋 芳山
打たせ湯で終える略式滝修行

(評) 真冬の滝に打たれる修練「滝業」と温泉の「打たせ湯」。たしかに、同じような形ではあるが、略式すぎるではないか。

三田市 上田ひとみ
ひとはひと忘れぬように声に出す

(評) 他人と比較して一喜一憂するのはエネルギーの無駄。何の益にもならない。自分を取り戻し元気にさせる呪文「ひとはひと」。

シドニー 坂上のり子
ナビ持たず頭の中に地図を描く

(評) ナビゲーターなどに頼ってしまうと、想像力や推理力、そして判断力まで失せてくる。頭の中に地図を描ける人はボケない。

三田市 九村 義徳
耳遠くなつて笑顔が増えました

(評) 笑顔が減ったのではなく増えたのだ。それは、「不快感を与えないように、笑顔でカバーしよう」との想いからではないか。

八尾市 高杉 千歩
赤青黄刻みチンして老いの膳

(評) 有りあわせを刻んでチンもラクチンだ

が、タンパク質・ビタミン・糖質など、バランスよく摂って百歳超えを目指そう!

芦屋市 黒田 能子
団塊世代川柳は如何です

等閑市 藤井 智史
親の敷くルールを外れ作句する

奈良県 安福 和夫
五七五で寝言いほど嵌つてる

沖縄市 森山 文切
暗い句ばかりが浮かんでくるベッド

大阪市 榎本日の出
いい知恵が浮かんだけれど句にならず

唐津市 坂本 蜂朗
各停で急行見送り五七五

大阪市 板東 倫子
雨の日の作句はみんな萎れてる

広島市 岸本 清
ひねつても僕の川柳この程度

香南市 桑名 孝雄
啓蟄に虫が飲もうと呼びに来る

東大阪市 佐々木満作
イカナゴの旨み程好く酒のあて

海南市 小谷 小雪
長寿へのおいしいお酒二合半

富田林市 山野 寿之
平等に酒を愛して立ち飲み屋

堺市 奥 時雄
昼の酒言われた通り癖になる

大阪市 田浦 實
自慢話込みの会費と追伸に

倉吉市 岡崎美知江
同窓会胸の振り子が止まらない

大阪府 稲見 則彦
お花見の予習ですよと栓を抜く

鳥取県 斉尾くにこ
昭和史の血を吸っている赤サンゴ
雑談の飛び交うなんていい集い
憧れの三つ隣へ席をとる

弘前市 高瀬 霜石
カラオケが好きな人たちみんなタフ
恋わずらいなんと古めかしい病

大阪府 あまのとりな
ほとけ様食べはりますか草団子
友達がまだともだちでいてくれる

河内長野市 山岡富美子
大道芸超高層の隙間にも
強かに生きのびたのはイエスマン

鳥取市 永原 昌鼓
春が来た両手広げてハグをした
奥様と呼ばれるほどの品はない

大阪府 高杉 力
同意書を山ほど書いてから手術
ラインメンの列に並ぶという平和

青森市 守田 啓子
正しいとか常識とかかいいう迷路
私が捨てられている春の路肩

豊中市 水野 黒児
気分だけプロ ガム噛んで草野球
プリンターは安くインク代めっちゃ高い

鳥取市 前田 楓花
被災地の深い言葉が胸を突く
短気です波長あわせるのが苦手

青森県 松山 芳生
長靴を脱いで夕陽を浴びている
好奇心いつもスマホに遊ばれる

東京都 川本真理子
昨日を維持できていてホッとする
風を読み今日のわたしの色決める

倉吉市 牧野 芳光
豆腐屋の後はなるべく走らない
コーヒーと紅茶の違いまだわかる

河内長野市 穂口 正子
止まぬ憎悪正義の種類多すぎる
三十分電車に乗れば人だらけ

高槻市 富田 美義
喜寿過ぎりやどんな病も適齢期
日に万歩これが何よりカネ儲け

鳥取市 有沢せつ子
スーパのおかずヒントに見て帰る
挨拶をして追い抜いたランドセル

藤井寺市 鈴木いさお
決めてます妻より三日前に死ぬ
バツイチの妻とは誰も気付くまい

羽曳野市 徳山みつこ
暴言を詫びておりますドーモ君
ルンルンを詰めたバッグと中之島

豊中市 藤井 則彦
死に方を学べば学ぶほど死ぬぬ
五十年ごめんごめんは僕ばかり

奈良市 大久保真澄
隅っこの席がなくなる早よ行かな
惚れたのは僕で発言権がない

大阪府 藤田 武人
くじ引きで紅一点の席に居る
上達のカギはプライドではないか

米子市 成田 雨奇
アホヤから搜してますと言いつ返す
喜寿近く便利な街へUターン

三田市 北野 哲男
コンビニの灯は明るいな淋しいな
居眠りも欠伸もしたい時できる

橿原市 居谷真理子
もう少し身を削つてと膝小僧
ふところが寒くなつたらお留守番

神戸市 松井 文香
酒も抹茶も金粉入りで長寿国
鳥取県 石谷美恵子

尼崎市 市坪 武臣

大坂市 津守 柳伸
星の降る湯舟で今をリラックス

大坂市 平井美智子
湯の中で幸せなこと考える

大坂市 坂 裕之
義理チヨコが仲とりもって五十年

神戸市 能勢 利子
脇役がうまいと光りだす主役

吹田市 太田 昭
三度軒杖に頼るの止めにする

藤井寺市 若松 雅枝
まだ若い百まで生きて五輪見る

横浜市 菊地 政勝
百歳を視野に大事な常備菜

香芝市 大内 朝子
意識してポリフェノールを摂る暮らし

大和郡山田市 坊農 柳弘
泣きことも愚痴も煮込んだチャンコ鍋

岡山県 田中 恵
安上がりのきんぴら牛蒡切らさない

箕面市 広島 巴子
若ごぼう煮てシャキシャキと春を食む

岩出市 村中 悦男
知らぬ人声かけてくる慕参り

鳥取市 福西 茶子
腹立てて無茶食いをしてまた肥る

京都市 都倉 求芽
老夫婦チャンネル一日変えもせず

尼崎市長浜 美籠
幾つ角曲がっただろう過ぎた道

奈良市 辻内げんえい
主語のない妻の話に空返事

八尾市 宮崎シマ子
お向かいは旅行お土産期待する

大坂市 太田としお
黙祷で今日も始まる高齢化

鳥取市 倉益 一瑤
豆まきの豆ぶつけないニュース見る

三田市 堀 正和
お出かけへ二階へ三度忘れ物

加西市 金川 宣子
自分にはランク一位のチヨコを買う

唐津市 山口 高明
時差ボケが治らぬなんて自慢され

堺市 矢倉 五月
食べこぼし孫と一緒に叱られる

米子市 生田 和之
婚活をシリアまで行きするという

大坂市 谷口 義
組合のせいで月曜日は休み

和歌山市 磯部 義雄
新幹線無い紀州路の良い旅路

鳥取市 奥田 由美
三十年使い慣れない夫の姓

弘前市 吉川ひとし
車座に天敵もいる社の人事

京都市 榎本 宏子
春を待つ窓は大きく光らせる

堺市 遠山 唯教
春あさく遠くきこえる童歌

八王子市 川名 洋子
ピンクだけつまんで食べる雛あられ

生駒市 飛水ふりこ
さえずりとウツの菌応えコラボする

河内長野市 藤塚 克三
ホーホケキヨ黄砂花粉でかすれ鳴き

米子市 中原 章子
春が来た歩け歩けと囁かれ

岡山市 丹下 凱夫
ウォーキング高血圧にいいらしい

大坂府 畑中 節子
春うらら話の弾む女人講

松山市 栗田 忠士
春うららまどろんでいる鬼瓦

貝塚市 石田ひろ子
好奇心ついアンテナが伸びてゆく

和歌山市 平田 元三
体調が遠近作の同じ道

藤井寺市 太田扶美代
こんなに頑張っても昨日と同じ

鳥取市 岸本 宏章
三世代二人の主婦がいて採める

堺市 近藤 治子
家事こなし適度な疲れ快眠へ

恋というサブりを撰って声の艶
三田市 足立つな子

会いたいな一緒に飲んでみたい人
鳥取市 春木圭一郎
和歌山県 森下よりこ

自慢屋だった 今はりハビリの自慢
堺市 大和 峯二

戦力外それでも隅で吠いている
大阪府 柴本ばっは

まだまだまだローンあるから生きててな
鳥取市 近藤 秋星

特養でまさか再会しようとは
大阪府 大川 桃花

行けたら行くは九割行く気ない返事
富田林市 肥山 一文

うるさいが人の好いのが浪速っ子
西予市 黒田 茂代

代わってくれる人がないので炊事する
田辺市 岡本 昇

治るといふ楽しみあつて医者通ひ
鳥取県 山下 節子

ドッコイショ自分にエールかけて立つ
羽曳野市 吉村久仁雄

一つ星の向上心にうなる舌
東かがわ市 川崎ひかり

その内にたらい回しにあう予感
八幡市 今井万紗子

お隣はもう来たらしい青い鳥

サークルの宝と思う陽気な人
大阪府 岩崎 玲子

人の輪をつないで地球囲みたい
四条畷市 吉岡 修
和歌山県 北原 昭枝

平凡な一日でした誰も来ず
鳥取市 夏目 一粹

ぐるぐると首を回せば軋む音
大阪府 米澤 俣子

肝心なことはやっぱ育ち方
和泉市 横山 捷也

まだやれば出来る手足を持て余す
鳥取市 岸本 孝子

体中夢を詰め込み巣立つ孫
姫路市 古川 奮水

折鶴を手紙に添えてご挨拶
大阪府 桑田ゆきの

好奇心むくむく育つ百貨店
鳥取県 細田 裕花

色褪せて光らぬ星になりました
大阪府 奥村 五月

癒されて明日が見えます友の酒
奈良市 加門 萌子

犬猫を使いスマホの売り合戦
藤井寺市 津田シルク

仏壇にたんとお飲みと缶ビール
鳥取市 谷口回春子

気心を知れば知るほど嘘つけず

寝屋川市 森 西
鳩に席うばわれそうな日向ほこ
倉吉市 山中 康子

お年寄りせめて心はたおやかに
八尾市 前田 紀雄

食いだおれ中華フアンドが買い占める
和歌山県 玉置 当代

一食も抜かず元気な老いふたり
豊中市 南 正代

趣味ふたつ老いにストップかけてます
三田市 今西 廣子

不景気やポテトチップス逃けている
鳥取市 土橋 螢

日の丸の旗 魂の置きどころ
宝塚市 田中 章子

プロレスに熱狂の女子たくましい
川西市 山口 不動

年金を二人合わせてやっと思生き
大阪府 初山 隆盛

年金も長生きすれば一億円
鳥取市 吉田孔美子

土地成金のカフェは二年と続かない
京都市 櫻崎 篤子

看護した私を残しみんな逝き
高槻市 原 洋志

友の計に涙しているアドレス帳
奈良市 尾畑なを江

いつの間に減ってしまった根気力

共選欄

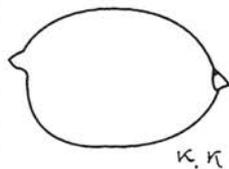
檸檬

椽

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 379名)



「旗」 牧野芳光選

押入れの日の丸死語となる旗日
復興の旗からもれてくる吐息
愛情をたつぷり持った日章旗
万国旗だけは伸よく手をつなぎ
祝日に国旗飾るも勇気いる
旗色が悪くなったらマイルーム
日の丸の旗見て嬉し外国で
旗だけが頼り海外ツアー終え
添乗員日傘のように旗かざす
安全なとこで指揮官旗を振る
日の丸もさくらかも誇る美し国
どの顔も笑ってみえる万国旗
白旗で許してくれる妻でない
PM2.5に五星紅旗が咽んでる
寄せ書きの旗から勇氣湧いてくる

岡山県 池田たか子
出雲市 竹治ちかし
大阪市 榎本日の出
榎原市 安土 理恵
弘前市 今 愁女
奈良県 安福 和夫
大阪府 山崎 君子
奈良県 中原比呂志
大阪市 大川 桃花
唐津市 山口 高明
大阪市 津村志華子
松江市 藤井 寿代
堺市 奥 時雄
河内長野市 坂上 淳司
弘前市 福士 慕情

「旗」 古久保和子選

春闘の旗に活気が甦る
国連の旗が無力に見えてくる
旗の波今ランナーが通過中
まだ生きてゐるぞと老いの旗を振る
どの顔も笑ってみえる万国旗
万国旗もう戦争はゴメンです
万国旗六年先を思い遣る
旗色を大局的に読んでみる
星条旗、辺野古の海に似合わない
戦争へ行かない人が旗を振る
旗色が悪くなったらへソ曲げる
お人好しでいつでも旗に従っていく
わたくしを貫く旗だたためない
家々の幟田舎はまだ元気
白旗を掲げてからはよく寝れる

西宮市 足立 茂
倉吉市 中村 毅
高槻市 松岡 重子
高知市 小澤 幸泉
松江市 藤井 寿代
和歌山市 北原 昭枝
倉吉市 山中 康子
三原市 三原 昭紀
藤井寺市 藤井 昭紀
三田市 堀 正和
鳥取市 山下 凱柳
西宮市 山本 義子
鳥取市 倉益 一瑤
鳥取市 福西 茶子
明石市 糀谷 和郎

戦争へ行かない人が旗を振る
 母の振る旗には金縛りの父
 日の丸もいねお子様ランチなら
 日の丸がいつち輝く万国旗
 生きのびるため玉虫色の旗を振る
 いつまでも待つて居ります黄色旗
 この旗に集まれカボチャだんご虫
 まだ生きてゐるぞと老いの旗を振る
 何年も国旗を出したことが無い
 祝日に独りぼっちの日章旗
 印籠と白旗で子と渡り合う
 旗色が悪いと耳も遠くなる
 札束を積まれて畳む筵旗
 日の丸見ればわたしやっぱり日本人
 洗濯物がなびく元気の旗印
 旗色を妻の笑顔が塗り替える
 万国旗ほどには平和見当らぬ
 日の丸に乙の文字が透けて見え
 兵送るための日の丸振れません
 喜びも悲しさも知る日章旗
 ああ平和日の丸出した家がない
 白旗を掲げてからはよく寝れる
 一人ぶらぶらガイドの旗に叱られる

三田市	堀	正和
福山市	藤後	卓也
登別市	小林	碧水
宇部市	平田	実男
島根県	伊藤	寿美
大阪市	榎本	舞夢
松江市	石橋	芳山
高知市	小澤	幸泉
和歌山市	福本	英子
豊橋市	藤田	千休
奈良市	大久保眞澄	
鳥取市	中村	金祥
堺市	澤井	敏治
枚方市	寺川	弘一
米子市	吉田	陽子
羽曳野市	吉村久仁雄	
豊中市	水野	黒鬼
米子市	竹村紀の治	
日置市	前田	洋子
大阪市	板東	倫子
三田市	北野	哲男
明石市	梶谷	和郎
茨木市	藤井	正雄

旗だけが思い出になるバスツアー
 向い風あつて旗色鮮明に
 ふたふたと旗も健気に店仕舞い
 五輪しか日の丸仰ぐことがない
 旗振りや弾の当らぬ位置に立ち
 印籠と白旗で子と渡り合う
 ピリの子にちぎれる程の旗を振る
 旗を振る嫁のエールで続く趣味
 万国旗みな仲よしになれそう
 よれよれの旗に宿っている気骨
 一本の旗に全てを託さない
 色褪せた夫婦の旗を支え合う
 君の旗さみしい色をしているね
 痛いとおおさえ白旗まだあげぬ
 正確に日の丸描くむずかしさ
 日の丸もいねお子様ランチなら
 一人ぶらぶらガイドの旗に叱られる
 君が代を五輪で聞くと熱いもの
 旗色が悪いと耳も遠くなる
 断捨離の中に紛れていた国旗
 風を見るために掲げてる旗もある
 白旗の代わりに提げたごみ袋
 国賓を迎える無垢な旗の列

米子市	竹村紀の治
奈良県	中原比呂志
富田林市	関 よしみ
堺市	村上 玄也
南あわじ市	萩原 狸月
奈良市	大久保眞澄
八幡市	今井万紗子
貝塚市	石田ひろ子
岡山市	丹下 凱夫
紀の川市	楠原 富香
篠山市	酒井 健二
貝塚市	吉道あかね
佐賀県	真島久美子
榎原市	安土 理恵
西宮市	亀岡 哲子
登別市	小林 碧水
茨木市	藤井 正雄
可児市	板山まみ子
鳥取市	中村 金祥
高知市	小川てるみ
紀の川市	辻内 次根
香南市	桑名 孝雄
横浜市	小野句多留

旗振れば笑顔が返るランドセル

旗振って疲れただけの労働歌

国連の旗が無力に見えてくる

肝っ玉母さんどんな旗も呑む

星条旗揺れるフェンスの向こう側

戦する両者の旗へ正義の字

二つの祖国どちらも勝ってほしい旗

国敗れても日の丸は赤いまま

日の丸の丸は平和の丸だろう

汚すまい戦後洗った国旗です

サンゴ一つ守れぬ日の丸の行方

ピリの子にちぎれる程の旗を振る

和筆筒の奥に温めてある反旗

薄味に説得されてゆく反旗

星条旗から砂煙血のけむり

桜咲く国は不戦の旗がいい

子や孫に白旗確と持たせとく

白旗を揚げて福祉の手を借りる

困窮の日々へ白旗まだ上げぬ

秀 句

ピアスゆらゆら十七歳の叛旗

風さえも遠慮半旗がうなだれる

日章旗父を浚っていったきり

神戸市 山崎 武彦

雲南市 松本 昌

倉吉市 中村 毅

海南市 堂上 泰女

大阪市 高杉 力

鳥取県 斉尾くにこ

シドニー 坂上のり子

京都市 櫻崎 篤子

横浜市 川島 良子

米子市 後藤美恵子

神戸市 白川 淑子

八幡市 今井万紗子

富田林市 山野 寿之

大阪市 平井美智子

紀の川市 宇野 幹子

羽曳野市 徳山みつこ

尼崎市 藤井 宏造

寝屋川市 平松かすみ

松江市 三島 崧丘

尾道市 大本 和子

大山市 金子美千代

富田林市 中井 アキ

お赤飯炊いて我が家は旗日です

白旗のかわりスイーツ買ってくる

白旗を揚げて福祉の手を借りる

薄味に説得されてゆく反旗

無理強いをされると旗は揚げにくい

万国旗ほどには平和見当らぬ

日の丸よ生きて良かった国ですか

旗色の悪い男へ塩こしょう

八方美人自分の旗は持ってない

旗色が悪いとボクは貝になる

旗色が悪いぞ館を配ろうか

たくさんの涙を呑んできた校旗

復興の電車迎える大漁旗

白旗を振ると仲間が湧いてくる

ひたすらに振って破れた父の旗

応援旗だけがゴールを見届けた

ああ平和日の丸出した家がない

大空に大風呂敷の旗を振る

この旗に集まれカボチャだんご虫

秀 句

一本の旗を守ってきた孤高

和筆筒の奥に温めてある反旗

日の丸を忘れたことのない心

鳥取市 西川 和子

京都市 高島 啓子

寝屋川市 平松かすみ

大阪市 平井美智子

唐津市 仁部 四郎

豊中市 水野 黒兎

和歌山市 上田 紀子

奈良県 渡辺 富子

藤井寺市 太田扶美代

弘前市 稲見 則彦

札幌市 三浦 強一

高槻市 原 洋志

横浜市 菊地 政勝

長岡京市 山田 葉子

島根県 伊藤 寿美

豊中市 江見 見清

三田市 北野 哲男

大阪市 古今堂蕉子

松江市 石橋 芳山

松山市 栗田 忠士

富田林市 山野 寿之

藤井寺市 高田美代子

「素通り」

梶谷和郎選

(投句 211名)



時価の店ボクに関係ないお店
 盛り塩が素通り阻むママの意気
 素通りは出来ぬ被災地助け合い
 ただいまと茶の間素通りするスマホ
 通帳を素通りだけの給料日
 素通りの目線にルージュ引き直す
 素通りをして欲しかった嫌な人
 公園を横目に走る塾カバン
 下着ドロ我が家素通りしたらしい
 美辞麗句素通り出来ぬ宴に居る
 回覧板素通りします空き家です
 見てみない振りの出来ない御節介
 素通りは出来ぬ亡父の茨道
 俺になど見向きもしないヤングギャル
 素通りに梅の香りが纏いつく
 素通りの名所あとから知らされる
 素通りをしてもカメラが憶えてる
 水溜り素通りさせぬ魔物住む
 賢い魚だ疑似餌無視して去ってゆく
 ラブレター封も切らずに返される

大阪市 江島谷勝弘
 岡山市 永見 心咲
 大阪市 内田志津子
 堺市 矢倉 五月
 鳥取市 山下 凱柳
 神戸市 松井 文香
 鳥取市 夏目 一粋
 奈良市 米田 恭昌
 三田市 上垣キヨミ
 鳥取市 大前 安子
 防府市 坂本 加代
 香芝市 大内 朝子
 和泉市 横山 捷也
 鳥取市 池澤 大鯨
 米子市 吉田 陽子
 海南市 小谷 小雪
 河内長野市 坂上 淳司
 西宮市 福島 弘子
 西予市 黒田 茂代
 大阪市 太田としお

素通りを後悔させる募金箱
 素通りを呼び止められた間の悪さ
 合格の通知素通りサクラチル
 三猿になれば事無く済んだのにお経聞く姿勢で小言聞き流す
 素通りか一声かけてはしかった子の傲慢しつけ素通りさせた罪
 半額へ素通りできぬ妻である
 老いの耳呪文のように素通りし
 体内を今も素通りできぬ欲
 おばちゃんは素通りできぬ立ち話
 議員数減審議はまだと先送り

佳句

素通りを花屋の春が呼び止める
 素通りをするには恩が有りすぎる
 同じ穴の貉素通りする疑惑
 性分で困った人を見過ごせぬ
 聴いたけど忘れたありがたい話
 人
 見ぬ振りを通る都会の無関心
 地
 素通りは「あきまへんで」と顔なじみ
 天
 素通りの出来ぬ事案を抱く歴史
 軸
 怒り心頭のどを素通りする罵声

和歌山市 平田 元三
 和歌山市 福本 英子
 三田市 堀 正和
 河内長野市 谷 久美子
 三田市 北野 哲男
 倉吉市 山中 康子
 京都市 榊本 宏子
 奈良県 渡辺 富子
 大阪府 畑中 節子
 松江市 石橋 芳山
 大阪市 柴本ばつは
 河内長野市 藤塚 克三
 貝塚市 石田ひろ子
 大洲市 花岡 順子
 松江市 三島 淞丘
 東大阪市 北村 賢子
 橿原市 居谷真理子
 三原市 鴨田 昭紀
 京都市 櫻崎 篤子
 出雲市 竹治ちかし

「よつとよつと」

(投句 213名)

小林 わ こ 選



心地よい夢ださばさばした朝だ
爽快な五月の空だ深呼吸
生ビールシユワーとうつを脱ぎ捨てる
思い切り泣けばさばさば明日の顔
ローン完済妻も今夜は呑むと言う
肩書きが取れてさばさば楽隠居
疑いが晴れてさばさば空仰ぐ
戦士にはさばさばさせる酒がある
さばさばと別れ心の雨しとど
情念を捨ててさばさば祝白寿
一句抜け駅へさばさば歩が進み
どん底もさばさばしなきや立ち行かぬ
さばさばと未練遺さず花は散る
ハハハハそうよわたしはB型よ
こだわりは持たぬ男の太っ腹
しつこくない父の拳骨よく効いた
未練など束ねて棚に上げてある
さばさばと戦後を生きた肝っ玉
思い切りさばさば断捨離にまわす
朱に染まる余白残してさばさばと

和泉市 横山 捷也
四條畷市 吉岡 修
紀の川市 宇野 幹子
東大阪市 北村 賢子
松山市 栗田 忠士
大阪市 奥村 五月
和歌山市 上田 紀子
橋本市 石田 隆彦
香芝市 大内 朝子
富田林市 山野 寿之
八尾市 山根 妙子
生駒市 飛永ふりこ
大阪市 津村志華子
堺市 矢倉 五月
和歌山市 喜田 准一
大阪市 柴本ばつは
海南市 小谷 小雪
豊中市 水野 黒兔
八尾市 宮崎シマ子
大和郡山市 坊農 柳弘

子も孫も巢立ちさばさば恋などを
賀状廃止さばさばしたがもの足りぬ
さばさばと運転免許返上す
別れたらさばさばできたなんて嘘
やることはやったこれから芽が出るぞ
最後には残高ゼロで逝くつもり
男女越え人間同志という間
蟬りとけて大きく深呼吸
孫たちが帰ってホッとした気分
申告も済んでさばさば深呼吸
断捨離でさばさば風邪を引きそうだ
ライバルと決着ついて縄のれん

二ツコリと笑い冥土に逝けたらなあ
断捨離をすませ明日から翔ぶつもり
剪定をされた庭木の深呼吸
定年だこれで上司も部下もない
未亡人夫の分も生きますわ

鳥取市 福西 茶子
富田林市 中崎 深雪
加東市 黒崎美紗子
藤井寺市 太田扶美代
河内長野市 木見谷孝代
貝塚市 吉道あかね
大阪市 古今堂蕉子
東大阪市 佐々木満作
堺市 村上 玄也
唐津市 山口 高明
鳥取県 竹信 照彦
三田市 九村 義徳

河内長野市 坂上 淳司
奈良県 渡辺 富子
鳥取市 岸本 宏章
伊丹市 平井 富夫
奈良市 大久保眞澄

岡山市 永見 心咲
樞原市 居谷真理子
三田市 北野 哲男

あの人に笑われぬようさばさばと

初歩教室

題一弁当

山口光久

「し止め」は現在よくないと言われ、選者のなかに嫌う人がいます。

「し止め」とは「○○する」という終止形の動詞を連用形の「○○し」とし、下五に据えることです。これが「し止め」です。

宿泊する(終止形) ↓ 宿泊し(連用形)

研究する(終止形) ↓ 研究し(連用形)

また、「○○する」は、「○○をする」と助詞「を」加えた場合があります。この場合も「し止め」になります。

子守りする⇨子守りをする⇨子守りをし
背伸びする⇨背伸びをする⇨背伸びをし
連用形の語尾が「し」となる動詞は他にも多くあります。

貸す⇨貸し。刺す⇨刺し。足す⇨足し。

これらの語の連用形の「し」は下五に持つてきて「し止め」とは言いません。

また、下五の語尾が「し」となる語に形容

詞がありますが、「し止め」とは言いません。

清々し、若々し、可愛らし、憎たらし、

【添削】

原 悔いる事いっぱいあるが高笑い 満寿恵

題の「弁当」が読みとれません。満寿恵さんは初歩教室へ初登場のようですから、勝手が分からなかったのかも知れません。毎月題が決まっていますので気をつけて。

添 悔いる事しよほしよほせずに高笑い

原 春になり後いくたびの弁当か 安子

「後いくたびの」をどう理解したらよいでしょう。終章を詠われたのかと。

添 弁当を持ってたまには行楽地

原 弁当をわざわざ買いにデパート展 美江

下六になっていきます。破調ですとリズムが悪くなります。結句は出来るだけ五音字になるようにしましょう。

添 弁当をわざわざ買いにデバ地下へ

原 早弁に命燃やした青春期 忠士

早弁の経験は殆どの人が経験しているでしょうが、命燃やすまでは。

添 早弁へ我も我もも青春期

原 戦時中日の丸弁当思ひ出す (山)久子

日の丸弁当は八字ですから上句に。

添 日の丸弁当思ひ出される戦中派

原 鈍行旅豪華弁当突いてみる 開子

添 鈍行で豪華駅弁巡る旅

原 弁当下げ二人で出かけた春の山 廣子

添 弁当買う好き嫌いないくらしする

原 弁当買う好き嫌いより値段表 美紗子

添 弁当から解放されて複雑に

原 弁当から解放されて拍子抜け 忠貞

添 弁当から解放されて拍子抜け

原 避難所で弁当配布整然と 福貴子

添 避難所で弁当配布にことごと

原 目覚しが弁当作り知らせる (高)弥生

添 目覚しが弁当作る刻知らせ

原 駅弁のおかずはその国訛 ひとし

添 駅弁に特産品の国訛

原 梅干しを入れて弁当邪を祓う 和之

添 梅干しを入れた弁当なら安堵

原 キヤラ弁に込めた愛情嫌がらせ ひろこ

添 キヤラ弁に込めた愛情嫌がらせ

原 キヤラ弁を競うママ友わずらわし 風花

添 キヤラ弁を競い合うママ息抜けず

原 朝仕事おにぎり一つ持つていく(見)温子

添 早朝の仕事おにぎり一つ持ち

原 受験生カツ弁当で合格か 登子

添 受験生カツ弁食べて験担ぐ 律子

原 梅干しでアルミ弁当穴があく 律子

添梅干して弁当箱に穴があく

原弁当で遣り繰る妻を思う昼

添弁当で遣り繰る妻の顔浮かぶ

原ハンカチのシミでおかずを判断す

添ハンカチのシミでおかずを推し量る

原あぜ道の蛙が見てる腰弁当

添あぜ道の蛙腰弁当

原ポランティア弁当代は望みません

添ポランティア弁当代は自腹です

原弁当は日々のお袋メッセージ

添弁当へ母の優しいメッセージ

【少しの修正でよくなる句】

原弁当に役に立つのはミニトマト

添弁当へ欠かせぬものにミニトマト

原母の弁当道を外れぬブレイキに

添母の弁当道を外さぬブレイキに

原弁当箱の蓋の飯粒つまみ食べ

添弁当箱の蓋の飯粒から食べる

原弁当はコンビニ任せ手抜きママ

添弁当はコンビニ任せママ寝坊

原隣席の子の弁当も卵焼き

添お隣の子の弁当も卵焼き

原弁当を作った頃が花でした

添弁当を作った頃が華でした

【入選句】

元三

孔一

一

子

子

雄

一

洋一

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

キャラ弁で今日も完食ボク元気

年金で買う弁当はワンコイン

弁当のかわりに貰うワンコイン

弁当代妻からもらうワンコイン

駅弁を楽しみながら夫婦旅

たまご焼きすこしこげめの手弁当

弁当箱定番だった卵焼き

海苔で書くメッセージには太い愛

シルバーに配る弁当温かい

愛息の弁当だけは手を抜かぬ

空弁当おいしかったと言っている

弁当は妻の愛情でんご盛り

妻と行く駅弁めぐり老いの旅

初デート弁当箱は豪華版

残り物詰めて姉妹のピクニック

草庭塩のにぎりで古い宴

春が呼ぶ弁当さげてわらび取り

お弁当食べる我が子の顔浮かぶ

貧しくてふたでかくしたお弁当

弁当箱梅に負けたか穴が空き

山仕事腰弁当に妻の愛

弁当の時間はみんな機嫌よい

弁当で競い合ってる若いママ

目で食べる色とりどりを摘めている

古稀になり愛妻弁当冷やかされ

義徳

義雄

心咲

凱柳

国和

山弘

英男

修三

晶子

茂子

回春子

辰夫

モモ

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

一人居の祝いの膳は駅弁で

おにぎりに梅干し一つ入れ包む

木の香り弁当持ちで間伐に

弁当を比べ暮らしの質を知る

キャラ弁の残りを詰めて持たされる

【佳句】

かあさんの温もり詰まるお弁当

ほんばりの下で弁当うかかてる

トレッキング鮭お結びにかぶりつく

ランチボックス湯気も旨そう大工さん

梅干しが自己主張するど真ん中

【今月の推せん句】

満月が花見弁当覗いてる

満開の桜の下での弁当は格別美味しく感じ

ます。空から満月が祝福しているようです。

おにぎりに励まされてる野良仕事

野良仕事に精を出し疲れたところへ御握

り、こんなに上手いものはありません。

ただいまの弁当箱は舐めたよう

「ただいま」と学校帰りの子の差し出す弁

当箱、一粒の御飯も残っていないのを見て、

ほっとする親。戦中派は一粒の米も大事と

教えられました。

【私の句】

運動会孫と弁当食べる幸

川柳塔鑑賞

同人吟 山岡 富美子

— 4月号から

雪かきが趣味で津軽に生きられる

浅田 隆樹

ボジティブな姿勢に頭が下がる。
ふと五楽庵先生の名句が浮かぶ。

「その母もそのまた母も雪まみれ」

母にしか解らぬパズル冷蔵庫

須郷 井蛙

家族の好み、今週の子算、スーパの特
売日や時間的な制約等をも考え、奮闘した
母さんのパズルは、だれひとり解きようが
ないのだ。

被災地の「風の電話」に耳澄ます

星野 育子

地理的にもあるいは心情的にも被災地の
春は遅い。ニュースで伝わってくるのは建
前ばかりで実態が見えない。それを何とか
したいと思う切実な気持が「風の電話」に
じつと耳を傾ける。

大阪人に東京の住み易さ

高島 啓子

勤め人として東京に三十二年住んだ。

五年後のオリンピック開催を控え変貌し
続ける東京であるが、その国際都市として
の包容力が、或いは住み易さにつながって
いるのであろうか。

スイーツにやけに詳しい男たち

森山 盛桜

居酒屋が若者で繁盛していると聞く。

すでに社会現象になっているとかでNH
Kのクローズアップ現代も取り上げた。

同じ流れで、スイーツも女性の専売特許
から脱皮、その販路を拡げつつあるのか。

男女共生、育メンが市民権を得る時代、
スイーツに詳しいのが男であって何の不思議
もないのではあるが。

お手頃な値段の少し下がよい

山田 耕治

お手軽という微妙な表現に売り手側の工
夫を感じるが、世間一般のお手頃は我が家
ではちよつと荷が重い。

そういえば世間が総中流と浮かれたのも
遠い昔ではない。しかし時は移り、高齢
化が進み生活保護世帯の比率が云々される
中、年金族の我が家も「少し下」位が丁度

よいのである。

新聞の読みたくもない日が続く

古久保 和子

誰しも楽しいことを見たいし聞きたい。
が、社会の窓である新聞はそうはいかない。
天災人災、政治経済、テロ、少子高齢等、
どれをとっても暗い。読者もたまには穏や
かな休刊日が欲しいのだ。

鉛筆とわたくしだけの扉押す

西口 いわゑ

作句は苦しいがまた至福とも言える。
濃密な時間と向かい合っている鉛筆とわ
たくし。ふと作者の句集「女ごころ」を思う。

民族を二つに分けた丘に立つ

小澤 幸泉

エルサレムへの旅であろうか。
キリスト教、ユダヤ教、イスラム教それ
ぞれの聖地であり、人も物も複雑にからみ
あうその丘で、はたしてどのような感慨が
作者の胸に去来したのであろうか。

黒門へ中国人が流れこみ

榎本 日の出

先日住吉大社で中国語らしき発音の観光客に出会う。デパートや家電量販店等では爆買いをするという彼等。黒門市場にまで押し寄せるそのパワーにたじろぐ。

美術展座り座って出口まで

古今堂 蕉子

美術展めぐりはきつい。名画展ともなると入館前から長蛇の列。ウフィツイ美術館やブラド美術館。海外まで足を運んだ遠い日の若さをおもう。

正論を吐いて自分を追いつめる

小谷 集一

正義と正論で世界が回っていると思うほど若くも初心でもない。しかし、ここで一本釘を刺さねば、私のアイデンティティーはどうなる、と孤独な隘路をゆく。

入院をしても女難がつきまとう

加島 由一

アハハハ。病院でも面目躍如ですね。由一さん！お元氣そうではとしました。同病の方は退院されて句会でお会いしましたよ。月例の本社句会でお会いできるのを楽しみに。

表題のカット画妻のプレセント

坂上 淳司

「朝日なにわ柳壇」の入選句が百句に到達、句集を上梓した作者の喜びの一句。巻末の似顔絵はお兄様の作とか。ご家族の祝意が百句集を盛りあげる。深そうな淵だが糸をたれてみる

吉岡 修

魚釣か新しい趣味か、まだまだ挑戦しようという姿勢を見習いたい。いつまでも元氣なお姿を拝見したい先輩のお一人。長生きをしますなあと税を取り

三好 專平

とれるところを決して外さないのが税金。どうぞいつまでもご活躍。人間に飽きて動物園へ行く

海老池 洋

小賢しいヒト科より本能のままの動物と対面、たまに素の形を取り戻したい思う自然な欲求。

手をつなぐ人は居ますか冬の底

白川 淑子

冬の底の寒気は厳しい。老いと病があればそれに拍車をかける。あなたは？と氣遣う作者のやさしい心根が伝わって来る。

子が来るとすこし仲良くなる夫婦

久保田 千代

親心は切ない。葛藤があるとうちの良い夫婦を演じ、そうこうしているうちに意地の張り合いも収まり、円熟の境地に達するののか。通学路にあつてはならぬ手向け花

緒方 美津子

通学路の未来を大人は守り抜かねば。それにつけても酷寒酷暑の老軀に鞭打つ見守り隊のご苦労を思う。物忘れ増えて身軽になつてゆく

ストレスの中にもぐって眠りこむ

渡辺 富子

目から鱗。身軽になると思えば物忘れも又よし、その中で眠るという連続！ 達筆な賀状挑戦状らしい

倉益 一瑤

なるほど挑戦状でしたか。あの見事な毛筆は。「あなたには負けてへんぞ」と。

以上、達人たちの名句を堪能させて頂きました。おしまいはこの爽やかな一句で結びたいと思います。

気楽に生きたい青空にメール打つ

松本文子

水煙抄鑑賞

—4月号から

松山芳生

水鏡今日の私は如何です

上田 ひとみ

静寂な水面に自分の姿を見る時、きつと素直にほめてくれるのです。外出する際、また身嗜みを確かめるのとは違い、水たまりに映るもう一人の微笑む姿に、自他共に納得している様な。

哀しい時は猫がそばから離れない

櫻崎 篤子

落ち込んでいる時に誰かが背を摩ってくれる。傍に居て相談のつてくれる。否、自分が離さないのかも知れぬが、傍に居てくれる心強さに元気を貰うのです。

新嫁が来たら家じゅう百ワット

藤井 智史

賑やかな風景が伝わってくる。中でも新婚時代は二人切りの生活が。LEDの長持ちする明るさを期待しています。

弱音吐く自分褒めたり叱ったり

永井 三津子

揺れ動く自分の弱さを反省したり、叱咤したり、喜怒哀楽の生活の中で、自分をコントロールして一日一日を大事に生き抜くことが。

寒波到来雪の下では春を待つ

神野 きっこ

立春も過ぎ、でも真冬なみの寒波、それでも光は強さを増して、雪の下では土の匂いが増しその温もりで、動植物が目覚め一気に活動するのです。

白線も弾むカバンも新年度

木田 比呂朗

雪国では雪の消えるのを待って、道路の線を塗り直す。新年度の始まりは新しいカバンの弾む元氣印が、またフレッシュな社会人の門出の季節でもある。

方言を都会の中で聞き分ける

藤田 武人

都会では各地からの人間が融合して生活している。器用に会話を交わしているが、どこかに土地の言葉のアクセントが散見される。国訛りが適度に機能しながら、人間関係が保たれている。

満天の星の出迎え里帰り

山下 純子

人混みと監視社会からの里帰り、待っているのは両親、兄弟姉妹、友人…の笑顔。元気を充電する大切な時間を互いに共有することが肝要である。

「戦争」が死語となる日はいつの日か

本田 さくら

平和を願わない人間はいらぬだろうか、「戦争と平和」は人類の永遠のテーマ。戦争が死語になる可能性を信じたい。ほめられてまたゼンマイの猿になる

田中 ゆみ子

叱られるばかりでは、積極的な仕事が出来ない。反面、褒められる事によって仕事の歯車になる事が大切だ。甘酒に元気をもらいする除雪

斉藤 宏子

雪の降らない地方の生活が羨ましい。雪そして雪、吹雪と厳寒での生活に除雪の仕事が加わる。甘い酒でほっこり疲れを取り払い、エネルギーに転換し春の来るのを待つのです。

生命線信じ白寿の夢描く

玄番 美恵子



追悼

白根ふみさんを偲んで

政岡 日枝子

きやらぼく川柳会を永年にわたり、副会長として、会計係として、また鳥取県川柳作家協会の大世帯の会計を受け持つて頂いた白根ふみさんが、二月十三日未明に、安らかに息をひきとられ、大勢の知人、友人、川柳関係の方々に見送られ旅立ってゆかれました。

昭和五年生れの満八十四歳でした。甲吟として川柳塔主幹の句が読み上げられました。

きやらぼくのあの頃思っあなたを想っ

小島 蘭幸

きやらぼく関係の参列者の眸にはうっすらと涙が見えました。

川柳に関係のない人たちも蘭幸主幹の弔句に心をうたれたようでした。

ふみさんは三年半前くらいに発病され退院してからは、日常的には全く普通の生活をされ、家が近かったこともあって、殆ど毎日のように顔を合わせて語り合っ

ておりました。

今年の一月になって再びの入院。お顔を見に病院に行っても普段と変わらぬお喋りをして、帰ったものでした。

それが三週間ほどの間に辞世とも思える句を頂きました。

数ページいとしむ今を心する

陽光に島なみ蝶になり渡る

数あわせばかりの昨日より豊か

満点に足りない今を満ち足りる

まほろしの地図を伝って曼陀羅へ

ふみさんはきやらぼく川柳会の一歩華やかな頃の立役者でした。

ふみさんと私は二頭立て馬車のように、いつも一緒に各地の川柳大会、県川柳協会の集まり、柳友の葬儀に至るまで、い

つも一緒に行動をしていて、私はどんなにか助けて頂いたことでしょう。心強い仲間でした。

きやらぼくといえは忘年句会を大々的

に行い、余興などを賑々しく行っておりましたが、ふみさんはスラリと長身でツカガールのような容姿で踊っておられた姿が目には浮かびます。

また、字は達筆で俳画なども上手、その上事務能力にも長けた人でしたから、私は全面的に頼り切っていました。

月例会の句座でも入院されるまでは毎月出席され、選者も務めながら、お茶わかしもされるといって、気配りの人でした。

ためらわず握手をひびき合ったから

夕暮れるこの世に残りたい散歩

時刻到来芒野までは程近い

神さまがきつい信号出してくる

来いという時が華だと思っまで

「ふる里の山のように奢らず謙虚な作風にすれば、深くしておだやかなものが作れるものと信じて止まない」

この言葉を白根ふみさんは大事にしておられました。若くして亡くなられたご主人様が、ふる里の山で待つておられましょう。

わたくしが静まるように雑草を抜くういきょうの花賞をもらわれた中の一句です。

どうぞ安らかにおやすみください。



花に想う (2)

桜がもてはやされるのは、厳しい冬に耐えて「やっと春！」という、咲くタイミングの良さにもあるのでしょう。そして、一斉に満開になったときの妖しく凄絶な有様。のみならず、散り際の儚さなど、優れた演出家も及ばぬ見事なシーンの連続に、自らの人生を重ねて想いを深くさせられることにもあるのでしょう。特に、一陣の風に誘われ舞い散る花吹雪は、この世のものとも思えぬ美しさです。

生きのびて桜吹雪の中にいる

無人駅から桜吹雪に見送られ

お洒落して桜吹雪に負けている

花吹雪女優の顔で歩き抜く

花吹雪浴びて夫とストレッツ

花吹雪一瞬見失うこの世

ああよくぞここまで生きて来たという遥かな想い。片田舎の小さな駅から「さようなら」とでもいうように見送ってくれた桜吹雪。そして、どれほど着飾ってみても桜の舞いの艶やかさにはとうてい勝てないという想い。

また、花吹雪に包まれたとき、人それぞれが晴れ舞台の主人公。女優になったつもりで颯爽と歩む人もいれば、夫婦でストレッツに励む人あり。そのように元気づけてくれるのも、この世をベールで覆ってしまうのも花吹雪のパワー。

桜散る花見の誘いままに

ためらい傷どこにも見せず散る桜

山田 葉子

森下よりこ

西村りつえ

辻村 ヒロ

渡辺 富子

浮 千草

安芸田泰子

古川 奮水

ひらひらとゆめを見ながら散るさくら

さくら花なを叫んで散ってゆく

花筏村が消えるという噂

過去ばかり永くなるなりさくら散る

さくらからさくらで歳をとっている

散ってゆく花を眺めて感傷的になるだけでではなく、「花見の誘いがなかった」と不満を述べていること、「ためらい傷」などは見せず「夢を見ながら」「何かを叫びながら」散っているという見解などはいかにも川柳的。そして、散り去った花びらは「花筏」となって流れ下りながらも尚、眺める人に想いを誘います。また誰しも、誕生日や正月などの節目では過ぎ去った歳月を振り返りますが、しみじみと想いを深くさせられるのはやはり、ここに沁みる「さくら」でしょう。

咲き出して初めて知ったあら桜

山桜あんなにも居たんだね

山さくら日本人はおとなしい

濃い紅が似合う戌申の八重桜

感動はややうすがち八重桜

酔っぱらいは相手にしない八重桜

ニュースで「開花予想」などと話題になるのはソメイヨシノ。山桜は山の中腹などで「ひっそり」なので注目されることもなく、「あつ、あんなところ」に見てもらえる程度。また、開花時期がソメイヨシノより二週間ほど遅い八重桜も「感動はややうすがち」。恒例の「大阪造幣局の通り抜け」は、八重桜の開花時期に合わせて、「八重桜こそ」と讃えるファンで大いに賑わうのはご承知の通り。

山川日出子

土橋 螢

山崎 武彦

春城 年代

籠島 恵子

樹本 宏子

平木 公子

牧富喜子

村上 直樹

村田 絹子

村上佳津代

川柳への誘い

小川 注湖

壁に「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」という句を短冊に写し掲げている。寝転んだ格好で周りを見回し、天井の板目模様を眺め、片隅の机を見る。そして畳一畳の広さしか占めていない私を背中に実感し、畳一畳の上に練り広げている別の私の人生観を眺める。まさに人の生き様は「起きて半畳寝て一畳」の上にさまよう。

退職後、現役時代に関心があつて出来なかつた短詩文芸への趣味が、結局川柳への相性が一番と感じ、新聞投句を続け書店から数十冊の川柳人門書を求め、読みふけていたとき、この句に出会い魅せられ座右に置いてわが人生を振り返る。そして句の作者が戦前戦後、川柳文学の指導者として活躍し、川柳六大家、また川柳六巨頭と言われた一人、麻生路郎師

であることを知った。路郎師は著書「川柳とは何か」の中で「句はその人の心の呼吸」そして「川柳は人間陶冶の詩である」と説く。その川柳思想に心酔した。川柳六大家が川柳の革新、文学としての地位の確立へ心血を注いで、残してきた多くの秀句や語録を読み知ることは、川柳文学の原点「品格」を見ることであり、今、おもしろおかしく人を笑わせることを主眼に狙った駄洒落川柳を巷間に見かける。本来の上品なおかしみや温もりを失った言葉遊びの川柳つくりになり、はなはだしきは同人結社名、人格を表明する雅号までも品位を疑いたくなる命名を見て、文学川柳へ回帰の願いがあつた。

路郎師が川柳の真髓に近づくには「形式あつての川柳」「多読多作」。そして川柳を志すからには「いのちある句をつくれ」「二句を残せ」と説いている心境にはいまだ遠く及ばないが、寝転んでいるときはいつも句をつくっている。

畳一畳の上で出来た句が各地の川柳大会で入選、また天・地・人の三才に抜い

て貰ったときは大きな「喜び」を感じる。また川柳を学んでいたからこそ、川柳の効能だと思つたことは長い入院生活を経験したが、人が言うような退屈な日々はなく、毎日川柳をつくり入院の苦痛を忘れ過ごしていた。院内を見回すと親切な看護婦さん、リハビリを頑張る患者など川柳の材料はいくらでもあつた。つくつた多くの句を眺め、句会へ出せる句を推敲して選ぶことは楽しみであつた。

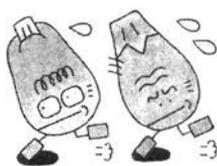
これらの感慨は川柳を志す人々と共有したいものであり、普段の言葉でつくる川柳へ多くの人の関心を持つて貰い、近くの川柳句会へ出席を呼びかける。そしてメモ帳を手人間の喜怒哀楽を詠み、また気になる社会の動きを五七五の十七音字に書いてみる。いつも右手にペン、左手に国語辞典を持つようになれば、もう川柳はあなたを放さないだろう。

感性豊かな文字が綴る一句が人間を磨き、日々の生活に潤いと文化をもたらし、あなたの昨日と今日は大きく変わり、その喜びに興奮させられるだろう。



(投句19.2名)

今回は、図柄自身が結構お喋りしてくれたように感じられて、皆様のインスピレーションの幅が狭まるのでは、と思いましたが杞憂でした。それどころか、いよいよ自由には、その発想は四方八方へ伸びているようですね。では、ご一緒に。



尾道市 大本 和子
爆買いの妻にブレイキかららない

(評) どこかの国の人たちに刺激されたのでしょうか。一度アクセルを踏んだが最後かも、大変なことになりました。

八尾市 前田 紀雄
善玉菌悪玉菌も疲れ気味

(評) 人間の腸の中のようにでもあり、せわしない世間の出来事にも思えます。どちらにせよ(疲れ気味)に共感。

米子市 八木 千代
未来まで二足歩行のスニーカー

(評) この足で何時までも、何処までもあるきたい、いつそ未来までもね。スニーカーの軽やかさが伝わってきます。

大阪府 原田すみ子
追いかけるふり見せるのも思いやり

(評) 逃げる人を追いかける気持ちなんてさらさら無い。でも、思いやりを見せるために(ふり)するなんて、ああ。

鳥取県 斉尾くにこ
受け止めてあげる受け流してあげる

(評) (受け止めてあげる)のも愛、(受け流してあげる)のも愛。こんな女性に出会える男性は何と幸せなこと。

箕面市 広島 巴子
ホワイトデー僕の本気を受け取って

(評) 単なるパレンタインのお返しではありません。俗に言う「義理」ナントカではないのです、本気なのですから。

富田林市 関 よしみ
あの丘へ新幹線を見に行こう

(評) 北陸新幹線が開通して、乗れないまでもせめて走っている姿を見たいもの。時代には乗り遅れないようにね。

長岡京市 山田 葉子
駆け抜けて子供の頃に帰ろうか

(評) 走るといって爽快感の中で、ふとタイムスリップする。このままあの懐かし

い子供の頃まで駆けて行けそう。

吹田市 木下 敏子
履物を間違えてきた右左

(評) 走りにくいと思つたら、靴を右左反対に履いてきちゃった。止まって履き替えるのも大変だし、どうしよう。

鳥取市 前田 楓花
人生って逆転劇があるものよ

(評) (あるものよ)という冷静な口調に却ってスゴ味を感じます。やがて大ドンドン返し起きることでしょう。

大阪府 平井美智子
とりあえず予約に走る月旅行

(評) 実現出来るかどうかなんて二の次、とりあえず予約が受け付けられればそのうち何とかなる。行動力あるのみです。

富田林市 古田 千華
恩讐を越えて二人は共犯者

(評) 過去のさまざまな出来事も、今となっては同じ時代を共有したに過ぎない。流れ去った時間のあまりの長さを感じる。

枚方市 小林 わこ
一度止まってコーヒータイムしましょうよ

(評) 駆けっこするのも疲れてきました。ちよっと休んでコーヒードでも飲みながら、今後のことでも話し合いませんか。

堺市 内藤 憲彦
知らぬ間に右へ右へと走らされ

(評) いつの時代も、後から見れば大きな力でねじ曲げられている感否めませ

ん。(知らぬ間に)が恐ろしい。

鳥取市 池澤 大鏡
影武者がどちらかわかるものかしら

(評)戦国時代の武将など、本人確認な
んで本当に出来ていたのかどうか。歴史
が揺らぐような事実が隠されているかも。

玉野市 片岡 富子
ボタン押す一秒の差で買えませぬ

河内長野市 穂口 正子
料簡の狭い男だジタバタと

横浜市 菊地 政勝
ボルトより速く走れるわけではない

三田市 堀 正和
汗かけばうまいビールが待っている

西宮市 緒方美津子
やつつけてきたよパソコンのウイルス

高槻市 片山かずお
ゆるキャラに徒競走とは殺生な

芦屋市 竹山千賀子
誰ですか靴に磁石を付けたのは

大阪市 太田としお
コンビ解消馬の合わない漫才師

豊中市 藤井 則彦
定年後ハローワークへひた走り

和歌山市 古久保和子
逃げ足は若いもんにはまだ負けぬ

大阪市 立蔵 信子
五分咲きになったらしいよ急ごうか

弘前市 高瀬 霜石
夫は仮の名 本名コマネズミ

札幌市 富永 恵子
ウインドウ背筋を伸ばせ春ですよ

和歌山市 磯部 義雄
急がねば天国行きに間に合わぬ

香芝市 大内 朝子
二番手のくやしきバナネにする闘志

箕田市 酒井 真由
ばあさんやタツプダンスはちときつい

米子市 生田 和之
出る汽車をちよつと待たせた田舎駅

奈良市 大久保 眞澄
ワッセワッセ半額になる六時半

高槻市 島田千鶴子
頑張れば何かいい事ありそう

和歌山市 楠見 章子
そこそこで妥協あなたとエンドレス

三原市 鴨田 昭紀
旨そうな方へなびいていて邪心

河内長野市 松岡 篤
私たち婦唱夫随で五十年

倉吉市 山中 康子
卒業へ恩師に捧ぐありがと

佐賀県 真島久美子
半世紀まだ缶蹴りの途中で

四條畷市 吉岡 修
LEDにエンジンさまが席譲る

大阪市 平嶋美智子
此処よりはいいとこきつと見つかるさ

堺市 矢倉 五月
おひとり様一個あなたも並んでね

尼崎市 藤岡 りこ
どこまでもついでくる影過去の灰汁

芦屋市 黒田 能子
おとつとカーブばかりのバスの旅

米子市 後藤美恵子
争いの無いところへと逃げて行く

青森市 守田 啓子
日没が追ってくるのよさあ逃げろ

西宮市 山本 義子
三猿主義ふたりはぬけてカラオケに

堺市 澤井 敏治
お嬢さん落しましたよハンカチを

鳥取市 倉益 一瑤
貧乏神何時までついて来るんだい

松山市 栗田 忠士
裸です種も仕掛けありません

八王子市 川名 洋子
式場を決めに行きましょララララ

大阪市 榎本 舞夢
年金を持って行かれた追っつかへ

大阪市 坂 裕之
もう一步ほらすぐそこに幸せが

7月号発表 (5月15日締切)



柳篋に2句

第三回 春の川柳塔まつり誌上大会

第三回春の川柳塔まつり誌上大会に際し、北は北海道から南は沖縄まで714名のご参加、ご支援を戴きました。ありがとうございます。また貴重な誌面に誌上大会要領をご案内、ご掲載賜りました各川柳社、個人的にそれぞれご紹介くださいました各位のご厚情に、心よりお礼を申し上げます。

ご投句戴きました作品は、無記名の句箋のまま6人の選者にお送りし、選句をお願い致しました。返送された句箋は受付番号と照合して作者名を記入致しました。選者の皆様のご労苦に深く感謝申し上げます。

入選作品は各題とも平拔111句、秀句10句、特選1句、計122句です。なお、各題特選にはささやかですが、賞品をお送りしました。

各 題 特 選 句

雑 詠	ポ ー ズ	来 る
<p>小島 蘭 幸選</p> <p>おろしりんごは現し世のようである</p> <p>三重 小河 柳 女</p>	<p>木 本 朱 夏選</p> <p>拳手の礼しながら落ちていく椿</p> <p>鳥取 八 木 千代</p>	<p>川 上 大 輪 選</p> <p>人魚にはなれそうもない風呂上がり</p> <p>佐 賀 真 島 久美子</p>
<p>大 西 泰 世選</p> <p>花の闇一番好きな人と居る</p> <p>岐阜 武 藤 敏子</p>	<p>津 田 暹 選</p> <p>しあわせが来るまで冬を編んでいる</p> <p>岡山 安 原 博</p>	<p>新 家 完 司 選</p> <p>春はもうゼブラゾーンの辺りです</p> <p>大阪 美馬 りゆうこ</p>

来
る
津田
暹
選

平等に来ると思つていたチャンス
来てほしい来てほしくない子の巢立ち
来るこないどちらでもよい日暮時
不意に来る不幸も確と受け止める
掛け捨ての保険満期に手を合わす
励ましの絵手紙が来る里言葉
福の神も疫病神も不意に来る
攻めて来る気配ばかりの隣国だ
来た後で来る来ると言う評論家
アベノミクスおこほれ来るの待つて老い
竜巻も恋も突然やつて来る
足腰も住んでる家もガタが来た
ガタが来る家をローンが追い詰める
チャルメラの音が昭和を連れて来る
靴下の穴から見えて来る戦後
厭きもせず影がいとしくついて来る

大阪 井本 健治
和歌山 三宅 保州
兵庫 山本 芳男
香川 安田 翔光
奈良 山田 順啓
大阪 中井 アキ
鳥取 新家 完司
岡山 小林 妻子
愛媛 田辺 進水
北海道 三浦 強一
三重 橋倉久美子
愛媛 古手川 光
大阪 藤田 治雄
岡山 高橋由紀子
青森 吉川ひとし
和歌山 宇野 幹子

家計簿に似合つたサンタきつと来る
8020おかき沢庵どんと来い
故郷より心地よいのか外来種
みいちゃんのじよじよが呼ぶから春が来る
来る春へ土はいのちを溜めている
前向きに歩けば駆けてくる未来
草食獣も肉食獣も来る泉
温い手の介護ロボット来る日待つ
ウイルスは挨拶なしにやつて来る
いい仲間笑い袋をさげて来る
「おいお茶」水のひとつも出て来ない
また来るよわからぬ母にそつと言ひ
スープの冷めぬ距離でおでんの鍋が来る
来るものは来るひげを剃る顔洗う
拒否しても拒否しても来る誕生日
電動に足を託して友が来る
ノックする貧乏神のストーカー
光る日が来ると信じて磨く石
順調にネジが緩んできたようだ
歳重ね人脈底をついて来た
いくつもの壁を砕いて幸が来る
折れているところを抱きにくる微笑

広島 浅原志ん洋
大阪 村上 直樹
岡山 河原 孝志
愛媛 除田 六郎
岡山 高木 勇三
和歌山 武本 碧
三重 吉崎 柳歩
岡山 池田たか子
京都 三宅 満子
山口 山縣 双華
高知 茨木 昭夫
兵庫 藤原 紘一
岡山 畑 佳余子
埼玉 宮本彩太郎
奈良 小金澤貴一
大阪 栗田 久子
奈良 飛永ふりこ
愛媛 松本 宗和
大阪 古今堂蕉子
大阪 羽田野洋介
鳥根 相見 柳歩
兵庫 宮崎美知代

朝が来たことが嬉しい磨硝子

青森 三浦 蒼鬼

線路来る被災地の夢膨らます

仙台 大久保もとじ

朝が来るただそれだけでありがたい

大阪 嶋澤喜八郎

弥陀の手が伸びる断捨離急がねば

高知 清水由紀子

生き下手な男にだつて朝は来る

兵庫 福田 好文

特高がやつて来そうで窓閉ざす

埼玉 渡辺 梢

きつと来る春を信じているニトロ

岡山 伊藤 寿子

どこに居ても私を攻めて来る花粉

和歌山 土屋起世子

本当の春が来たよとスギ花粉

大阪 澤井 敏治

写メールに孫乗つて来るひとり旅

広島 笹重 耕三

古い先を見つめる春が来るまでに

和歌山 木本 朱夏

茶封筒どうせお金の要る話

兵庫 堀 正和

金婚へ縫い目確かな春が来る

山口 吉村 正枝

過疎の村ネットスーパーやつてくる

大阪 中川ひろすけ

ネットからご当地グルメやつて来る

広島 若年 幸子

来世では婚活すると妻が言う

大阪 伏見 雅明

仲間から汗の匂いのカンパ来る

大阪 藤井 正雄

わたくしを縛る招待状が来る

鳥取 倉益 一瑤

自腹切る様に除雪車やつて来る

兵庫 春名 恵子

ヨーデルの音符で春がやつて来る

鳥取 倉益 一瑤

葉脈に在るか無しかの春の音

青森 碧井 溪翠

揺り鉢に一番そろそろ春が来る

奈良 小林すみえ

被災地に必ず春はやつて来る

兵庫 大黒 政子

絵てがみの春はでつかくやつて来る

岡山 森山 文子

来客を三分待たすおもてなし

愛知 藤田 千休

春来ると税申告に時とられ

大阪 小森 正博

電脳が全てを決める未来とは

大阪 源田 啓生

また来るよ健二待つてた戦禍の子

福岡 坂本 比呂

水漏れのだんだん増して来る老後

大阪 海老池 洋

老いのマンネリを崩しに孫が来る

佐賀 坂本 蜂朗

九州へいつも台風折れてくる

和歌山 坂部紀久子

洗濯の邪魔をしに来る低気圧

岡山 山崎三千代

持前の明るさで来る集金に

兵庫 西口いわゑ

極上の笑顔でやつてくる詐欺師

鳥取 藤原 鬼桜

お洒落してチョコレートたち来てくれた

兵庫 坂本 星雨

人間の姿で鬼が今日も来る

大阪 中村 恵

認知症来るなら来いと辞書を繰る

大阪 坂本 星雨

風のかたちが見えて来るまで塔に立つ

広島 小島 蘭幸

あったかい笑顔に笑顔寄つて来る

千葉 日下部敦世

壊れそうな私に朝が来てくれた

鳥根 伊藤 玲子

禍と福が仲よく余生食べに来る

兵庫 井口と志女

相談はショートケーキと共に来る

奈良 山本 昌代

連休は金食い虫がやつて来る

兵庫 東内美智子

春はもうゼブラゾーンの辺りです

大阪 美馬りゅうこ

ようやくと来た春なのにまたマスク

不作法がスマホ片手に乗ってくる

傘寿来る何も怖れる事はない

年金が貧乏神をつれて来た

長閑だな年神様がやって来る

ついて来い言うた男がついて来る

惑わない男と流れて来た河口

おばちゃん達はいつも鉛玉持つて来る

春よ春全細胞がフォルテシモ

年金を酸欠にする孫が来る

大丈夫アンパンマンはきつと来る

百歳の平均寿命やがて来る

いづれ来る私も金も燃えるごみ

充電中やって来たのはテロリスト

銀杏を拾うと僕の秋が来る

渡り鳥インフル打ってからおいで

へなへなと疲れ帰って来た賀状

いつか来る介護が終る日を想う

年金が生きてますかと聞いてくる

ニンゲンが来るとおびえている火星

敵が来る花も生けたし刃も研いだ

水動き私に春が来る兆し

大阪 初代 正彦

奈良 大久保眞澄

和歌山 堀 富美子

大阪 増田 隆昭

和歌山 松尾 和香

大阪 米澤 俣子

福岡 弘津 明子

大阪 寺川 弘一

徳島 福本 清美

岐阜 武藤 敏子

大阪 鈴木いさお

鳥取 吉田 弘子

熊本 黒川 孤遊

兵庫 濱邊稲佐嶽

広島 北村 善昭

鳥取 中田 房江

広島 田辺与志魚

大阪 高杉 千歩

大阪 了味 茶助

和歌山 石田 隆彦

福井 中村 吉範

大阪 若松 雅枝

姿見の裏から老いがすいと寄る

赤紙があなたの町にやがて来る

地吹雪が戦車のようにやがて来る

外来種ふえてお池が狭くなる

ピケティも時代の潮目告げに来る

玉子焼き好きなまままで古稀が来る

喜寿が来て甘え上手になつてみる

秀句

四年目の余震と春がやって来る

水仙が香り内定通知くる

背を伸ばすどんな明日が来ようとも

来るたびにウルトラマンも年を取る

亡妻の名前で子からチョコが来る

ダイレクトメールが届く生きている

偽善者の顔して喜寿がやって来る

粥うまし いずれ一人の時が来る

あの世から使者来るまでの私小説

あの人が私の水を足しに来る

特選

しあわせが来るまで冬を編んでいる

軸吟

迷惑と詐欺で溢れる受信箱

千葉 本間千代子

大阪 水野 黒兎

兵庫 みぎわはな

岡山 永見 心咲

大阪 荒川 鈍甲

大阪 太田扶美代

大阪 横山 捷也

青森 月波 与生

兵庫 古川 奮水

鳥根 長谷川博子

兵庫 河内谷 恵

大阪 次井 義泰

青森 野沢 省悟

愛媛 高畑 俊正

大阪 山本 半銭

大阪 西出 楓楽

静岡 米山明日歌

岡山 安原 博

東京 津田 暹

来
る
新
家
完
司
選

パトカーもやじ馬も来る交差点
 団欒にビザがドデンとやって来た
 孫が来た 付録のようなムコ殿も
 ガールフレンドが来るので風を入れ替える
 虎落笛父の叱咤がやって来る
 齒ならびがナイフのように斬りに来る
 過疎の地に奇特な嫁が来ると言う
 やがて来る日暮れに四股を踏んでおく
 後期高齢がやって来た喉仏
 来る春に備え充電する桜
 新漬と生椎茸が不意に来る
 遅れて来るのは自信があるのだろう
 ふわふわを抱えて春の使者が来る
 ノックする貧乏神のストーカー
 ついて来い言うた男がついて来る
 相談はショートケーキと共に来る

来るといい水素社会を生きて待つ
 潮風にくぎ煮の香り春が来る
 ライバルが大吟醸を下げて来る
 漁友が来る地酒と海の幸提げて
 最後かのおもいに集う同期会
 散る時が来るとは思わない蕾
 未来からひらめきふつと降りて来る
 電気メーターぐるぐる廻り付けが来る
 旧姓で来る肉筆の年賀状
 アルカイックスマイルを連れ春が来る
 冷蔵庫膨らんでいる孫来る日
 孫が来る襖破りにやって来る
 隣からためらいもなく来る黄砂
 定刻に誰も遅れぬ飲み仲間
 ヨウと来るオウと答えて酒になる
 口笛が流れて春の来る気配
 だんだんと声遠くなり睡魔来る
 彼が来る化粧直して着替えして
 家中を湧かす愉快な嫁が来る
 マイナスとプラス交互にやってくる
 いつか来る死ぬ日を思う洗面器
 春の陽が心の窓を開けて来る

鳥取 田中 天翔
 大阪 炭谷 優史
 広島 村上 和子
 鳥取 石谷美恵子
 大阪 中野ふづき
 大阪 前原 正美
 徳島 寺澤 紀子
 鳥取 田中けいこ
 大阪 小谷 集一
 神奈川 加藤ゆみ子
 奈良 山下 純子
 大阪 あまのトーナ
 大阪 上山 堅坊
 山梨 内藤 巖
 鳥取 竹村紀の治
 岩手 徳田ひろ子
 大阪 藤原 大子
 宮城 中津川シゲ子
 和歌山 福井 菜摘
 鳥取 西村 久江
 兵庫 河内谷 恵
 鳥根 多久和敬子

満期来る頃はあれこれ故障する
 金粉の酒と一緒に友が来る
 痛点を春の気配がノックする
 気にかけてくれていたんだ便り来る
 座つてはおれぬ来た来たギャル御興
 悪友から絵文字だらけのメール来る
 チャンス到来風を掴んだ津軽風
 春が来る空から地から海辺から
 春一番アサギマグラが迷い込む
 新聞が来る独り住まいも見捨てずに
 お願いをしたからきつと春は来る
 期待され新人さんがやって来た
 いつか来るひとりへ風が鳴り止まぬ
 飛んで来た怪しい噂除菌する
 来たバスに乗っただけかもわが一生
 急に来る友の計報と歯の痛み
 選挙カー来たので散った立ち話
 来るものは来るひげを剃る顔洗う
 木枯しが来るぞあかあか点そうよ
 スパンコールきらきらさせて来る女神
 持て余すヒマへ呑み助から電話
 ピケティも時代の潮目告げに来る

鳥取 岸本 孝子
 広島 室屋 正子
 奈良 松本 柁子
 京都 清水 英旺
 大阪 奥 時雄
 大阪 森松まつお
 青森 福士 慕情
 兵庫 上田 和宏
 奈良 池田みほ子
 鳥取 八木 千代
 大阪 嶋澤喜八郎
 兵庫 黒田 能子
 大阪 神田 良子
 佐賀 横尾 信雄
 大阪 松浦 益子
 愛媛 松本 宗和
 三重 北田のりこ
 埼玉 宮本彩太郎
 大阪 山本 半銭
 奈良 中山恵美子
 兵庫 足立 茂
 大阪 荒川 鈍甲

不揃いの茄子が母からやって来る
 「ただいま」と降つて来たのは宇宙ゴミ
 少子高齢冬が真つ直ぐ駆けて来る
 明日は来る白紙と筆を携えて
 春が来る海からそつと山からにゅつと
 スギ花粉が来るので今日は逢えません
 回転木馬もうすぐあなたやって来る
 彼が来る時だけ部屋を掃除する
 吉報は大きな声でやって来る
 散らかっている時に来るお姑さま
 線香が揺れて親父が呑みに来る
 値引シール来るまで徘徊しています
 冥土から来るお迎えはこぼれぬ
 来るものが来た歳時記と向きあつて
 竜巻も恋も突然やつて来る
 リモコンを押したら月がやって来た
 飲んでるか食べているかと娘のメール
 ここ空いてますかと横へ来た出合い
 あねもねに春の音楽隊が来る
 少しだけ借りを返しに来たワイン
 終末が来るとカラスが噂する
 リニアより寿命が早くやつて来る

大阪 伊達 郁夫
 奈良 岡谷 樹
 奈良 田中 秀貴
 愛媛 高岡かずこ
 鳥取 木天 麦青
 香川 みよしすみこ
 愛媛 木内 節子
 大阪 大隅 克博
 鳥取 岸本 宏章
 和歌山 福本 英子
 奈良 高田まさじ
 大阪 京谷 文子
 鳥取 鈴木 一弘
 大阪 森中恵美子
 三重 橋倉久美子
 大阪 赤松ますみ
 大阪 矢倉 五月
 兵庫 山田 耕治
 愛媛 吉松 澄子
 大阪 原 洋志
 奈良 柴橋 菜摘
 大阪 新海 信二

縁側に春が来ているお茶の味

愛媛 山之内さち枝

愛唱歌不意に出て来て口ずさむ

大阪 中川 一男

雨が降り予定の消えた子等が来る

大阪 江見 見清

一週間かけやって来る日曜日

青森 高瀬 霜石

床の間は片付けました孫を待つ

東京 山田こいし

にんげんが来るから遮断機をつける

広島 鴨田 昭紀

いくつになっても母さん飛んでくる

大阪 井本 健治

空き家の目立つ街にもツバクラメ

奈良 下谷 憲子

ごそごそと大地が動き春が来る

岐阜 草野 稔

「メイドインジャパン」を買いにチャイナから

奈良 池田貴佐夫

冬なのに農機まつりのチラシ来る

兵庫 北澤 稠民

円安の船で来ました異邦人

青森 吉川ひとし

友が来るむかしむかしの匂い連れ

奈良 ひとり 静

娘来る手に缶ビール提げている

福井 寺井富三郎

口角を上げて幸せやって来る

大阪 源田 啓生

順番が来るまで寒い椅子である

鳥取 細田 裕花

朝ドラが観光客を連れて来る

愛媛 田辺 進水

ヨードルの音符で春がやって来る

鳥取 三島 淞丘

きたきたきたきたきたホールインワン

広島 野村 賢悟

草食獣も肉食獣も来る泉

三重 吉崎 柳歩

満期来た学資保険で行くハワイ

京都 榊本 宏子

屋根に雪積んだ貨物が故郷から

兵庫 加川 靖鬼

春が来るなだかんだと言いなながら

兵庫 田村ひろ子

今日が来てあつげらかと去る昨日

三重 小川 柳女

予定表白紙のまんま春が来る

京都 杉野 恭子

朝が来たことが嬉しい磨硝子

青森 三浦 蒼鬼

熱あげたほうが先来る待ち合わせ

大阪 都 武志

また来たか淋しいのかと河馬が言う

奈良 居谷真理子

断ち切れぬ想いメールはきつと来る

愛知 猫田千恵子

バンドネオンの音色が夜に来て座る

和歌山 辻内 次根

いづれ来るひとりぼっちに備えねば

大阪 早泉 早人

闇の中ともしび提げて友が来る

愛知 高浜 広川

手づくりを両手に提げて母が来る

高知 小笠原倫子

敵が来る花も生けたし刃も研いだ

福井 中村 吉範

誰にでも来る来る大安吉日

鳥取 斉尾くにこ

春はもうゼブラゾーンの辺りです

大阪 美馬りゅうこ

自転車のブレーキ音で友が来る

和歌山 古久保和子

軸 吟

大阪 美馬りゅうこ

向こうから父によく似たハンチング

青森 碧井 溪翠

黄砂降る郵便受けに請求書

鳥取 新家 完司

ポーズ 川上大輪選

考えるポーズが増える物忘れ
 いい知らせ両手で丸をするポーズ
 美味いねに小さくガッツポーズする
 散る花のひとひらごとにあるポーズ
 ポーズでは溝が埋まらぬ嫁姑
 「ハイチーズ」死ぬまで何度やるのやら
 颯爽と周回遅れポーズつけ
 仁王さまお疲れでしょうそのポーズ
 春よ来いポーズとつてる風見鶏
 力出し切ったポーズが様になり
 ポーズだけ見せても減らぬ天下り
 ポーズした鏡にうつる有頂天
 ポーズみな老いを背負った同期会
 ポーズではなく本当の不器用で
 強がりのポーズ崩さぬ独裁者
 エプロンを結んで母となるポーズ

愛媛 松本 宗和
 広島 北川 周興
 茨城 毛利 由美
 大阪 米澤 俣子
 大阪 松岡 篤
 岡山 浅越 茂雄
 大阪 京谷 文子
 愛媛 古手川 光
 和歌山 北原 昭枝
 岡山 宮本 信吉
 和歌山 喜田 准一
 大阪 升成 好
 鳥取 政岡日枝子
 佐賀 真島 清弘
 岐阜 草野 稔
 広島 岩本 笑子

にんげんの証が欲しいハイチーズ
 賛成のポーズの下に別の顔
 慌てずにポーズボタンを押して待つ
 無関心なふりでアンテナ張っている
 掛け声とポーズだけでは戦えぬ
 がちがちのポーズが写る明治初期
 マネキンのポーズはちよつと気取り過ぎ
 見せかけのポーズで歩く世間体
 セピア色の写真には無いVサイン
 好景気らしいポーズに騙される
 ポーズでも握ってほしい老いた手を
 満腹のポーズ野獣の隙だらけ
 わがままな夫を捨ててみようかな
 ふなっしーのポーズに和む冬の午後
 父親にそっくり足を組むポーズ
 様になるポーズを待っている鏡
 本気だと納得させる腕まくり
 Vサインやつと届いた春の風
 ハイポーズ犬と猿とを笑わせる
 褒められた途端声までポーズとる
 銃を持つポーズ憶えている両手
 善人のポーズ仮面がずれてくる

愛知 伊賀 武久
 宮城 大久保もとじ
 香川 安田 翔光
 大阪 出口セツ子
 兵庫 前中 勝
 静岡 神村 恭子
 島根 奥田 勝子
 広島 鴨田 昭紀
 大阪 坂上 淳司
 和歌山 根田よしこ
 愛知 彦坂 石転
 鳥取 吉田 弘子
 新潟 相田 柳峰
 鳥取 森脇 麗
 新潟 山倉 洋子
 福井 石谷 恵子
 兵庫 岸田 万彩
 大阪 針生 和代
 奈良 小早川秋子
 京都 藤井 文代
 山口 山縣 双華
 山口 中前 幸子

悪いことしていませんというポーズ
 とりあえず笑顔ひとひら春だから
 含羞草のポーズで次の策を練る
 ガッツポーズしたいだろうな力士達
 豪快なポーズに変えた酒の量
 野良着なら腰の曲りも気にならず
 季節を詠う春には春のポーズして
 盆梅のポーズが憎いしなやかさ
 大根が人より悩ましいポーズ
 オーバーな御辞儀何かしらじらし
 ファイティングポーズが決まらない齡
 謝罪会見型にはまってきたポーズ
 どんなポーズしても妻には見抜かれる
 頓挫するだろうな背伸びばかりして
 ポーズ取る私の影がうす笑い
 悪ぶっているけど見える思いやり
 本心を晦ます為の茶屋遊び
 割り切れぬことはほほえみだけに
 花だよりさくらはポーズ考える
 ユーモアが足りないマネキンのポーズ
 Vサインもうやめちゃった歳だもん
 ハイチーズよく化けたねと云う鏡

大阪 谷口 義
 茨城 岡本 恵
 徳島 福本 清美
 大阪 上山 堅坊
 和歌山 土屋起世子
 大阪 畑中 節子
 大阪 山本希久子
 岡山 河原 孝志
 大阪 前原 正美
 岡山 菊元 誠忠
 広島 小島 蘭幸
 奈良 米田 恭昌
 大阪 長井 善純
 佐賀 西村 正紘
 兵庫 萬浪紀代子
 岡山 上田真智子
 愛媛 除田 六郎
 鳥取 西谷 悦子
 京都 都倉 求芽
 三重 吉崎 柳歩
 大阪 穂口 正子
 和歌山 堀 富美子

午前様妻が笑顔で待っている
 落ちてなおポーズ崩さぬユキツバキ
 同じ席同じポーズで乗る電車
 踏ん張ったままのポーズで脱いである
 網の上もだえ苦しむスルメイカ
 威嚇するポーズとしては完璧よ
 日の当る位置かも知れぬポーズとる
 肩たたきポーズでない知りました
 考える人のポーズを日に何度
 騙されないぞ原発の死んだふり
 一呼吸おいてははずしたイヤリング
 とりあえず括弧を外す息をつく
 考える人になつてる眠つてる
 このポーズ崩せばばれるあかんたれ
 三猿のポーズで妻は不意を突く
 つきあげた右手に言葉などいらぬ
 重い荷をみんな捨てよと冬木立
 体裁を取り繕っているポーズ
 青空に勝利のポーズ干してある
 かぐや姫帰るポーズはやめなさい
 反省のポーズ盃伏せてある
 風邪をひいたかあのじゃじゃ馬がしおらしい

大阪 宮守 正博
 神奈川 菊地 政勝
 岡山 片岡 富子
 岡山 田中ケイ子
 島根 藤井 寛
 奈良 ひとり 静
 広島 林 武志
 山口 上村 夢香
 大阪 宮崎シマ子
 鳥取 竹村紀の治
 奈良 渡辺 富子
 和歌山 小谷 小雪
 香川 みよしすみこ
 奈良 高田まさじ
 大阪 村上 直樹
 愛媛 村山 浩吉
 愛媛 柳田かおる
 大阪 阪本 秀子
 愛媛 西村 寛子
 岡山 船越 洋行
 和歌山 福井 菜摘
 兵庫 酒井 真由

ハイポーズわたしがわたくしに変わる
 ポーズ取るその眼が追っている明日
 善人のポーズで生きるこの先も
 脳回路ポーズのボタン押さぬのに
 愛はまだ未熟ポーズを確かめる
 ポーズ少し変えろとこんなにも気楽
 ポケたふりまだまだできる大丈夫
 キュービーのポーズでお風呂から上がる
 嘘だっというのにポーズさえみせず
 自惚れのポーズに姿見の吐息
 要注意単なるポーズかも知れぬ
 無防備なポーズで足の爪を切る
 転んで独り立ち上るのも独り
 九条を曲げて平和のポーズとる
 ポーズとるこんな感じがいいですか
 謝罪ですその場限りが見え隠れ
 生活の為にポーズを少し変え
 大見得を切ってはならぬエキストラ
 金婚式まで並んでいた夫婦難
 ファイティングポーズに疲れ帰郷する
 そのポーズ見せかけだろう影がない
 中流のポーズを笑う預金帳

広島 福田 淳子
 愛知 高浜 広川
 大阪 荒木 郁子
 鳥取 中村 毅
 岐阜 小林 映汎
 大阪 太田扶美代
 大阪 あまのトーナ
 愛媛 黒田 茂代
 大阪 江見 見清
 奈良 坊農 柳弘
 広島 土居 直子
 兵庫 藤井 宏造
 大阪 森中恵美子
 熊本 中原たかお
 埼玉 中村 伸子
 兵庫 佐藤 健彦
 大阪 源田 啓生
 和歌山 三宅 保州
 高知 坂本紀美子
 栃木 荻原 鹿声
 広島 日谷 寛
 大阪 原田すみ子

ハイポーズ腰が伸びない影法師
 観覧車ポーズ決まらぬままの恋
 組みかえて女足から出す答え
 醜態を演じたことがある両手
 服従のポーズ尻尾を折りたたむ
 美しいポーズあちこち無理をして
 幸せのポーズがへたな薬指

秀句

どのポーズしても私は拜まれる
 幸せのポーズその気になってくる
 猿山のボスのポーズを見て帰る
 なおお前何かええことあったんか
 ポーズかもしれぬ天然かもしれぬ
 このポーズ已めると廃棄物になる
 その度に腰を伸ばしているポーズ
 大阪のオパチャンらしくない無口
 掃除したポーズ雑巾干しておく
 悲しいねレンズ向けると笑う子よ
 人魚にはなれそうもない風呂上り

特選

軸吟

大阪 平松かすみ
 奈良 水津加央里
 石川 藤村 容子
 奈良 牧浦 完次
 岡山 木下 草風
 兵庫 田村ひろ子
 愛媛 高橋 了
 茨城 佐瀬 貴子
 奈良 松本 柁子
 岡山 安原 博
 大阪 太田としお
 奈良 小林すみえ
 青森 千葉 風樹
 鳥取 西川 和子
 山梨 小林信二郎
 高知 小川てるみ
 佐賀 真島美智子
 佐賀 真島久美子
 和歌山 川上 大輪

ポーズ 木本朱夏選

寄り添ったポーズが素敵両陛下

お出かけのポーズ鏡へありがとう

幸せのポーズしていた父と母

初孫を花のポーズで手渡され

肩で風家族写真の父凜と

支え合うポーズで家族輪を作る

揺るがないポーズを保つ父の椅子

お揃いの腕組みをして爺と撮る

ポーズとるこんな感じでいいですか

美しいポーズあちこち無理をして

要注意単なるポーズかもしれぬ

含羞草のポーズで次の策を練る

一年中同じネクタイポーズとる

姿勢よし身形またよし老いに喝

つま先立ちのポーズで期待されている

君ならばウエルカムだというポーズ

広島 室屋 正子

大阪 河内 月子

岡山 戸田まさこ

青森 千葉 風樹

大阪 小川賀世子

兵庫 菅野 泰行

大阪 神田 良子

大阪 矢倉 五月

埼玉 中村 伸子

兵庫 田村ひろ子

広島 土居 直子

徳島 福本 清美

大阪 中野 健吾

大阪 田浦 實

兵庫 黒田 能子

大阪 吉道あかね

褒められた途端声までポーズとる

独創のポーズもデジャブーと言われ

いいんですよポーズしなくて嫌いなら

嘘だつていいのにポーズさえみせず

気づかないふりをしているすきま風

たまごかけごはんにポーズ決めてみる

仁王さまお疲れでしようそのポーズ

よう寝たと熊も蚯蚓も目を覚ます

闘いのポーズのままで鎧脱ぐ

サーピスのポーズ健気に老孔雀

振りむくと風も光もポーズ取る

いつまでもふりかえらせるさようなら

三日月は偲ぶポーズで見上げられ

万歳のポーズであの世いききたいな

Vサインもうやめちゃった歳だもん

生きていた証しに残すVサイン

にんげんの証が欲しいハイチーズ

好きというポーズを悟られぬように

求愛のポーズも知らぬ草食系

毅然として皿に残っているパセリ

猫いっぴき凜と構えるコマーション

富士は富士どんな角度で見られても

京都 藤井 文代

鳥取 早川 玲坊

京都 杉浦多津子

大阪 江見 見清

青森 石澤はる子

大阪 赤松ますみ

愛媛 古手川 光

大阪 澤井 敏治

東京 星出 冬馬

鳥取 石谷美恵子

兵庫 戸田 ゆき

大阪 寺川 弘一

大阪 山本 半銭

和歌山 石田 隆彦

大阪 穂口 正子

静岡 中田 尚

愛知 伊賀 武久

大阪 太田扶美代

兵庫 井上じろう

兵庫 長浜 美籠

和歌山 松原 寿子

鳥取 牧野 芳光

盆栽の松の吐息を思い遣る

寒梅は春のポーズを連れてくる

帽子屋の帽子個性を主張する

アイロンをかけて直しているポーズ

半期に一度クリーニングに出すポーズ

お得意のポーズで顔が老けている

鍛えてます案山子のポーズして八十路

テープ切るポーズはちゃんと決めている

死んだ振りしたのに世間笑うだけ

争えぬ血だな子役の切った見得

ブリクラのピースに隠す不幸せ

ピースした写真の裏で泣いている

一步踏み出して笑った赤ん坊

悲しいねレンズ向けると笑う子よ

ポーズ撮るみんな神の子仏の子

そっぽ向くポーズも百合の根は一緒

警官になったピストル持ちたくて

負け犬のポーズで狙う箱がある

銃を持つポーズ憶えている両手

戦地へは行かず戦車でポーズだけ

戦争をしないポーズが見抜かれる

見せかけの平和ブカブカ浮いている

和歌山 宇野 幹子

大阪 中井 アキ

青森 松山 芳生

兵庫 春名 恵子

三重 山口亜都子

大阪 奥 時雄

和歌山 坂部紀久子

山口 平田 実男

大阪 柿花 和夫

高知 桑名 孝雄

大阪 坂本 星雨

香川 田岡 弘

和歌山 三宅 保州

佐賀 真島美智子

島根 相見 柳歩

青森 福士 慕情

兵庫 片山 忠

栃木 荻原 鹿声

山口 山縣 双華

高知 茨木 昭夫

大阪 三好 専平

大阪 神野千恵子

反骨のポーズ君が代嫌い抜く

騙されないぞ原発の死んだふり

八起き目の姿勢は低く背筋立て

考える人のポーズで庇う腰

ポカしたらポカした顔の傘寿です

ポーズみな老いを背負った同期会

夢を追う少うし口を開けたまま

変身のポーズで渡り切る世間

組みかえて女足から出す答え

中流のポーズを笑う貯金帳

三猿のポーズで妻は不意を突く

妻の背に向かってシャドーボクシング

ロボットのポーズで人間が歩く

ハイチーズよく化けたねと云う鏡

ハイチーズポーズは斜め30度

頬杖のポーズ恋していた頃の

観覧車ポーズ決まらぬままの恋

追い越しても亀はポーズを崩さない

防犯のカメラにさえもピースする

ポーズなど要らぬ自由な森の中

メモリアルホールでくずせないポーズ

うしろ姿ばかりを見せて旅立ちぬ

鳥取 両川 洋々

鳥取 竹村紀の治

兵庫 久保田千代

愛知 猫田千恵子

大阪 河内 天笑

鳥取 政岡日枝子

大阪 嶋澤喜八郎

大阪 平井美智子

石川 藤村 容子

大阪 原田すみ子

大阪 村上 直樹

鳥取 平尾 正人

島根 長谷川博子

和歌山 堀 富美子

兵庫 富永 恭子

奈良 安土 理恵

奈良 水津加央里

岡山 武村 一美

群馬 黒崎 和夫

広島 瀬戸れい子

三重 青砥たかこ

大阪 森 茜

加害者の方はかり向く神の耳

耐えてるな貧乏揺すり止らない

進むか引くかしばしロダンになつてゐる

形からならう浮き世の泳ぎ方

居酒屋で太宰治のポーズとる

そのポーズ見せかけだろう影がない

年金のポーズ塩鯖食べている

画布の中裸婦が女神になつてゆく

ヴィーナスの片手はりんご持つポーズ

つきあげた右手に言葉などいらぬ

颯爽と周回遅れポーズつけ

二月のポーズ摺り足で逃げてゆく

立春のポーズ異人館から始まりぬ

百態のポーズで春を呼ぶ釘煮

信号で皆んな一つの色になる

花だより さくららはポーズ考える

椿に学ぶ咲くポーズ散るポーズ

春を着てタテヨコナメ三面鏡

ファイティングポーズを崩さないカルテ

ファイティングポーズであげる呱呱の声

産道をガッツポーズで抜けて来た

鶴翼のポーズでお待ちしています

青森 高瀬 霜石

兵庫 堀 正和

奈良 毛利 元子

鳥取 藤原 鬼桜

鳥取 成田 雨奇

広島 日谷 寛

奈良 西澤 知子

大阪 栃尾 奏子

和歌山 古久保和子

愛媛 村山 浩吉

大阪 京谷 文子

京都 山本 昌乃

兵庫 山岸 竜清

奈良 板垣 孝志

神奈川 杉山 太郎

京都 都倉 求芽

大阪 山本希久子

大阪 須磨 活恵

青森 三浦 蒼鬼

奈良 田中 秀貴

青森 月波 与生

鳥根 石橋 芳山

七人の敵に七つのポーズ取り

被写体になればりんごもポーズとる

無党派のポーズで斜に構えとく

テロ行為ポーズだけだと思つてた

頭陀袋自然体にはまだなれぬ

転んで独り立ち上るのも独り

威嚇するポーズとしては完璧よ

秀句

いいポーズ葬式用にしてもらう

少女のころのポーズで舟を待つてゐる

やんごとない理由でおばあさんのポーズ

青空に勝利のポーズ干してある

短編が限界わたくしのポーズ

吹雪かれて裸婦像はふと口遊む

まだ誰もくの一だとは気付かない

金持ちの振りりは三日も続かない

服従のポーズ尻尾を折りたたむ

グルコサミン飲んで反骨のポーズ

特選

挙手の礼しながら落ちていく椿

軸吟

福寿草のかたちを母の想い出に

大阪 鶴田 遠野

大阪 栗田 久子

大阪 西出 楓楽

大阪 榎本 舞夢

広島 小島 蘭幸

大阪 森中恵美子

奈良 ひとり 静

岡山 小林 妻子

愛媛 吉松 澄子

大阪 谷口 義

愛媛 西村 寛子

鳥取 森山 盛桜

青森 野沢 省悟

大阪 山岡富美子

鳥取 新家 完司

岡山 木下 草風

京都 高島 啓子

鳥取 八木 千代

和歌山 木本 朱夏

雑

詠

大西泰世選

天日干してわたくしのリニューアル
 ふたり旅叶えた妻がよく笑う
 がんばってにんげんもどきにはなった
 夕焼けて小さな夢に灯をともす
 肩こらぬ会話と熱いコーヒート
 窓越しに隣の猫に睨まれる
 割れるのは夫の茶わんばかりです
 喉に骨刺さったような日曜日
 包丁の音に心を覗かれる
 人間の匂いの中でさくら咲く
 終活に桜の苗木植えました
 追伸のきれいな嘘が嬉しくて
 道具箱夢も一緒に入れて春
 素描画の中に潜んでいる本音
 陽が昇る時は静かな村スズメ
 ゆっくりと老いて静かな森に出る

大阪 古今堂蕉子
 岡山 山本 美枝
 鳥取 新家 完司
 岡山 伊藤 寿子
 大阪 石橋 直子
 三重 北田のりこ
 愛知 小松くみ子
 高知 茨木 昭夫
 高知 清水由紀子
 鳥根 長谷川博子
 兵庫 梅澤 盛夫
 愛媛 吉松 澄子
 兵庫 富永 恭子
 岐阜 小林 映汎
 鳥取 木天 麦青
 奈良 佐藤 辰雄

しっかりと生き抜くための敵の数
 そういえば母とは握手しなかった
 散歩にはふさわしくない三拍子
 パソコンの荒野に独り立ち尽くす
 ぬるま湯に浸りあしたが見えてこぬ
 柔らかく女雛の視線受けとめる
 母の掌の温もり今に鯨尺
 この丘で夢を見ていたのは不覚
 励ましの一葉胸の雨あがる
 見えそうで見えないレースのカーテン
 旧姓で呼ばれ半世紀を跳んだ
 サムライになった伝説になった
 猫柳ひと雨ごとに芽吹く恋
 すっぽりと夕映え浄土かともふつと
 一本の杭であらうと立つ大地
 ポケットの魔女が誘いをかけてくる
 日向ぼこ夫婦楯円になって来た
 旅カバン優しさ少し詰め帰る
 このままがずっと続いてゆくのかな
 造反の破れた傘が干してある
 少しずつ野心が消えて日向ぼこ
 旨いもんやはり最後は水だらう

佐賀 真島美智子
 東京 伊藤三十六
 京都 西山 竹里
 大阪 山本希久子
 愛知 伊賀 武久
 香川 田岡 弘
 兵庫 戸田わか子
 鳥取 西川 和子
 奈良 毛利 元子
 広島 土居 直子
 鳥取 早川 玲坊
 広島 小島 蘭幸
 奈良 坊農 柳弘
 大阪 森 茜
 大阪 平井美智子
 大阪 荒木 郁子
 鳥取 倉益 一瑤
 大阪 藤原 大子
 兵庫 田村ひろ子
 兵庫 濱邊稲佐獄
 広島 林 武志
 大阪 岩佐ダン吉

目玉焼き妻の有難みが解る
 差し歯した神様だっているだろう
 世間話が好きな黒猫いるのです
 仏壇の母といつでも半分っこ
 毛筆のかすれに他意はありません
 故郷に帰る家なし冬の月
 坂の上にかいいことありますか
 さくらさくら明かりがほっと点きました
 幸せの小さな音に背を伸ばす
 花切手春の蕾をふくらます
 三寒の無口四温のしゃべり過ぎ
 鮮やかな虹を見たから戻れない
 熱燗でこころの鬼を手なづける
 百人の敵とダルマさんがコロンダ
 春の絵になろうと匂う梅の花
 皺くちやにした冗談が捨ててある
 魂の芯まで届く寒の月
 ひとつずつ捨てる悟られないように
 仏壇の埃のことを言う男
 ときめきを鮮明にする絵の具皿
 筋トレをこなした今日は誕生日
 屋根裏もトイレも神が居てくれる

広島 野村 賢悟
 沖縄 森山 文切
 奈良 西澤 知子
 大阪 伊達 郁夫
 大阪 嶋澤喜八郎
 兵庫 堀 正和
 兵庫 上田ひとみ
 和歌山 木本 朱夏
 和歌山 松尾 和香
 和歌山 宇野 幹子
 大阪 原 洋志
 愛媛 村山 浩吉
 大阪 村上 直樹
 岩手 徳田ひろ子
 和歌山 楠原 富香
 岡山 安原 博
 大阪 海老池 洋
 奈良 安土 理恵
 京都 高島 啓子
 愛媛 柳田かおる
 青森 野沢 省悟
 奈良 板垣 孝志

雪国じゃないと遇えない雪女
 一言がこんな陽気な僕にする
 Y字路で生まれる匂な思いつき
 刃こぼれに磨きをかける赤いバラ
 居酒屋で酸素ボンベを買いました
 生前葬すませゆつくり生きている
 人生のところどころを四捨五入
 惰眠する舟に乗り合わせてしまふ
 アイディアの発酵を待つ冬銀河
 井戸端の内緒話は良く煮える
 清潔な指で潰しなさい私
 預かっています傷だらけの夕陽
 お魚のみみだか海のしよっぱさは
 天涯の孤独だけれど星の下
 相応の過去鎖骨から踵から
 深々と今朝は会いたくない帽子
 笑えない一にちきつと学びの日
 自己評価至るところでホタル舞う
 美しく笑うためにと鏡見る
 木を揺する風に心を洗われる
 ベーコンはカリカリ酔いは醒めないが
 お隣の水戸黄門もよく笑い

青森 高瀬 霜石
 和歌山 石田 隆彦
 兵庫 萬波紀代子
 京都 都倉 求芽
 大阪 柿花 和夫
 奈良 大内 朝子
 山梨 内藤 巖
 島根 石橋 芳山
 大阪 中井 アキ
 岡山 戸田まさこ
 佐賀 真島久美子
 大阪 太田扶美代
 奈良 下谷 憲子
 三重 山口亜都子
 石川 藤村 容子
 島根 川本 畔
 神奈川 杉山 太郎
 岡山 藤井 智史
 大阪 榎本 舞夢
 群馬 黒崎 和夫
 大阪 井丸 昌紀
 山口 山縣 双華

中天の月に野心を見透かされ

ああ言えばこういう棘のある胡瓜

未来から不穏な足音が迫る

片方の翼が翹びたがっている

十指みな主役で丸いにぎりめし

老人は老人ばかり花の下

人ひとり許して伸びるカッパ麵

これからも幻だろろう揚げ羽蝶

ポケットで寂しい演技する小銭

老梅の瘤は秘密の隠し場所

春色をまとうと命はしゃぎ出す

起き上がり小法師が歌うヨイトマケ

これからをゆつくり刻む砂時計

寂しくて輪の中心に寄りたがる

時々小さな嘘で元気盛る

失業が無い圍らしい蟻の列

春の宵月と泳いでみたくなる

「おっちゃん」と呼ぶ「おばはん」と棲んでいる

スカートを結び直して居る戦意

薔薇の棘弱いところを突いてくる

間引かれぬままでヒト科になる私

ぽっかりと空いた心にドレミファン

大阪 島田 誠一

静岡 佐野由利子

愛媛 黒田 茂代

兵庫 田中 章子

大阪 松岡 重子

岡山 小野真備雄

奈良 古川 洋子

岡山 しばたかずみ

青森 吉川ひとし

鳥取 八木 千代

大阪 小川賀世子

岡山 田中 恵

鳥根 藤井 寿代

宮城 木田比呂朗

広島 野坂 逸生

宮城 大久保もとじ

兵庫 宮本 喜明

香川 佐々木ええ一

大阪 山本 半銭

奈良 中山恵美子

青森 三浦ひとは

鳥取 西村 久江

明日は晴れ二十三時の常備薬

改札を抜けると明日に迷い込む

あめ玉をなめるととき素直です

絵手紙のパン焼き立ての色で着く

月あかり勿体なくてポストまで

句読点打ってまさかの深い闇

落ち椿今は無心になつている

秀句

人間の部分が音をたてる夜

反乱というけどそれは飢だよ

梅一輪ふつつ力湧いてきた

本心はここか魚屋の包丁

風は止んだか女ひとりの定食屋

大根を播つて男の夕餉とす

砂時計目をそらしてはいけません

鳩尾に熟成できぬ僕が居る

寝転べば怖いものなどあるものか

聖戦が焦げついているフライパン

特選

花の闇一番好きな人と居る

軸吟

春が好き少うし強くなれるから

愛媛 郷田 みや

京都 寺島 洋子

岡山 古川美智子

広島 増田マスエ

大阪 山根 妙子

青森 石澤はる子

大阪 吉道あかね

静岡 米山明日歌

石川 岡本 聡

大阪 針生 和代

北海道 小林 碧水

奈良 岡谷 樹

兵庫 古川 奮水

埼玉 中村 伸子

青森 三浦 蒼鬼

大阪 源田 啓生

大阪 赤松ますみ

岐阜 武藤 敏子

大阪 大西 泰世

雑詠

小島蘭幸選

片方の翼が翺びたがつている
 わたくしを一番理解してる
 うちの猫愚痴を聞くのが仕事です
 刀折れ矢尽き田舎で芋を掘る
 上等すぎて持て余すバスタオル
 来た道を迎れば母の海に着く
 ネジ山が弛みおぼろになる記憶
 天下取る夢を見ている葱坊主
 ピンボケの写真と大事に持ち歩き
 祝米寿妻の写真と飲んでる
 生涯賭けてあなたの妻になりました
 春風や耳掃除してジャズ聴いて
 ひび割れた土鍋にあつた隠し味
 終活の先ず手始めに焼く日記
 口下手であるが説得力がある
 温暖化 石器時代に戻らねば

兵庫 田中 章子
 兵庫 山口 光久
 大阪 榎本日の出
 愛知 青山 良巳
 三重 北田のりこ
 広島 渡辺 典子
 大阪 荻野 浩子
 大阪 松尾美智代
 島根 多久和敬子
 岡山 小野真備雄
 高知 岡村 千鳥
 岡山 丹下 凱夫
 青森 福士 慕情
 岡山 藤代 淑躬
 広島 鴨田 昭紀
 鳥取 田中けいこ

誘われて出かける元氣溜めてある
 どのくらい昇れば龍になれるのか
 ばびぶべば言えるまだまだ跳べそうだ
 大切な人を神様消さないで
 素描画の中に潜んでる本音
 本能にズボンパンツを穿かせたい
 砂時計目をそらしてはいけません
 春寒の土の鼓動をきく五感
 渡り鳥に線量計を持たせとく
 継るひと亡くして胆が太くなる
 大宇宙でぼつんとひとり月を見る
 涙から虹が生まれていく刹那
 黙禱の時間の中は走馬灯
 たまゆらの命を母と日向ほこ
 人間の匂いの中でさくら咲く
 B面に向かうネクタイは捨てた
 生きていくかたちに桜咲いている
 女嘘つき男気まぐれ花ごよみ
 神さまに見える両陛下の公務
 十指みな炎えるかたちで髪を梳く
 旨いもんややはり最後は水だろう
 出る杭もなければ変わらない空気

大阪 榎本 舞夢
 愛媛 近藤 修二
 奈良 細田 貴子
 鳥取 山野すみれ
 岐阜 小林 映汎
 岡山 丸橋 野蒜
 埼玉 中村 伸子
 岡山 奥田 佳子
 鳥取 両川 洋々
 鳥取 後藤美恵子
 兵庫 西口いわゑ
 岡山 児馬不二子
 大阪 鴨谷瑠美子
 茨城 岡本 恵
 島根 長谷川博子
 大阪 高杉 力
 大阪 谷口 義
 岡山 武村 一美
 広島 伊藤 寿子
 広島 錦 武志
 大阪 岩佐ダン吉
 広島 笹重 耕三

肩書きを無くすと昼の月になる
 ちくはくな言葉で和む箸二膳
 預金ゼロ幾度修羅のルーレット
 歳月と言う妙葉が効いてくる
 平均寿命延びて八十通過点
 誕生日嬉しくないの孫が訊く
 二で割ったどの輪郭もあたたかい
 その昔村では音が生きていた
 鏡にも写さぬ顔で生きていた
 反乱というけどそれは笈だよ
 守るものあつて米研ぎ菜を洗う
 ほら穴に潜んだ過去と向かい合う
 とときめきに挑戦状を突きつける
 七十年記憶を手操りつづけねば
 ふたり旅叶えた妻がよく笑う
 ゆつくりと老いて静かな森に出る
 君の心に生きた証のひとかけら
 わたしの夢を歩いてくれる影がいる
 初春ですよ取りこし苦勞もう止めた
 ドロ臭く生きる私も挑戦者
 飛び魚よそれ程鳥になりたいか
 鳩尾に熟成できぬ僕が居る

山口 平田 実男
 大阪 針生 和代
 和歌山 大峠 可動
 岡山 田中 恵
 鳥取 岸本 孝子
 大阪 小林 わこ
 愛媛 村山 浩吉
 奈良 柴橋 菜摘
 大阪 富田 保子
 石川 岡本 聡
 大阪 西出 楓楽
 大阪 吉村久仁雄
 大阪 立蔵 信子
 広島 福田 淳子
 岡山 山本 美枝
 奈良 佐藤 辰雄
 奈良 毛利 元子
 鳥取 西谷 悦子
 大阪 浅野 房子
 愛媛 高畑 俊正
 大阪 新海 信二
 青森 三浦 蒼鬼

この闇をモンローウオークで歩きます
 文化財指定の生家猫が住む
 学んだら教えて返す恩がある
 ワインよりおいしい水が蛇口から
 ストロウの先であなたの愚痴潰す
 明日は晴れ二十三時の常備薬
 老梅の瘤は秘密の隠し場所
 百度踏む母にやさしく梅香る
 笑えない一にちきつと学びの日
 天日干してわたくしのリニユール
 終活に桜の苗木植えました
 歩くのも跳ぶのも走るのも心
 月あかり勿体なくてポストまで
 雪国じゃないと遇えない雪女
 目玉焼き妻の有難みが解かる
 ひと言も喋らず里の兄と酔う
 声あげて泣けぬ私が愛おしい
 日向ぼこ夫婦楕円になって来た
 花が咲き鳥啼く地にはいくさあり
 あたたかな言葉うれしく眠ります
 新人の靴音だけが跳ねている
 毛筆のかすれに他意はありません

三重 山口亜都子
 奈良 渡辺 富子
 愛知 富田 末男
 大阪 河内 天笑
 徳島 福本 清美
 愛媛 郷田 みや
 鳥取 八木 千代
 大阪 若松 雅枝
 神奈川 杉山 太郎
 大阪 古今堂蕉子
 兵庫 梅澤 盛夫
 大阪 源田 啓生
 大阪 山根 妙子
 青森 高瀬 霜石
 広島 野村 賢悟
 栃木 萩原 鹿声
 鳥取 石谷美恵子
 鳥取 倉益 一瑤
 東京 川本真理子
 兵庫 田村ひろ子
 岡山 古森 省吾
 大阪 嶋澤喜八郎

ブライドを捨てた男の介護 I

遺族年金で二十年も生きた

土に触れ人は慎み深くなる

火の色を秘めて白紙のなお白し

天を舞う地を這う咲いてきたさくら

ひとつずつ捨てる悟られないように

たった今ポストにほとり春の使者

温泉でゆっくり終活のプラン

絵手紙のパン焼き立ての色で着く

スポーツカー想定外がおりてくる

深々と今朝は会いたくない帽子

喜寿近し私が故里になった

淋しがり屋が紛れ込んでる兵馬備

肩書に元関白と書いておく

火葬場の煙へ連凧が上がる

思い出を切るゆつくりと爪を切る

いさぎよくマスクの中をみせなさい

日曜の午後はペタンとしています

善人と思う私に鬼を見た

幸せのとなりで平凡に生きる

みずたまり夕日が浮いているひとり

怖い世だ返事に間合い置く電話

大阪 佐々木満作

和歌山 森下よりこ

奈良 小林すみえ

兵庫 久保田千代

兵庫 宮崎美知代

奈良 安土 理恵

岐阜 武藤 敏子

大阪 森中恵美子

広島 増田マスエ

大阪 森松まつお

鳥根 川本 畔

大阪 徳山みつこ

奈良 田中 秀貴

佐賀 横尾 信雄

青森 千葉 風樹

熊本 黒川 孤遊

静岡 米山明日歌

鳥根 石橋 芳山

京都 藤井 文代

大阪 阪本 秀子

岡山 しばたかずみ

北海道 吉田 一笑

桃でなくてはならぬ流れ来るものは

抱きしめる癌細胞ごと君を

朱線がかこむ私の中に棲むおほろ

伍ビール深夜にあげているピエロ

生きられるスマホの灯りさえあれば

聖戦が焦げついているフライパン

湧きいづる哀しみ逢うてきた夜は

秀句

ときめいて卒寿の坂もひとまたぎ

あつたかい街だゆつくりと横切る

旧姓で呼ばれ半世紀を跳んだ

幸せを集めて母に書く手紙

音のない拍手聞こえてくる天寿

情熱が枯れたら一度会いたいネ

介護する手は緩めない尖らない

戒名の重さ仮設のほとけ達

弟は秘密基地からやってくる

さくらさくら明かりがほつと点きました

特選

おろしりんごは現し世のようである

軸吟

ははがまだいそうなたたかいた襖

岡山 木下 草風

奈良 居谷真理子

愛媛 大葉美千代

兵庫 古川 奮水

佐賀 真島久美子

大阪 赤松ますみ

兵庫 酒井 真由

大阪 村上 直樹

大阪 森 茜

鳥取 早川 玲坊

大阪 坂本 星雨

兵庫 山田 耕治

大阪 太田扶美代

奈良 古川 洋子

奈良 太田のりこ

京都 高島 啓子

和歌山 木本 朱夏

三重 小河 柳女

広島 小島 蘭幸

第三回 春の川柳塔まつり

誌上大会参加者

総数 714名

順不同・敬称略

山口亜都子
 〔京都〕 伊藤 恒 梶村 豪 杉浦多津子
 北原照子 清水英旺 杉野恭子 高島啓子
 寺島洋子 都倉求芽 西山竹里 藤井文代
 古川雅子 榎本宏子 三宅満子 山田葉子
 山本昌乃

〔北海道〕

小沢 淳 小林碧水 三浦強一 山田こいし

〔青森〕

〔天竺〕 龜山常男 浅野房子 赤松ますみ

岩淵黙人 岡本花匠 高瀬霜石 岡本かくら 石橋直子 石橋優明 井上照子 伊藤すみ子

油谷克己 荒川鈍甲 荒木郁子 石田ひろ子

千葉風樹 月波与生 野沢省悟 三浦ひとし 井丸昌紀 井本健治 上嶋幸雀 指宿千枝子

井丸昌紀 井本健治 上嶋幸雀 指宿千枝子

福土慕情 松山芳生 三浦蒼鬼 吉川ひとし 山上堅坊 内海幸生 榎本舞夢 岩佐ダン吉

海老池洋 戎 迪世 江見見清 宇都満知子

吉田吹喜 猪股幸子 徳田ひろ子 大西晴雄 岡本 勲 荻野浩子 榎本日の出

大川桃花 大隅克博 太田清子 江島谷勝弘

〔秋田〕

〔富山〕 有澤嘉晃 鳥ひかる 大西晴雄 岡本 勲 荻野浩子 榎本日の出

〔岩手〕 徳田ひろ子 大久保もとじ 木田比呂朗 中村吉範 西川節子 柳本君代 梶原弘光 賀部 博 河井庸佑 大島美智代

〔石川〕 岡本 聡 新保芳明 藤村谷子 石谷恵子 貝川 勉 寺井富三郎 奥 時雄 柿花和夫 笠嶋恵美 大島ともこ

〔宮城〕

〔福井〕 石谷恵子 貝川 勉 寺井富三郎 中村吉範 西川節子 柳本君代 梶原弘光 賀部 博 河井庸佑 大島美智代

〔福島〕 佐藤千四 茨城 岡本 恵 佐瀬貴子 毛利由美 〔栃木〕 荻原鹿声 〔群馬〕 黒崎和夫 中田 尚 鈴木千代見 米山明日歌 久世高鷲 熊代菜月 黒岩靖博 小川賀世子

〔茨城〕 岡本 恵 佐瀬貴子 毛利由美 〔栃木〕 荻原鹿声 〔群馬〕 黒崎和夫 中田 尚 鈴木千代見 米山明日歌 久世高鷲 熊代菜月 黒岩靖博 小川賀世子

〔埼玉〕 金子育司 中村伸子 宮本彩太郎 〔愛知〕 青山良巳 伊賀武久 猫田千恵子 黒木康秀 栗田久子 源田啓生 片岡智恵子

〔岐阜〕 草野 稔 小林映汎 武藤敏子 〔静岡〕 神村恭子 佐藤灯人 佐野由利子 神田良子 北村賢子 京谷文子 太田扶美代

〔三重〕 吉崎柳歩 小河柳女 青砥たかこ 小出修三 小谷集一 小林わこ 片山かずお

〔三重〕 吉崎柳歩 小河柳女 青砥たかこ 小出修三 小谷集一 小林わこ 片山かずお

〔四国〕 島田雅美 小松くみ子 脇田末男 彦坂石転 藤田千休 若山 衛 坂上淳司 坂本星雨 阪本秀子 木見谷孝代

〔四国〕 島田雅美 小松くみ子 脇田末男 彦坂石転 藤田千休 若山 衛 坂上淳司 坂本星雨 阪本秀子 木見谷孝代

〔香川〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔香川〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔徳島〕 川名信政 鳴子百合 日下部敦世 田村ハナ子 木間千代子 離らつくす 脇田末男 彦坂石転 藤田千休 若山 衛 坂上淳司 坂本星雨 阪本秀子 木見谷孝代

〔徳島〕 川名信政 鳴子百合 日下部敦世 田村ハナ子 木間千代子 離らつくす 脇田末男 彦坂石転 藤田千休 若山 衛 坂上淳司 坂本星雨 阪本秀子 木見谷孝代

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔愛媛〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔愛媛〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

〔高松〕 伊勢田毅 上原 稔 伊藤三十六 木咲胡桃 星出冬馬 川本真理子 北田のりこ 橋倉久美子 島田誠一 清水悠子 初代正彦 古今堂蕉子

新海信二	杉本義昭	助川和美	小山惠美子	山根妙子	山野寿之	山本半錢	森崎希世子	山岸竜清	山口光久	山崎武彦	松下比ろ志
須磨活惠	炭谷優史	関よしみ	齋藤さくら	雪本珠子	横山捷也	吉岡 修	森中惠美子	山田耕治	山本芳男	山本義子	萬浪紀代子
大同美江	田浦 實	高木道子	坂本ミヨノ	吉川弘泰	吉田信哉	吉富八重	森松まつお	みぎわはな	宮崎美知代		
高杉 力	高杉千歩	田付絹枝	佐々木満作	米澤俣子	了見茶助	若松雅枝	山岡富美子	〔奈良〕	安土理恵	安福和夫	池田貴佐夫
伊達郁夫	立藏信子	田中廣子	嶋澤喜八郎	若本安代	渡邊 修	山本希久子		板垣孝志	大内朝子	岡谷 樹	池田みほ子
谷久美子	谷口東風	谷口 義	島田千鶴子	吉内タカ子	吉道あかね	吉村久仁雄		加門萌子	木嶋盛隆	五味尚子	居谷真理子
丹後屋肇	次井義泰	鶴田遠野	神野千恵子	あまのトーナ	宇都宮ちづる	中川ひろすけ		佐藤辰雄	柴橋菜摘	下谷憲子	大久保眞澄
鶴田寿子	寺川弘一	徳山泰子	鈴木いさお	美馬りゆうこ				田中秀貴	辻麻梨子	西澤知子	太田のりこ
栃尾奏子	富田保子	内藤憲彦	津村志華子	〔兵庫〕	青木公輔	足立 茂	足立つな子	菱木 誠	ひとり静	古川洋子	小金澤貴一
中井アキ	長井善純	中川一男	出口セツ子	市坪武臣	井上高島	上田和宏	上田ひとみ	坊農柳弘	細田貴子	牧浦完次	小林すみえ
中蘭 清	中野健吾	中村 恵	道家えい子	梅澤盛夫	大黒政子	尾崎一子	井口と志女	松本柁子	南 好枝	目黒友遊	小早川秋子
西澤司郎	西出楓楽	畑中節子	徳山みつこ	加川靖鬼	片山 忠	金川宣子	井上じろう	毛利元子	山下純子	山田順啓	水津加央里
早泉早人	原 洋志	針生和代	中野ふづき	亀岡哲子	河内谷恵	岸田万彩	上垣キヨミ	山本昌代	渡辺富子	米田恭昌	高田まさじ
樋口 眞	平賀国和	広岡栄二	奈良慶治良	北澤稠民	北野哲男	黒田能子	緒方美津子	辻内げんえい	飛永ふりこ	長谷川崇明	
肥山一文	藤井則彦	藤井正雄	西川ひろし	近藤勝正	酒井真由	佐藤健彦	奥田みつ子	山下怜依子	中山惠美子		
藤田武人	藤田治雄	藤塚克三	羽田野洋介	菅野泰行	梶元世津	田中章子	久保田千代	〔和歌山〕	石田隆彦	磯部義雄	岩本美智子
伏見雅明	藤原大子	穂口正子	原田すみ子	戸田ゆき	富永恭子	中島憲三	黒崎美紗子	上田紀子	上野 寛	宇野幹子	根田よしこ
前川善之	前たもつ	前原正美	平井美智子	長浜美籠	二階幸子	野口晶子	竹山千賀子	大峠可動	岡本 昇	喜田准一	坂部紀久子
増田隆昭	升成 好	松浦英夫	平嶋美智子	能勢利子	萩原狸月	春城年代	谷口加代子	北原昭枝	木本朱夏	楠原富香	土屋起世子
松浦益子	松岡 篤	松岡重子	平松かすみ	春名恵子	藤岡りこ	福田好文	田村ひろ子	楠見章子	小谷小雪	武本 碧	古久保和子
水野黒兎	都 武志	宮守正博	藤島たかこ	藤井宏造	藤原紘一	藤原将恕	戸田わか子	辻内次根	堂上泰女	福井菜摘	森下よりこ
三好専平	村上玄也	村上直樹	藤原喜美子	古川奮水	古橋茂子	堀 正和	西口いわゑ	福本英子	福呂秀子	堀富美子	松尾和香
森 茜	森井克子	矢倉五月	宮崎シマ子	堀口雅乃	前中 勝	松井文香	濱邊稻佐嶽	松原寿子	三宅保州		
安田忠子	山崎君子	大和峯二	松尾美智代	丸山孔一	南谷 到	宮本喜明	東内美智子	〔鳥取〕	飯野葛子	池澤大鯨	石谷美恵子

生田和之 岩崎和子 大倉孝二 岡崎美知江 木下草風 藏内明子 小林妻子 児馬不二子

大前安子 川口垂矢 岸本宏章 後藤美恵子 古森省吾 杉山 静 高岡茂子 高橋由紀子

岸本孝子 木天麦青 倉益一瑤 斉尾くにこ 高木勇三 武村一美 谷内拓庵 田中ケイ子

近藤秋星 新家完司 鈴木一弘 坂本とも湖 丹下凱夫 竹本 妙 永見心咲 戸田まさこ

田口清帆 竹信照彦 田中重忠 竹村紀の治 畑佳余子 藤井智史 藤井敏明 古川美智子

田中天翔 竹口清信 塚田和喜 田中けいこ 藤代淑躬 福力明良 船越洋行 宮宅比佐恵

津村律子 土橋 螢 中井虎尾 春木圭一郎 松田龍彦 丸橋野蒜 目賀和子 山崎三千代

中田房江 中原章子 中村 毅 政岡日枝子 光岡早苗 宮本信吉 紫しめの 森ふみか

西川和子 西谷悦子 成田雨奇 村上勢津子 森山文子 安原 博 山本美枝 渡辺和彦

西村久江 早川玲坊 西浦小鹿 山野すみれ しばたかずみ

平尾正人 藤原鬼桜 細田裕花 吉田孔美子

堀かずこ 前田楓花 牧野芳光 若松由紀子

松川行男 松本理子 宮田風露 森脇 麗 掛江一弘 鴨田昭紀 菅 弘子 久保田邦夫

森山盛桜 八木千代 山下蟹郎 山下節子 岸本 清 北川周興 北村善昭 瀬戸れい子

山中康子 山本 恵 吉田弘子 両川洋々 小島蘭幸 小畑宣之 小林好枝 田辺与志魚

〔島根〕 相見柳歩 石橋芳山 小白金房子 笹重耕三 若年幸子 末長恵子 藤岡ヒデコ

伊藤寿美 伊藤玲子 川本 畔 多久和敬子 土井輝恵 土居直子 錦 武志 増田マスエ

奥田勝子 黒目英男 藤井寿代 長谷川博子 野坂逸生 野村賢悟 林 武志 松尾みちよ

藤井 寛 古浦青帆 福岡芳枝 松本文子 日谷 寛 福田淳子 松尾信彦 松本壽賀子

三島崧丘 山根邦代 米原 妙 村上和子 若野茂青 渡辺典子 室屋正子 山本恵子 六田半徳

〔岡山〕 浅越茂雄 伊藤寿子 池田たか子

市田鶴邨 岩崎幸子 岩崎政弘 上田真智子 〔山口〕 上野悦子 上村夢香 増田めだか

奥田佳子 岡崎一也 尾崎 貴 小野真備雄 大下俊江 坂本加代 中前幸子 平田実男

片岡富子 河原孝志 菊元誠忠 小澤誌津子 山縣双華 吉村正枝

〔徳島〕 沢田博昭 寺澤紀子 黒田るみ子

仁木弘子 橋本征介 橋本当枝 福本清美

〔香川〕 神内澄子 田岡 弘 安田翔光

佐々木ええ一 みよしすみこ

〔愛媛〕 木内節子 黒田茂代 大葉美千代

郷田みや 古手川光 近藤修二 高岡かずこ

高橋 了 高畑俊正 田中醉軒 柳田かおる

田辺進水 土居新山 中居善信 西村寛子

松本宗和 村山浩吉 除田六郎 吉松澄子

山之内さち枝

〔高知〕 岡林京子 岡村千鳥 清水由紀子

森本幸美 茨木昭夫 小原圭二 小川てるみ

楠瀬美香 澤村哲史 桑名孝雄 豊澤ただし

山内正美 小笠原倫子 坂本紀美子

〔福岡〕 坂本比呂 櫻木山彦 永田一博

橋本ふみ 弘津明子

〔佐賀〕 門井 孝 坂本蜂朗 真島久美子

西村正統 仁部四郎 真島清弘 真島美智子

横尾信雄

〔熊本〕 岩切康子 杉野羅天 中原たかお

黒川孤遊 鷺頭白頭

〔宮崎〕 稲毛 寛

〔鹿児島〕 平瀬美容 前田洋子

〔沖縄〕 森山文切

本社 四月句会

◇四月七日(火) 午後一時
たかつガーデン

満開だった桜も散り始め、朝夕の冷え込みがぶり返した七日、四月句会は参加百三十七名(投句十一名)の大盛況の中、会場をたかつガーデンに移して開催。初出席は、辻本ヒロさん(河内長野市)浜知子さん(尼崎市)川上智三さん(和歌山市)の三名。
句会に先立ち、先ごろ亡くなった同人、深田俱久さん(鳥取)に黙祷を捧げた。
今月のお話は、藤井則彦さん。題は「哀えぬ「力」ブーム」。五年前、赤瀬川原平氏が出版した「老人力」が世の「力」ブームの先駆けとなり、その後さまざま「○○○力」のついた本が出版されて、今や二百三十冊を超えていることを紹介。その中で自ら「老人力」「盲点力」「鈍感力」などを十選。それぞれの提唱者(著者)の考え方を通して、「○力」はいま何が揺らぎ何を作り直さなければならぬかという日本人の課題を示している」と解説された。(いさお)

月間賞は。居谷真理子さん(櫃原市)
(司会)蕉子・善純(脇取)賢子・真理子
(受付)茂・眞澄・武彦・宏子(清記)勝弘

席題「艶」 久保田千代 選

艶っぽい春のフィナーレ花吹雪	敏治	艶話関係ないと言う白寿	かずお
あの人がある空気も艶っぽい	榎子	肅粛と進める艶のない話	のぶ久
艶っぽい襟足匂う京女将	ふりこ	艶やかな髪少女もやがて古稀	武臣
乾拭きを絶やさぬ母の床柱	ふりこ	お返事は我が意に沿うた声の艶	みつ子
大部屋の悲哀を知った芸の艶	淳司	ライバルの艶がまぶしい傘寿です	千枝子
艶種も芸の肥やしと春団治	良一	湯上りの妻の背中にはさくら色	一歩
米朝の艶は桜と天国へ	満作	引退は考えてない顔の艶	玄也
美女が着る和服姿の色と艶	柳伸	人間の艶が出てくる喜寿傘寿	楽生
艶っぽい話題に補聴器がにやり	半六	女系三代はんなり艶のある茶の間	朱夏
磨かねば心の艶も錆びてくる	洋	八十年生きた艶ですピンテージ	富美子
糠床の艶へ沈めるナスキュウリ	肇	惜しや国宝泣かせ笑わせ芸の艶	直樹
堅物の父にもあった艶はなし	りゅうこ	艶々と若葉芽吹いている門出	哲子
どれほどの涙か阿弥陀さまの艶	半六	褒められて艶出す桜も私も	希久子
艶出しに時どき天ぶらを食べる	克己	艶っぽい話にオチが付いていた	いさお
スッポンと黒酢が効くと言うテレビ	扶美代	けだるくて少し艶めく春の宵	朝子
顔よりも艶がでてきた足の裏	義	いい女こ一番の艶を出す	准一
請求書艶な筆文字新地から	日の出	佳	
心にもワックス掛けて入社式	行兵衛	艶消しが好きしつとりの調度品	わこ
艶っぽい話も絶えて二十年	黒兎	銀シャリの艶は農夫の汗汗	誠一
	日和	這い上がった男の顔は艶を出す	光久
	楠和夫	艶っぽい話ひとつもないまんま	裕之
	茂	おねだりへ一寸艶めく鼻濁音	朝子
	楓	人	
	地	趣味ひとつわたしの艶にして生きる	能子
	大黒柱の艶はおんなの涙知る		楓
			楽

天

艶やかな紅燃えつきて椿落つ

軸

後れ毛に手をやり少女艶つばい

兼題「船(舟)」 矢倉 五月 選

豪華クルーズテープのゴミを撒き散らす 肇

戦場へ行くな我らの日本丸

赤サンゴが消えた中国船消えた

本をたて船を漕いでる五時間目

サンフラワー介護の母と別府の湯

泥舟にはもう乗るまいぞ再稼働

怖ず怖ずとネットの海へ船出する

好奇心をのせ風船が飛んでいく

昼下がり舟を漕ぐのが好きになり

姥捨山へゆく豪華船探してる

駅裏はシケに肩寄せ船だまり

もう少し泣いたら出そう助け舟

紙風船ふいた頬つべのわらべ歌

その辺でストツブ祖父の助け舟

離島の恋に連絡船が嫉妬する

往診は小舟操る島の医者

波平の家内でフネと申します

宝島捜しあくねて難破船

釣り船に酔うて胃の中みんな海

遊覧船貴族のような花見する

助け舟ほしい時には空仰ぐ

裕之

情熱の限りあなたへだまし舟
大船にのればリストラ待っていた
救命ボート船長用と書いてある
コンクリの川に馴染めぬ笹の舟
仄見える三途の川の渡し舟
こころ一番男強気に舟を漕ぐ
友と乗るピースボートに賭ける夢
受け売りの舟がわたしを乗せにくる
二人乗り手漕ぎボートにあるロマン
ごくごくと飲む手応えの子舟抱く
今だから蟹工船を読み直す
風船も噂も風に乗りがる
命日は戦艦大和沈んだ日
炎も金も積んで女は舟になる
お花見の莫産で座礁をしよう
よく揺れる小舟を抱いた恋心

瑞美子

日の出

眞澄

寿之

則彦

葉子

なぎさ

あきこ

かずお

よしみ

克己

好

楽生

アキ

和子

朝子

佳

アキ

誠一

瑠美子

唯教

正雄

茂

恭昌

茂

りゅうこ

好文

桃花

瑞美子

初デートボートを漕いだのはわ・た・し

兼題「鮮やか」 古久保和子 選

鮮やかに手抜き料理をする夫

茄子紺をより鮮やかに錆びた釘

鮮やかに鯛が辞世句活け造り

鮮やかな青は未熟の美しさ

朱を足して残り時間を鮮やかに

ああ眩し家族五人のシーツ干す

地方紙の美談心に虹が立つ

シヨッキンクピンクあんさんどなたはん

新鮮な物を食べてもおばあさん

鮮やかな切り口四〇〇字埋める

カモシカになった十秒を切った

ひと睨みしてキャンキャンを黙らせる

振ったよりふられた恋がまだ胸に

鮮やかに転職妻が光り出す

鮮やかに魔法をかける誉め上手

鮮やかな新緑心までみどり

鮮やか過ぎる色にはきつと毒がある

鮮明な記憶を払う術がない

鮮やかに生きる三枚舌持っている

鮮やかな黄色が春によく似合う

鮮やかに逆転現ナマの魔力

鮮やかに着色されて来る噂

鮮やかな嘘でウンだとすぐわかる

大物をずばりと斬った細いペン

鮮やかに

鮮やかに

鮮やかに

軸

哲子

寿之

晶子

眞理子

扶美代

ばっは

良一

靖鬼

義

智三

富美子

眞理子

とーな

アキ

紀華

希久子

いさお

理恵

楓

楓

かずお

和夫

堅坊

とーな

洋

鮮やかに一本取られます妻に

惜しまれる内に引退するサクラ

鮮やかに退いて礎石となる美学

鮮やかな離婚印ですカスミ草

鮮やかな言葉で仕切る生き字引

鮮やかな演技舞台の斬られ役

生卵上手に割っている力

一隅を明るく守る紅生姜

鮮やかにわたしの桜満開に

鮮やかな逆転だった花吹雪

消印を透かせば鮮やかなさくら

鮮やかに死にたいものだ歯を磨く

花ハナよどちらを見ても春の章

佳

スケッチの真ん中へんにチューリップ

鮮やかな手つきでスマホ撫で無口

年齢は括弧に入れて跳んでいる

変わり身の早さ六色ボールペン

鮮やかに生きるポキンと折れるまで

人

鮮やかな婚姻色は雄ですよ

地

仲直りした大空に虹の橋

天

鮮やかに水の旨さよ八合目

軸

鮮やかに春はタップを踏みながら

善 純

行 兵衛

直 樹

哲 矢

柳 弘

准 一

楽 生

完 司

能 子

朱 夏

瑠 美子

万 紗子

昌 乃

信 子

黒 兎

富 美子

保 州

能 子

哲 男

朱 夏

五 月

兼題 「びちびち」 米田 恭昌 選

入社式日本の未来背負って立つ

Sサイズ息詰めてまで着たい見栄

びちびちと意気込みだけは負けません

母さんと二人楽しく雨の中

びちびちの美魔女きりりと入社式

びちびちの元氣あふれている校舎

びちびちの心は古希だつて持てる

手応えはビチビチゲイツと釣り上げる

天からの命びちびち呱呱の声

高かったスーツあああ入らない

大阪のおばちゃんいつもビッチビチ

レッスンに汗進るツカガール

校則はブルマーびちびちだった頃

びちびちのジーンズ穿いて古稀がゆく

息止めてジッパウ上げた試着室

目の中で貴方はいつも跳ねてます

びちびちの元氣が並ぶ入社式

どう見ても太めを包むMサイズ

びちびちと跳ねる夢みる深海魚

ぴちぴちのベルト弛めるバイキング

フアスナーも泣いてるびちびちのズボン

桜鯛きりぎりびちびち瀬戸の朝

踊り食い魚の涙を見てしまおう

ボクだつてビチビチですよお腹だけ

魚籠の中にはねる魚と晩酌と

若鮎の跳ねてまぶしい早春譜

情熱の爆発チアガールのジャンプ

びちびちにみやげを詰めて旅終る

はねる鯛墨絵の筆に見るいのち

びちびちの肢体へ羨望の眼

ビチビチのパッチみたいなニールック

びちびちのギャルがコスプレ競いあう

びちびちのギャルが入社で活気づく

ランドセル声もビチビチ春の色

びちびちもやがてぶよぶよする女体

タイトスカートはち切れそうな肉包む

やつとこさ着れて脱げない試着室

佳

びちびちの美学と思うAKB

びちびちを少し残しておく余生

生簀から俎板時価が跳ね回る

すみれの夢抱いてびちびち門くぐる

びちびちやぶちやぶ雨を楽しむ通学路

人

白魚が喉のあたりではねている

地

びちびちで出るに出入れぬ試着室(楠)

天

びちびちを握り潰して来た懺悔

柳 伸

比 呂志

大 子

賢 子

千 代

靖 博

加 お里

英 夫

玄 也

靖 鬼

万 紗子

洋

能 子

真 澄

た もつ

敏 治

一 步

夫

恵

兼題「探る」 小山 紀乃 選

ボケットを探ると春が笑い出す
 春の色探っています通り抜け
 ぬくもりのない眼で探り合う握手
 それからのやぶささ今も探査中
 拉致家族探る手立てが見当らず
 七十年前の真情探られる
 胃カメラに五月の鬱を覗かれる
 新エネを探ろう海底に宝
 点字探る指から春がやって来た
 五割引き原価探ってみたくなる
 本心を世間話で探られる
 酔った振りして恋の行方を確かめる
 探り合う話し始めるタイムミンク
 探られて悲鳴をあげているスマホ
 手探りで来た人生の曲がり角
 満ち足りて自分探しの旅に出る
 冗談をくすべて本音炙り出す
 医者だつて手探りわたくしのカルテ
 入門書ばかり探つて黄昏る
 手探りでハツとつかんだ響くもの
 探られているらしい盃がくる
 探るたび性善説を信じたい
 釣糸にそつと息吹を流し込む
 ルーツは猿みんな平等みな身内
 双方が探り合つて脈がある

あや子 仲直りのきつかけそれとなく探る
 生き方を探るチャペルの門叩く
 手探りの光明飾られた柵
 本心を探る小石を投げてみる
 こつそりと自分の脳を探りたい
 まるごとを探りたくなる好きなしと
 それとなく一度両の手で探る
 もう一人のわたし探っている鏡
 生きるとは正解探る旅である
 私の内緒を探る昼の月
 青い鳥探せば森に迷い込む
 瞬間の五感がきみを受けとめる
 佳
 天国の入り口探る通り抜け
 探るより心を尽くし通じ合う
 敗因を探ると汗の量だろう
 幸せを探り続けてきた夕日
 探るほどに命の謎がまた増える
 人
 幸せを探す灯台の明かり
 地
 どつしりと動かぬものを探している
 天
 さくらふぶきがボクを探っているらしい
 軸
 この道が好き手探りにひたすらに

裕之 弘一 美智代 弘一 美智代 弘一 美智代 弘一 美智代 弘一 美智代
 ヒロ 敏治 満知子 向き合った心の間がうす墨に
 蕉子 探るより心を尽くし通じ合う
 雅枝 敗因を探ると汗の量だろう
 桃花 幸せを探り続けてきた夕日
 誠一 探るほどに命の謎がまた増える
 希久子 人
 たもつ 幸せを探す灯台の明かり
 ばっは 地
 恭昌 どつしりと動かぬものを探している
 ダン吉 天
 靖鬼 さくらふぶきがボクを探っているらしい
 蕉子 軸
 萩子 この道が好き手探りにひたすらに

兼題「灰色」 小島 蘭幸 選

ロマンズグレー夢みた男髪がない
 灰色の生活変えた五七五
 お互いにグレーゾーンを持ち平和
 灰色の高官認知症らしい
 逃げ惑う子ら灰色の空の下
 灰色に時効襖はありませぬ
 営倉で彬の詠んだ反戦歌
 無職です灰色のまま夜が更ける
 灰色の大地にやがて実る麦
 定年の日も灰色の作業服
 親友の薄墨色の計のはがき
 誤信からつきまとう灰色の雲
 灰撒いておいしい野菜植えました
 薄墨のからやか春の遺作展
 向き合った心の間がうす墨に
 灰色の空だピンクを着て出よう
 グレーゾーンに浮いている辺野古
 白黒をつけない国に住んでいる
 あいまいな灰色性に合っている
 白よりも灰色にある底力
 灰色はわたしの好きな隠れ糞
 灰色になって戻つて来た話
 役職が付いてグレーの背広買う
 限りなく灰色にするまつりごと
 マッチ下さい出口が見つかからないのです

好文 好文章
 弘光 弘光
 宏子 宏子
 肇 肇
 ダン吉 ダン吉
 武彦 武彦
 淳司 淳司
 万紗子 万紗子
 黒兎 黒兎
 耕治 耕治
 半六 半六
 唯教 唯教
 月子 月子
 哲矢 哲矢
 よしみ よしみ
 月子 月子
 知子 知子
 宏造 宏造
 完司 完司
 蕉子 蕉子
 瑠美子 瑠美子
 扶美代 扶美代
 哲子 哲子
 富子 富子
 理恵 理恵

曇天がいまなお続くみちのく路

敏治

灰から生まれた桜色の童話

恵

グレーからローズに気持ち切り替える

弘光

グレーのスーツ着てもあの人は光る

かずお

合格にばつと灰色消えました

隆彦

灰色の海のうねりを忘れない

進

カリスマはいつもグレーに武装する

蕉子

ブランコは灰色の日日知っている

信子

灰色を許され人は生きている

見清

恋は未だグレーゾーンを抜けられず

柳弘

花のない街あふれる灰色のスマホ

希久子

シャッター街今年もやって来たツパメ

賢子

灰色の空に笑顔は返せない

佳

枯野から醒めよと春の鼓笛隊

瑠美子

灰色はなかなか芸達者であつた

富美子

原発のグレーゾーンは海にある

義

灰色は哀しい色だね象さん

信子

人

真理子

グレーのコート着てボガードを気取る

いさお

地

いさお

灰色の声で不安を呼ぶ鴉

朱夏

天

朱夏

米朝は逝つた淡墨桜咲く

居谷真理子

軸

居谷真理子

灰色になるので酒はやめません

居谷真理子

句会 燦 燦

3月句会を読む 岩崎 眞里子

春に立つため、避けて通れない四度目の三月がやってきた。福島の大地を語るふきのとう

ふきのとうは大地と人を結ぶ春の使者。どんな状況下でも春を告げるために顔を出す。大地の叫びを誰か聴いてくれ。と。

煮こぼれはきつと私の灰汁だろう

あかね

先生に「灰汁の強い子です」と言われた十歳の私に、母は「山菜は上手に灰汁抜きすれば美味しくなるよ」と言った。人間の灰汁は、煮こぼしても無くならない個々の小さな泉かも知れない。

みんな王者でともうるさい酒場

完司

コックにも客にもなつて一人者

美智子

大音響の酒場や居酒屋はうるさいが何故か元気になる。あれはみんな王者の気分でしたか。さあ、一人者さんどうぞ。

菜の花が春をこぼしております

あや子

覚悟決め此処で生き抜くこぼれ種

克己

少しおすましの表現から若い娘の姿が浮かび、早春の明るい霧閉気が広がった。自分で選んだ訳ではないが、此処で生きようと決めたこぼれ種。私自身に突きつけられた覚悟でもある。

名コック見えぬ所にかける手間

満知子

コックさんだけでなく、見えない所にも手間を惜しまない人は人間的にも大きい。そんな人のさりげない気遣いは、その後の信頼関係をより深くする。たぶん、川柳の中でも……。

散骨もいいし樹木葬もいいし

いさお

迷いから抜け出たとこは黄泉の国

玄也

柩体験も出来る現代、葬式も様々でケーキを選ぶ時のように迷う。でも迷うことこそが今を生きている証しと、玄也作品。

幸せの音がこぼれている寝息

好

不安も迷いも消えてはいないが、人生の冬をやつと抜け出せよう。春の寝息を聞きながら感じる……まぎれもない幸せ。

良縁が叶いタルマに目を入れる
若者は時代を映す日本を

バーズロード父がガタガタ震え出す
ハルカスの展望台で初日の出
新成人弾んでいるよ背中まで
背負ってはよろし春待つランドセル
元旦に柱時計の電池切れ
聞こえるように聞こえぬようにひそひそと

湯豆腐がひそひそ話盛り上げる
ひそひそ拾い集めて陳情書
ひそひそとうまい話に裏がある
五百羅漢もささやき合っている枯れ野
ひそひそと孫お年玉見せ合つて
ひそひそと言つな私認知になつてない

悲しいねひそひそ話通じない
寒いなあたまらんなあと団子猿
孫受験滑るは禁句我が家では

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

土石流甘くみるなと山の神

甘い顔見せないつもり母だもの
甘言に弱い日本人である
近頃は甘い言葉が気にかかる
老いたのか自分を許すこの甘さ
ふるりの亡母慕つて暮参り

抱く慕情こころの鼓動聞かせたい
古のれん昭和の味が慕われる
独り言思ひ出慕う悲しさよ
星月夜思ひ出慕う愛の唄
美しいことばに纏る恋ごころ

美 舞 日の出 満知子 萌 直子 重信 としお 芳香 ゆみ子 昌紀 保州 定子 シマ子 志津子 たかこ 福貴子

逆上がり空がでんぐり返りする
漆黒の空へ懲りない自爆テロ
ブランコの空は母さん帰るまで
青空をサブリメントにして若い
トランペットが空の青さに突き刺さる
慈しみ溢れて開く寒牡丹
たくましく育つて欲しいと鬼退治
わだかまりすんなり溶けて春予感
3Bを6Bに替えやや本気
カーブ優勝今年はず想当りそう
心の扉開けつばなしと決めている
なんべんも読みかえしてる年賀状
なんかいもれんしゅうしよう二じゅうとび
ともだちとにんじゃになつてたたかいただ
(保育園) 陽

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

バーチャルな仕掛で煽るコマージュシャル
通販に煽られ溜まる不用品
おだてられ結局首をたてに振る
病葉を優しく煽る風の私語
ふたありをけしにかけている臘月
煽つても無駄です蟻は勤務中
えっ?あれはあの一とだよね大変身
父母逝つた日から脳みそ空回り
赤ペンで家計簿つけている我が家
月を見て裏はないかと問いかける
愛嬌の妻で商いうまくゆき
ご愛嬌許される内まだ蕾

静風 賢悟 笑子 幸子 昭紀 厚子 歩美 汎美 初音 千代美 房子 航 (小一)

洋子 隆樹 柳子 黙人 則彦 風来坊 吞舟 ひとし 重虎 井蛙 京子

菊地 政勝 選

喉元でいつたりきたりする名前
引き潮になつて本音が見えてくる
一番の謎は私がここに居る
さり気なく本心見せて裏がない
説明書読まずに使つ家電品
生き方も我流ふり向くことはない
究極の道具は両手水を飲む
この辺に確かにあつた腰の線
言い訳の端々にある自尊心
ふとこころで温めているありがと

佳句地十選 (4月号から)

米澤 俣子 選

カレンダー埋め尽くして病んでいる
風紋のひと夜ひと夜にある悟り
前向きな風に忘れる古い傷
ごつごつおつはないが愛情あふれてる
どっちにも転んでみせる自然体
愛された記憶が残る薔薇の芯
強かに生きる女の草書体
晩学の空はとてつもなく広い
嬉しさを隠し切れない背が笑つ
少し鬼少し仏で丁度いい

和子 昭枝 圭一郎 信子 樹子 征子 かこ 朝子 加お里

母の背で愛嬌まいて人氣者
三歳児両手広げて駆けて来る
故郷の浜に漂う浪の花
よい花は種がしつかりしています
太陽の下でヒト科が咲き乱れ
さくら花の心象あさる万歩計
タンポポをつんでは歩くランドセル
三寒四温パツと咲きたい花芽たち
坪に花今年も咲いて母偲ぶ
みどり児を真ん中にして咲く笑顔
弁当にぎっしり詰まる山の幸
思い出の中で大輪パツと咲く
運不運すべては神のおぼしめし

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

写メールで僕の傷心探れまい
神様もあばけんテロの深い闇
子や親は去って夫婦の第二幕
斎場であの日咲いてた曼珠沙華
青空の広さへ夢を泳がせる
二本線引いてあの日を削除する
第二幕リハビリ室が舞台です
鱗いちまい剥いで再生したあの日
写メールの意味が分からず句が出来ぬ
年金を杖に九十の坂登る
受験生夢がかなって第二幕
写メールにいつも自分は写らない
あの日から私に翼生えました
十歳の秋亡き父にとりすがる
あの日から少し大人になりました

初枝 規子 柳三 龍馬 花匠 小とみ 慕情 一鈴 美鈴 つとむ 芳生 五楽庵 一粹報

洋々 無限 由美子 地圭平 一瑤 善平 三千代 清信 昌鼓 博幸 清流 雅女 春名 みゆき

それぞれの自慢写メール見せられる
第二幕始まりました遺産分け
エンドレス報復続く第二幕
若者と写メール交す若返り
目をつぶったあの日の月は青かった
写メールで手軽に済ます里帰り
父の年十五も越えて冬来たり
借金がいくらあっても春は来る
二枚舌武器にも謝罪も使う
来る者は拒まないから嫁に來い
同窓会ホテルへ続く第二幕
拉致とテロ開けてはならぬ第二幕
あの日から忘れられない人となる
梅一輪写メールもらい見に行くか
釈迦の手に委ねオベへと横たわる
なるほどと一歩下がるも生きる術
無駄口へ更に輪をかけ減らず口
復員のあの日忘れることはない
幸せは笑い袋の中に棲む
現役の人を避けたくなる無職

真智子 振作 野蒜 房江 蟹郎 孝志 不二子 天翔 とも湖 克也 茶人 回春子 節子 圭一郎 美祥 美恵子 凱柳 妻 清帆 一粹

きやらぼく川柳会(鳥取)政岡日枝子報

地響きが今日も日本を駆け巡る
立春の訪れ阻む雪が降る
さすが母今も温る半天が
花舗に買う水仙君の想い出も
老いの身を騙しおだてて元気で
積年の思い打ち込む女面
ジャガ芋の芽春を見たさに首伸ばす
国により命の重さ変わるのか

ひろし 初枝 あやこ ゆめ子 多美子 正二 美佐子 美穂
いいことをためて星へのおみやげに
日南は大雪なのに根雨はなし
楽しみよほのかな望み愛してる
餌台に來る野鳥たち銭がいり
道の駅春夏秋冬人も恋う
酒飲んだあとでぜんざい平らげる
節約をして贅沢をする暮らし
吹雪でも春の息吹がしよのび寄る
困る程味覚健在どうしよう
欲張らず五年連用ダイアリー
樹の陰でひそかに咲いた梅の花
おくやみ欄今日米子市に死人無し
不時着をするなど風の糸を切る
わたくしの弱みに染みてくるお酒

南大阪川柳会

津守

柳伸報

ゆき かね子 ひろこ 桐子 幹啓 公一 宏之 卓雄 寿々子 恵子 瑞枝 千代 日枝子 紀の治 武臣 ルイ子 いさお 恭夫 郁昌 修 東風 忠昭 弘子 正春 あさ子 なぎさ 百合子 歌留多

原発でないエネルギー探らんか
イヤなこと忘れてしまふ今日の知恵

一歩
と一な

山焼きの煙が這って春兆す
悪知恵をいっばい詰めて人騙す
イスラム国煙のように消えてくれ
内定を待って国会みる焦り

いさお
八重
照彦

有る無しの違い大きい一と零
とてつもない夢の一つを温める
一代記読んで余震がまだ続く
一生を条件付きでいる女

義泰
みね
純子

巧妙な振り込め詐欺と知恵比べ
漱石の知恵を今ごろ三四郎
万歩計持つてノルマとして歩く
日に一度地蔵様までお詣りに
怯まずに歩き続けたい寡婦の道

国和
克己
たもつ

冬籠りちよつと手の甲白く見え
ドラマにもならない暮らしそれでよし
白黒の順番に打ち白の勝ち
ドラマなど無いまま禿びてきた靴だ
メロドラマもうあほらしいあほらしい
騙されて見ようか姿美しい
騙されて心の重荷軽くする
一言がころのドラマ厚くする
まだ寒い梅一輪にやされる
まだあるか母の介護のエネルギー
盡したい人がいるからまだ生きる
まだ未練別れた人の影したう
朗らかに騙す楽しく騙される

実満
和子
鈴

一本のペンから沸いてくる世界
一歩引く勇氣知ってる老いの知恵
一を聞き十を知らずに未だ一
一手先読まずに獲物取り違え
飲み食いがスターを作る相撲取り
ちよい役のスター気取りが鼻につく
流れ星きつと織女の涙です
原節子の青い山脈見た中二
このままの幸せ願う流れ星
はやぶさで君住む星を訪ねたい
一段と輝く星は好きな人
スターの座降りて夕陽が素晴らしい
この星のどこかにきつとある居場所
一番星みつかけ家路につく歩幅
オギャーとひと言だけでもうスター
エキストラに村民総出したロケ地
寡黙さも孤独も芸にしたスター
帰省にはスターの顔は置いてくる
わたしもスター生まれ時と逝くととき
最高のスターは僕を生んだ母

義泰
みね
純子
絹子
ひろ子
起世子
康信
ふさゑ

大阪人動く歩き続けたい
渋滞の車追い越す千鳥足
がむしゃらに歩く頭を空にして
気がつけば母とおんなじ道歩く
長屋ですやかましさにも気を遣う
やかましく言う人が居て風邪予防
やかましくいのが華だった町工場
やかましく騒いだ後にある孤独
買い替えてほしい隣りの室外機
母さんのラッパが響く子沢山
円安で外国人がやかましい
やかましいと一度怒鳴つてみたいけど
やかましい家に幸せあふれてる

廣子
楓楽
柳右子
久美子
実

木枯らしに探し求める一壺天
一水を追って大河に辿りつく
一等は無理でも走り続けたい
農一途母が残した作業帽
紙一途楮を晒す手が温い
逢いたいと一度叫んだ落ち椿
一日があつとと言う間に過ぎて吉
一枚の切符に賭けた始発駅
ごめんねと書いて気が済む一行詩
先ず一と書いて決意の簡条書
生かされる今日のこの日は一度だけ

重忠
満
富久江
かおる
拓庵
恒
京
小鹿

ある無しの違い大きい一と零
とてつもない夢の一つを温める
一代記読んで余震がまだ続く
一生を条件付きでいる女
一本のペンから沸いてくる世界
一歩引く勇氣知ってる老いの知恵
一を聞き十を知らずに未だ一
一手先読まずに獲物取り違え
飲み食いがスターを作る相撲取り
ちよい役のスター気取りが鼻につく
流れ星きつと織女の涙です
原節子の青い山脈見た中二
このままの幸せ願う流れ星
はやぶさで君住む星を訪ねたい
一段と輝く星は好きな人
スターの座降りて夕陽が素晴らしい
この星のどこかにきつとある居場所
一番星みつかけ家路につく歩幅
オギャーとひと言だけでもうスター
エキストラに村民総出したロケ地
寡黙さも孤独も芸にしたスター
帰省にはスターの顔は置いてくる
わたしもスター生まれ時と逝くととき
最高のスターは僕を生んだ母

准一
大輔
弘子
当代
みつ江
智三
宏夫
富香

幼子の揚げる狼煙が解らない
亡骸も手厚く仕合せの煙
子育てた十五の春はドラマです
私を焼く煙は無味無臭なり
横顔にまだ優しさをもっている
騙された振りでゆらゆら風になる
真つ黒な煙が出そう口閉じる

志華子
直子
博

和歌山三幸川柳会 武本

碧報
寛
幹子
美羽
あき子
昇

高知川柳社 小川てるみ報

義泰
みね
純子
絹子
ひろ子
起世子
康信
ふさゑ

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

宣子
孔美子
咲和
弘子
美ツ千
茶子
すみれ

八重子
八重子
菜摘
きく
次根
俣子

少年の瞳の輝きに明日がある
母の星だな輝きがおとろえぬ
さりげなく詠んで輝くこの一句
ありのまま生きて輝く年の功

千鳥
和広
幸美

宣子
孔美子
咲和
弘子
美ツ千
茶子
すみれ

ダルマ夕日が輝く明日を保証する
レジエンドの輝き負けていられない
てるみ

富柳会(大阪) 古田 千華報

人間の底に虚飾が干してある
師と仰ぐ悲しきまでに母おんな
紅紫朗 森子

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

父の山仰いだままでまだ越せぬ
目が合った雲が乗るかと聞いてくれ
泳がした雑魚からドンにたどり着く
桐喝も混せて巨大な二枚舌
母の手を大事に握りしめて寒
天からの喝夕立が洗う街
五欲みな元気で今日も立ち泳ぎ
いっこうに泳ぐ気のないビキニ達
この辛さ言うには海が碧過ぎる
美しい嘘つく人の目が泳ぐ
あの頃は疎ましかった父の喝
会見を泳ぎわたれず泣きわめく
てのひらで軽い男を泳がせる
いい事を仰しやるさすが年の功
ひとすじの煙を追うてる涙
ときどきは夫を恐喝する不埒
寄り難い仰いだ義父へはこぶ匙
母の名のやりばに天の父仰ぐ
炎天の蟬絶叫のありつたけ
漆黒の闇に四散をする花火
合掌の先祖を仰ぐ大文字
報復の連鎖断ち切る斧が無い
先細りする年金で泳ぎ切る
風説を翻しての首位奪取
シュレッダーに掛けてしまいたい昨日
火を消した噴灰皿から崩れ

年金者だけが減額不公平
八人の子育て終えた母でした
妻と書くつもりついつい毒と書く
気のりせぬ旅に誘われ友ができ
特価市暗算力を試される

敵の居ない街面白くないだろう
華麗なる戦い敵は皮下脂肪
寝めちぎる敵の背中が燃えている
シミにシワ妻の敵には金がいる
敵味方みんな許せる歳になる
カメムシの匂いに負けたチンパンジー
身がふるう世界のニュース敵の声
負けたなと思う貴方のやさしさに
合否待つ十八歳の胸が鳴る
SOS 鳴らす叫びが届かない
鈴が鳴る来世も同じ鈴鳴らす
独り言鳴らして長い日を閉める
悲しみの底で鳴ってる風の音
プロボース迷わず「ハイ」とつい言った昌枝
勝つてやる王手迷わずグロップで
とりどりの花の色香に迷う風
親が敷くレールはみ出す反抗期
春の日は迷ってみたい夢の中
出発の五分前までまだ迷う
気が多く行ったり来たり迷い箸
運まかせもう迷わない明日は来る
落し蓋してもスバズバ文句言う
雪道をスバズバ歩く若ければ
ズバズバと言いつ終えた時夢覚めた
ズバズバの話し上手に引き込まれ
ズバズバと言われた時は石になる
ズバズバ言っても迫力はない出雲弁
おへそにも春一番を感じさせ
着膨れて長編小説読み終える

寿之 彦次 武人 正治 伸雄 奏子 千恵子 常男 慶子 よしみ 佳子 一文 登子 未知 静子 晴美 壽峰 欣之 七朗 高鷺 千重

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒完報
楽してるつもりはないがよく太る
楽ちんと踏んだ老後に誤算多々
夫婦とも苦楽を共にした積り
家事しながら楽しく聞いているラジオ
草花の芽吹き楽しむウオーキング
今日の汗明日の楽を夢に見て
飽きること知らずに今も生きてます
飽きるほど自由満喫一人旅
お互いに飽きたと言えぬ二枚貝
ビールに飽き今夜は酒か焼酎か
山茶花の可愛い花に名残雪
さてこそとかならず呑んだが何もなし
寒い日はカニが恋しい鍋奉行
発表を待ってる時計遅すぎる
コーヒーに垂らしたミルクピカソの絵

高明 蜂實 節朗 四郎 美智代 信男 堅坊 郁子 黒兔 桂子 順子 美佐子 正代 長一 久子 純子 春代 柳童

信子 文重 宿敵もいまは懐かし古写真

川柳塔まつえ吟社(高根)相見 柳歩報
瀧丘

文子 芳山 堂太 久絵 哲子 幸子 寿代 幸 知恵子 柳歩 とも子 美智子 昌枝 紗季 雪代 静枝 妙子 ちえこ 草庵 幸代 博子 ミツコ 涼子 ひふみ 輝山 弘充 青帆 千里

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

梅干しにびつたり馴染むにぎり飯
すこし朱を足さねば梅も綻べぬ
梅林を漫ろ歩けば恋実る
老梅に生きる指針を教えられ
妻の糸切つて宇宙の旅に出た
愛情の糸がもつれた春の乱
すき焼きに糸コソニヤクのとほけ役
糸電話内緒話をしてくれる
小吉で選ばれ今日も差し向かい
遠足の天気を下駄で占う子
ぼつかりと雲に悩みを占つて
大丈夫自分に呪文かけてます
いいニュース流れてほつとティータム
ニュースより先に気がつく花粉症
良いニュース大事に仕舞う胸の中
朝イチのニュースで今日が動き出す
ひと時を無口にさせるテロニュース

あきこ
精子
富美子
和香
小州
小雪
大輪
徑子
日出男
秀子
克子
紀久子
英子
よしこ
准一

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

いさかいを流して朝の膳につく
生きてこそ不思議な縁とめぐり合う
逆らわず流れに沿うた五十年
高笑い貧乏神が揺れ動く
篩分けするにも情がからみつく
ひたすらに祈りを綴る写経筆

弘
はつ恵
放任
いさむ
よしみ
ひかり

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

花便り今年も花粉やつて来る

久子

今年若さがほしいらしい事
充電にならない酒もたまにある
親ゆずり貧乏性の血を受ける
ほんとうの狙いは別にあるのです
一・二七記憶を語るルミナリエ

茶柱が立って墓参を思い立つ
机上では新調日記寂しげに
コップ酒二杯目となるウマが合い
歳重ね弔辞ノートも厚味増す
見渡せど妊婦姿に出合わない
飽食へ花よりだんこ似合わない

あつさりとききらめ次の出合い待つ
旗色が悪くなつたら目で合図
少しずつ個性控えるハーマニー
子育ても料理もできぬ主婦が増え
中締めにしよるか酒も空になり
頷いて聞いているだけでも役に立ち

車中にて亡きあの人にはつとする
七回忌楷書のような父でした
びつたりのおだ名付けられ人気者
お金より愛と思つたのは昔
添えた手の温もり嬉し三分粥
怖いもの見たさ十年後の私
苦勞など一緒に笑つてするタイプ
悪いなあ俺にそっくりわがジュニア
携帯の中にひそんでいた詐欺師

かほる
哲男
稠民
真由
勇
多美子
開子
可住
幸子
照代
美智子

川柳茶はしら(愛知) 関本かつ子報

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

ユニセフで繋がる命ワンコイン
苦勞など一緒に笑つてするタイプ
なるようになるトリソゴの皮を剥く
代々の田畑守る老い二人
拗ねている君はあの日のお僕でした
善と悪区別つかないこともある
トネルを抜けたら迷い消えていた
知らぬ間に亡夫にそっくり鼻メガネ
ライバルがある意味僕の財産だ
仏壇を閉めて争う遺産分け
財産も名誉もないが明日がある
脇役の刺身のツマの自己主張
大切に暮す金婚からの日日
大津波悲しみ残しそっくりと
もうあかんと言いながらまだ生きて
羽ばたきのサインでしようか反抗期
我が娘これも財産金を食う
そういえばモデルチェンジのない極
長く生き過ぎた義母の背なが泣く
母さん似譽め詞とは知らないで
学費にも財産分与当っている
九条は平和を守る財産だ
ほどほどの位置いつも決めている
この家族この暮しこそ財産だ
母の顔をそっくりもつて嫁にゆく
想い出に添うて手紙のペン進む

じろう
一徳
千代
りこ
キヨミ
淑子
歳子
勝弘
哲男

ひびきの市川柳会(大阪)永田 章司報

生徒出陣もう天神は許さない
畳にも椅子を並べる老いの席

晶子
美忠
秋果
ひとみ
章彦
武臣
宏造
盛夫
弘子
文香
浩司
利子
千賀子
みよし
美津子
恭子
てる
順子
野鶴
豊子
美香
比る志
求芽
みつこ
ぢづる

真劍勝負た手加減は要らぬ
やさしさか軽視か手加減をされる

きな臭い炎流れる地球儀よ
天神に詣で出合った妻と居る

膝小僧見せるジパン自己主張
子育ては手加減してもままならず

梅が咲き学問の神加減容赦ない
跡継ぎと決めて手加減容赦ない

アルコールと化粧品たでもめる
九条にノールル化和賞あげましよう

争いはやめて甲乙つける春
ホーホケケヨ梅の香誘う天満宮

船渡御の天神祭人の波
長話して花野に杖を置き忘れ

合格をすれば素通り天満宮
白鵬よ手加減してや春場所は

耳そうじ至福は母の膝枕
味方にはなが膝など屈しない

火傷してやつとわかつた夫婦愛
火の粉浴び長寿を祈るお水取り

手加減はしない打たれて強くなれ
天満宮受験シーズン超多忙

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

灰汁抜きをするまで汝未だ蓄
子を思う心ひたすらぶれません
ポロポロの老舗が守り抜く暖簾
夕日背に古都醸し出す瓦塀
パワハラもセクハラもある永田町
青空を透かして恥じることはない

美代子

シルク

久仁子

洋一

高鷲

かつ美

千鶴子

登志子

美喜

敏

雄太

ヨシ枝

庸佑

ひろすけ

泰子

真一

喜久子

ダン吉

いさお

光男

章司

森子

朋子

清

高鷲

紀雄

惠

やさしいが真つすぐに説く強い母
一目惚れやがて貴女に恋一途

世界地図透かせば透かす程不気味
目と鼻が騒ぎ出し来る春を知る

結び目が伸び縮みして今日も無事
机から教科書消えた春の朝

群青の海はひたすら凪いでいる
鋭角な言葉を丸くして返す

まっ白な未来へ走る三輪車
長柳会(大阪) 坂上 淳司報

フロメシネル今の亭主は言えません
エリートは階段登らずエレベータ

レイテ島卒寿で造る兄の碑を
裏金を闇金で借り闇に入り

雪下ろし八十路現役過疎の村
大雪がトワイライトを閉じこめる

風来坊虎の皮着て威嚇する
あの人に初めて笑顔され至福

車椅子でのあの山頂へ挑みたい
逆らえぬ少年哀れ痛む胸

どこから治療しよかメタボに菌腰膝
ゆき届く日本文化のおもてなし

お互いを繕い合つて金婚譜
忍従の暮らしに耐えた亡母の皺

三步後今じゃその妻三步前
裏金は抜け道逃げ道知つている

従順を装い妻が舵を取る
従つて居るかに見える偉い妻

予定などないのに出して見る手帳
一文

壽峰

慶子

安男

静子

常男

かこ

寿之

欣之

淳司

一文

ひろこ

武男

一文

壽峰

慶子

安男

静子

常男

かこ

寿之

欣之

淳司

一文

ひろこ

武男

光弘

明信

明修

靖博

一男

幸子

ともこ

英美

和代

三和子

福子

たけし

孝代

篤

裏金は無縁誇りと悔い少し
人生の句を過ぎて意味な奴

遅咲きの私を誘う句の風
お互いに句を逃した淡い恋

裏金は迷路を通りゴールする
裏金や裏道知らぬ蟻の汗

柳川塔さかい(大阪) 村上 玄也報

激辛カレーしびれた舌をもて余す
万葉にしびれる話流暢に

青春の出会いしびれた頃もあり
川べりに献花が続く悔しい死

別れたら後が無さそう諦めた
しびれだす悲しい酒が止められず

吉報に組板の音リズムミカル
忘れられても別れられずにする介護

大リーグ蹴った黒田の心意気
外国のと言えはどうぞと返される

別国で見た日の丸にはほれ直す
産声にしびれ切られされ二家族

おじいちゃんの通つた後は閉めに行く
別れても血のつながりは離せない

また来るねと一声かける別れ際
フグ肝にしびれたままで天国へ

会心の笑みは扉を閉めてから
初めての百点母をしびれさす

巣立つ子へ母は心のドア閉じず
ドア締める音で機嫌を読んでいます

きっぱりと負けを認めてリベンジだ
別れると泣いて喚いて元の鞆

直樹

克三

久美子

(穂)正子

隆彦

正美

俣子

半銭

かりん

五月

澄空

日の出

安代

敏治

憲彦

さくら

和夫

唯教

世紀子

としお

八千代

扶美代

好

健吾

誠一

月子

玄也

素頓馬

洗脳は恐い理性を麻痺させる
マヒの手で触つてみても感じない
仲人も仕方がないという別れ
生醬油に鮎いか刺し漁師村
キリギリス真冬ちやつかりゾートへ
氣持良く負ける日本の力士たち
手枕のしびれ忘れる子の寝顔
敵しいねまさかあなもリストラに
期待させ真つ赤な嘘の理系女子
鯖酒とフグで頓死も悪くない
優しさにしびれ貧乏耐えさされ

城北川柳会(大阪) 近藤
旅立ちへ天も祝福日本晴れ
禁断の木の実を食べた懺悔録
春の陽が今朝の命に点火する
ありのままの二小節だけ歌えます
三寒の小言四温のほめ言葉
もうちよつと右なら演技いい黒子
こぼれ種たまたま落ちた庭で咲く
出る杭は打たれる鉢巻締め直す
子に持たせ毛糸巻取る日向ほこ
巻物の遺書に学徒の無念知る
実体をつかむに時かかりすぎ
被害者が晒され加害者守られる
巻き戻す記憶も今じゃセピア色
実はねと言わずにやめた割烹着
渦潮が巻いて瀬戸内春近し
鉢処分棘がチクリと傷残す
隣国に信頼される日本製

光 清 願 憲 和幸 ひろ夢 舞 雅明 時雄 天笑 正報 賢子 朝子 義昭 勝弘 洋志 集一 柳弘 麗 武彦 公平 克己 満洲夫 実 美 千恵子 美智子

巻き戻し出来ぬ人生愛おしい
姑が来たたまたま昼寝していたら
オデコの蚊たまたま敵と見て叩く
突つても実らなくても夢掲げ
日記帳マチガイ探し孫の餌
核廃絶風蕩蕩と梅の庭
舌を巻く百一歳と聞いてから
うちの子に生まれてくれてありがとう
誠実が長い旅路の宝物
あのヤジはたまたまでない品性だ
イストラム語で「はだしのゲン」が平和とく
合格に隠し切れない子の破顔
ちよつと距離おいて仲良しこっこする
意地悪い風呂呂に入れば鳴る電話
戦争の苦い経験秘密法

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報 堅坊 博 公 子 満 作 一 歩 たもつ 高 志 和 夫 志 華 子 佐 津 乃 野 香 杖 香 榮 子 縣 笹

あの時はバケツを捨てて逃げました
愛と恩理めて柩の花畑
拍手を打つて勝手な願い事
閃光を浴びたあの手を語らねば
夢語る相手が無くて眠れない
口下手も不戦語れば淀みなく
オーシャンビュー時間を止めているのです
ヒロシマの語り部無念抱いたまま
忙しく両手で語る手話の恋
爛漫のバラは妬心を抱いている
被災地はあれから四年まだ四年
枇杷の花ぼつりと本音二つ三つ
九条はしっかりと置こう躋の位置

高 武 秀 夫 扶 美 代 和 雄 信 二 信 子 敏 子 隆 昭 克 己 廣 子 喜 八 郎 哲 男

桜前線待つひとときの万華鏡
両手でぎゅ抱かんと逃げて行く平和
悠久を流れる時と握手する
お互いに庇い合つてる右左
火の粉浴び春を両手で捕まえる
焦らない時が解決してくれる
美しく語る積極平和主義
体験をしみじみ語る元兵士
ロボットの両手も借りよ長寿園
いい時もあつたとアリス聴きながら
忘れてる善悪知つている両手
残り時間分かれば私狂うかも
一日があつあつあつと移りゆき
時々は一声ほしい一人膳
花咲く日冤罪晴らす重いペン
花束の埋まる傍にすみれ咲く
震災の刻そのままの掛時計
今の時代だから彬を語り継ぐ
両の手で代る献金助成金
話してよエイジがバアバ好きな訳
自分史の両手に余る人の恩
懸命の努力我が家もサクラサク

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

紀 乃 一 志 祥 昭 シマ子 敏 治 直 久 の ぶ 久 康 信 キ キ 紅 絵 美 智 子 たかこ 勝 弘 更 紗 ダン 吉 たもつ 壽 峰 い さ お 義 泰 とー な ひろ子 穂 夫 薫 報 勇 太 朗 克 衛 一 幸 風 あや乃 泰 子

文化財きれいに直す匠の手
ひざ枕ソフトタッチに耳掃除
こわいのは妻のソフトな取り調べ
継ぎ当てる服はもう見ぬ現代子
親子やなあ変な癖までよく似てる

豊中もくせい川柳會(大阪)藤井

大器晩成型と信じて投資する
胎児とのちぎり深める母子手帳
ずつとずつと想って言えぬあかんたれ
来年はサクラサカセル心意氣
楢山の虚空へ靡く千切れ雲
幸せのおこほれもらう花灯路
同じ車種隣の車ずつとよく
一人と契り男千人袖にする
共白髪夫婦のちぎり今も尚
損得で自分の色は変えられぬ
年金の幅で浪費をくり返す
神様を必ず拝んでるピンチ
上り坂越えね見えない景色
上から目線にムクムク起きた天の邪鬼
気にかかる監視カメラのある世間
マッサンの琥珀を舌に絡ませる
前向きに生きると流るちぎれ雲
センバツで春に芽生える郷土愛
この世のちぎりこの世限りの二輪草
枯れた花ちぎり感謝の肥料撒く
経費かな三途の川の渡し賃
前衛展首をかしげたまま帰る
川柳に費やす時間夢えがく

やすの
敬子
薫
みちる
昭好
則彦

正明
幹治
隆
庸佑
歌留多
きらり
武彦
美津子
健二
千恵子
雀舎
堅坊
則彦
葉彦
正彦
靖鬼
美龍
武臣
美智代
茂
巴子
耕治
紀華

おみくじをひいて迷いが深まった
ロボットに投資介護を頼んどく
好奇心ときおり勇み足をする
忘れよう今よりずつと楽になる
原発の始末十兆円で無理
約束もないが芽を吹く春の庭
無位無冠母の誇りは国訛り

岸和田川柳會(大阪) 佐藤

まだ若い若いと笑う誕生日
菜の花をずつと一晩照らす月
あの日から遠くを見てる母の笑み
祖母元氣昔ヨソ様今風
糸切れた風の氣分で氣のままに
菌車でない生活を取り戻す
万札がずらりお友達になりたいわ
あくせくと稼ぎゆつたりする老後
ストレッチ出来る広さの棺で逝く
滝の音してきたゆつくり流れよう
先立たれ夢中になれぬ老いの夜
古希集い笑い袋で盛りあがる
フクシマの笑顔に僕は手を合わす
プアソンの香りがムード醸してる
絵手紙に笑いユーモアお人柄
五円入れ孫に財布をプレゼント
子の嘘を母は笑って聞いている
これからは追っかけをする花使り
針のない時計と一人雲に乗る
改憲のムードに灯す赤ランプ
その時のムードで妻の七変化

見清
千鶴子
求芽
久子
哲男
ヨシエ
玲子

幸子報

明彦
勝彦
桂子
和美
一子
高鷲
蕉子
壽峰
信二
正司
幸子
ダン吉
珠子
大輔
隆
隆
信昭
ひろ子
英夫
浩子

ドル紙幣旅行の名残ある財布
ムードメーカー引つ張りだこで人氣者
リンゴの唄明るいムード醸し出す
ウエディングドレスゆつたりかくす七ヶ月
泣きなさいきつと笑える日が来るよ
ゆつたりとしてたらアカン津波くる
時は金財布空だ時間が
反対の声を挙げられないムード
戦時でも平家の武將うたを詠み

川柳さんだ(兵庫) 田中 童子報

情の脆き見せとんぼりの灯が揺れる
先ず値切り支払う時にまた値切る
馴れ染めは壁ドンでした古日記
原点に戻り紙飛行機を折る
高齢者ゆつくり食べて動きたす
太目が好き丈夫に産んでくれた母
別腹が利いてスタイル崩れだし
スタイルはダッスルファン顔はチン
ゆつくりと洒落たブランドアメリカン
まだ着たいスタイル良かった時の服
かあさんの涙を僕は忘れられない
蕾がねもういいかいと叫んでる
家の梅を覗いていく散歩
最期の日暮が見た花今日も咲く
につこりと笑う赤子に咲く絆
自然界順番違えず咲いてます
千年も根を伸ばしつつか咲く桜
間引かれても根がある私いつか咲く
ふるさとと同じツユ草ここで咲く

弘子
舞夢
雅子
みつ江
益男
康信
義泰
ゆみ子

美龍
徹
武彦
恭子
廣子
淑子
和雄
キヨミ
香子
ひとみ
富夫
耕治
雄太郎
一子
勝正
健彦
美智子
ちあき

ふわふわとひとり芝居のように生き
 風船に乗ったおじさん消えたまま
 天国に着けるかどうか宇宙葬
 手をつなぐ介護じゃなくて老の恋
 ふわふわと余生は軽く意のままに
 戴いたマフラふわふわ愛される
 紙ふうせん昭和の音で跳ねている
 風船が天国の母見に行った
 ふわふわと生きて人生わたし流
 やんわりと押されたツボに逆らえず
 浅学に追討ちかける認知症
 うぐいすが公園デビューひとりだち
 止まってるボール打つのが難しい
 何番やる一寸気になるマイナンパー
 かがやきの陰で消えゆく寝台車
 サクラサクこれから金で苦労する

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

将来を担う卵が巢立つ春
 残り物玉子とじしてご馳走に
 人間のたまごにスマホ習ってる
 殻破りたまご飛び出す大投手
 正直に充電してる日向ぼこ
 正直に歳を当てたら場が白け
 正直で思ったことが顔に出る
 裸ですよと王様にご注文
 正直に打明けてから楽になる
 正直で損して生きる悔いなし
 正直でいつもさざ波たてる老母
 仰ぎ見るだけにしておく富士の山

哲夫 修平 宣子 晶子 ヨシエ 千津子 祐康 哲男 光久 靖鬼 野薫 順子 隆 好文 雅尚 正和

師と仰ぐ人の末路を陰で見る
 父の樹を仰いで明日を生きる知恵
 師と仰ぎ恩を返せぬままの通夜
 毒仰ぐ前に言いたいことがある
 薫風師一度仰いで見たかった
 大空を仰ぐと迷いふと解けた
 弔辞読むあだ名を呼んで詰まる声
 ふり向けばやさしく春が忍び寄る
 さくらには解毒作用があります
 迷惑をかけない様に必死です
 免許返上まだ早いかと自問する
 道一筋つづく未来へこつこつと
 酔うている今品格を問うでない
 誇るもの無いがぶれずに生きた自負
 足病んでいる間に消えた目の不調
 一枚の切手小さな幸運ぶ

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

騙されておこうか三度目の誘い
 謎解いて真実を目に焼きつける
 悪かった一声あれば済む話
 絡まったエゴの結びが解けない
 政治家の知らなかつたは意味解けぬ
 見合い三度もう独身に決めました
 日に三度好きだと妻に言われる
 感謝して食べる三度の白い飯
 同じ話三度聞いたと娘が不安
 儲け話二度も三度もけつまずく
 こつそりと男は三度ほど泣いた
 エンディングノートに避ける差し障り

和夫 捷也 富子 紀子 照子 正雄 満作 義 志華子 けんえい 恭昌 理恵 集一 桃花 弘子 扶美代 雄太 勝弘 キーキー 紀雄 六點 まつお 雅枝 ちづる シルク 瑠美子 弥生

本当の歳を言わないのはなんで
 カアカアカア鳥が啼いた胸騒ぎ
 これを言うと差障るのでカッとする
 差し障りあるからだまる一文字
 プレゼント差障りある笑いじわ
 差し障りあつて揉めてる母の口
 安倍外交あちらこちらに差し障り
 聞かれても年金額はオブライト
 差障りあるが言うべき事は言う
 お客さんいつ帰られるのと聞く子供
 差し障る話題をさけて名司会
 さしさわり乗り越え友に会いに行く
 ここの話の話を踊る差障り
 僕がここにいると支障がありますか
 天命に差障りなく日を送る
 うまい弔辞うっかり拍手したくなり

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

大臣の頭の中はいつも春
 啓蟄も寒くて姿も虫も出ず
 花を愛でお酒を呑んで春に酔う
 大吟醸ちよつとのみたい春の宵
 春巡り人それぞれの花は咲く
 春迎え孫は飛び立ちメール習う
 真つ昼間ばかりばかりと露天風呂
 たおやかな茶席で痺れ四つん這い
 たおやかな巫女がけりけり御神酒つぐ
 たおやかな女の姿あれ?男
 たおやかに竹久夢二知っていた
 たおやかにしてたら足を踏まれそう

次男 智恵子 照彦 玲坊 瑞子 恭子 石花菜 由紀子 重忠 紀美恵 祐子 和子 庸佑 美代子 一文 征志 ヨシ枝 英夫 フジ子 喜代子 高鷲 網枝 育代 光男 信二 龍一

たおやかに頑固じいさん孫の守
身を焼いた頃もあったという小敵
戦争は原爆一つで焼野原
手を焼いた子が論じてる親の前
火遊びに飽いて男は畦を焼く
手を焼いた母が施設で丸くなる
世話焼きの婆さん見かけなくなつた
ヤキモチを焼くとちよっぴり嬉しそう
半生記前の手紙を焼く火鉢
欲深い財布が脂ぎっている
その態度のらりくらりに気に入らん
クリームをぬるぬる顔に浸みこまぬ
ぬるぬると引き込んでゆく詐欺の口
春が来て穴からぬるぬる蛇が出る
ぬるぬると塗って仮面を付けている
鬼一

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

川柳は頭のサブリ万歩計
必要にされてる私呆けられぬ
あれから4年これから続く10万年
埋葬は桜の下にてしてほしい
入れ歯に交って生真面目に歯を磨く
物忘れトルコ行進曲に乗って
生真面目に3サイズは寸胴で
かわいいと思つた呆けてからの父
邪魔せぬよう親子在宅部屋籠り
一通の手紙で泳ぐ回遊魚
日向ぼこうつらうつらと呆けてゆく
ボケぬよう脳トレもして恋もする
食べて寝てなんと仕合せではないか
治代

日出国 盛桜 英子 雄大 野蒜 茂夫 風露 萩江 茶子 完司 康子 けいこ 龍枝 醉芙蓉 鬼一

京都塔の会

樹本 宏子報

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

お彼岸と冬將軍のボクシング
落日物拾つた五円届けよう
かくや姫いなか竹を伐つてみる
身の内に二つ三つ咲く斑呆け
もみくちゃになって命の重さ知る
酒の量落とすとボケが加速する
自慢です天然呆けは親譲り
乳母車押しの手いはる老人車
おばさんがリサイクルする厚化粧
娘との距離がだんだん遠くなる
ガンよりもボケが怖いと気にかかる
連れ合いの取り柄は真面目肩が凝る
天窓から時々覗く宇宙人
カラスより早く目覚めてゴソゴソと
完司

洗い髪さらり春風待つている
ワントンポ遅れた振りで風をよむ
妻と娘のテンポを父ちゃんがこわす
延長でテンポを変えた勝投手
老夫婦犬のテンポで暮す日々
おもいやる言葉へどつと湧く力
プロの業力を入れる抜く所
この苦勞力となつて蓄える
無職の身スロテンポで生きて行こ
躍動のテンポ黄色い夕カラツカ
バラバラのテンポ熟女の横並び
曲り角さらりと父のアドバイス
母もも力出し切り産まれ出る
えべっさん笑つて力抜けという
美津子

落ちこぼれも活かす眼力ある上司
懐かしの歌声テンポよく弾む
蓄ふくらむ過去をさらりと脱ぎ捨てて
逃げ道を少し残して力抜く
生きてゆく力が闇をこじ開ける
苦い過去をさらりと捨てて前を向く
勝負ごと凶太さだけでかつている
知りませんさらりと言えば済んだのに
都合の悪い話はさらり忘れまます
さらりとした髪になりたい孫癖毛
粘り強く生きてさらりと逝くつもり
やられたら倍返しする凄いい奴
気にせず凶太く生きるのも一手
負けておくにも少し要る力
啓子

ひたすらな思い止められないホック
順調に歳を重ねて顔のしわ
古本屋やくと見つけた手書き辞書
三浪のヤクラ吠かせた辞書の数
永遠のゼロ謎のペールを剥ぐ時空
忍従の果てに成就の夢の嵩
業業服今日のお宿は五つ星
順調に行けば100歳までは夢でない
辞書作る苦勞知つたわしおんさん
火傷せぬ位置で美女のおもてなし
ほどほどの幸せでよい今傘寿
お粗末は最終貯蔵を決めぬまま
君一人いなければ全て順調だ
お粗末と言うが心は正反対
銀杏

則彦 泰夫 弘之 葉子 保子 英旺 弘子 文代 万紗子 益子 公子 義昭 忠子 啓子 石花菜 蟹郎 麦青 美ツ千 小鹿 雄大 けいこ 風露 重忠 正男 鈴野 久子 仁美 完司 紀乃 宏子 見清 求芽 悦子 朝子 庸佑 弥生 福子 欣之 かずお ふりこ 満子 美津子

三食と昼寝晩酌ありがとう
 ジイちゃんを買ってくれないから嫌い
 イスラムにスーパーマンがいたらなあ
 もうあかんピンチの裏のチャンス待つ
 無知もよいピンチが来ても感じない
 電柱に登り震える子猫ちゃん
 御老人浮気心が破壊の基
 道徳心政治家あなたありますか

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

正直に生きよう悔いが残るから
 すんなりと反論が出ぬもどかしさ
 幸せの度合い心にあるめもり
 旅に出る心の中に住む人と
 重い雪老いのスコップ柄が折れる
 昨年と似てる新たな抱負持つ
 知りたがる子の引き出しが閉まらない
 柔道が食われ相撲はなお食われ
 わたしとも姉とも思う顔になり
 地位名誉ない私にも意地がある
 お下げ髪ちよつと見ぬ間にママになる
 気兼ねして立ち読みをする時間待ち
 二〇一四八句絞って締めくくる
 今度こそは次があるよと頑張れる
 ありがたい法話を聞くと眠くなる
 街師走一円安にペダル漕ぐ
 慣れた風景それでも朝は新鮮だ
 落ち込む日差し窓からエールする
 迷惑かけぬ夢はでつかく描いておく
 有る事や無い事言われ腹が立つ

一步 勝弘 信醉 公平 珠生 功生 陽子 敦子 信子 嘉子 昭子 惠美代 三郎 理子 和之 水樹 美恵子 章子 みどり 百合子 和代 信平衛 由里 寿々子 慶一

慢心を洗い初心に戻らねば
 黒豆が嫁いだ家の味になる
 鬱払う遊び盛りの猫といて
 雪解けて笑い話になるきのう

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

ポケットに明日の太陽入れてある
 手のかかるベットに心癒される
 一線を越えてはならぬ深い仲
 乳母車老犬乗せて散歩です
 やんちゃ猫時々人の顔を見る
 マラソンの熱気若さのエネルギー
 肩書きが取れてまあるくなりはった
 丸い背な亡母にだんだん近くなる
 老いたけど丸くなったは背中だけ
 割烹着つけた夫は名コック
 角が取れまあるくなつた石頭
 のぞき見る豪華病院ベット用
 貯金箱母の努力を知っている
 桜前線待つ三月のあたり
 着ぶくれて目線で計る空いた席
 金婚も私あつての努力賞
 営業マンガラフの線に泣き笑い
 ダーリンに事前投資のチョコレート
 リフォームの具合いを猫も覗いてる
 曼陀羅へ一線引いて対峙する
 昼寝した分だけ寝れぬ午前二時
 ウエストのくびれに努力賞あげる
 たわむれる目白に雨戸そとと開け
 国境の線上に立つカメラマン

華蓮 一眸 遊子 公弘 晶子 つね湖 幸香 洋子 柳明 雪菜 和子 初音 修平 紀華 健二 よしひさ 紀乃 里江 富夫 五月 靖鬼 野鶴 晴美 耕治 哲夫 純夫

五十年平行線のまま夫婦
 ここからは私呼んではいけません
 夕焼けへベットを吹いている孤独
 五重丸つけてあげたい産んだ汗
 それぞれの努力の果実フルムーン
 うちの犬ボスは妻だと知っている
 シャッター街一直線に風抜ける
 懸命に励み無能をカバーする
 呆けぬよう励んでもあります五七五
 実りなき努力もあるとひとり言
 よく噛めばマルも四角も味がある

事務所便り

川柳塔社では当月号で「暑中見舞広
 告」を募集しております。(応募要項は
 表二面に掲載)当広告は、同人誌友は
 もとより一般の購読者の皆様、他の柳
 社の方々も個人団体の別なくご利用頂
 けます。
 巻末の申込用紙に記入、五月二十日
 までに事務所宛て到着するようお申込
 み下さい。
 掲載誌は七月号です。
 同人誌友の皆様には特に他の柳友の
 方々との交歓の場として、或は川柳塔
 社のサポーターとして、ぜひこの機会
 をご利用下さいませようお願い申し上
 げます。
 (山岡富美子)

祐康 ひとみ 正和 キヨミ 茂 哲男 宏造 かずお 美籠 比る志

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 長い・鞆・いらいら・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
岸和田 川柳会	16日(土) 12時30分開場 半・和む・ささやか・ヒーロー	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0067 岸和田市南町9-17-18 藤井康信
川柳塔 みちのく	16日(土) 17時締切 青葉・くねくね・羽化	弘前市桶屋町4-7 「居酒屋とんぼ」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛
川柳 ねやがわ	17日(日) 13時締切 弾む・贅沢・情報・自由吟	寝屋川市立産業振興センター 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	17日(日) 14時締切 悪戯・買出し・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2-2-201 高田美代子
豊中 もくせい 川柳会	18日(月) 13時50分締切 世界・化ける・淡い・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	19日(火) 13時30分締切 やる気・テーブル・救う にっこり・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
和歌山 三幸会	23日(土) 12時30分開場 迷う・内助・さっぱり	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市川柳 民会	24日(日) 14時締切 新緑・頭・常識・ソース	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	24日(日) 13時30分開場 喪服・ワンコイン・先送り	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	25日(月) 18時開場 つまづく・居眠り・感染・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	25日(月) 14時締切 サイズ・ごろごろ・禁	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳塔 すみよし	30日(土) 14時15分締切 感動・ピンチ・休む	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

5月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	2日(土)14時締切 無口・呆れる・やれやれ 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	2日(土)14時10分締切 送り(とぼっちり)・溶ける 自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉 川柳会	2日(土)14時締切 野暮・くらくら・浮く	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟社	2日(土)13時45分締切 消火・攻める・おかげさ うっかり	松江市 雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
あかつき 川柳会	8日(金)14時締切 青い・目・努力・時事吟	大阪府体育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 さかい	8日(金)13時開場 ぐったり・こじれる 折り句=やくば	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳塔 なら	8日(金)14時締切 走る・食・服	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳大阪	9日(土)14時締切 がっかり・差・下手	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区本通4-11-6 山崎珠生
川柳塔 打吹	9日(土)13時締切 衣・焦る・おちおち	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	10日(日)14時締切 目論見・苗・怪しむ・雑詠	八尾市淡川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	10日(日)14時10分締切 兼題=色紙・手・カード 課題吟=怒	和歌山ビック愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫
西宮北口 川柳会	11日(月)14時締切 仲間・覗く・ふっくら・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プラにしのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池町10-18-104 福高弘子
ほたる 川柳 同好会	12日(火)13時30分締切 部屋・渡す・痛い	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

柳界展望

★第15回春はくろほこ川柳大会は4月5日、さざんか会館で開催。同人の成績次の通り。

鳥取市議会議長賞

新家 完司
神さまの力はあてにしていけない

新日本海新聞社賞

西谷 悦子
許したら炎が消えてしまいうそ

川柳同友会みらい会長賞

河内 月子
やあやあや森の宴だ出ておいで

★明日香創刊20周年記念全国誌上大会、同人秀句。

辻内 次根
良く笑い新細胞に入れ替える

★川柳さつぽろ平成26年度・第42回あきあじ賞

小沢 淳

冬が来る長い手紙になりそうだ

☆新家完司理事長は「凜」No.61に「自分を見つめ、他人を見つめる」を発表した。

☆高瀬霜石さん(理事・弘前市)は、青森県川柳連盟理事長に就任。

▽柳界動向△

○「川柳塔なら」新役員は、会長に中原比呂志。副会長に安土理恵・飛永ふりこ。会計に安福和夫の諸氏を選出。

○西宮北口川柳会は奥田みつ子さんが勇退。新会長は山口光久。副会長に黒田能子・久保田千代。事務局長は梅澤盛夫の諸氏を選出。

▽ご芳志御礼△

○高田美代子さん(参与・藤井寺市)よりご厚志拝受しました。

▽出版版▽

◇坂上淳司「朝日なにお柳壇入選百句集」梅干しと吊し柿」。B6判96頁。

序文・西出楓楽、田中新一、板尾岳人。

▽新誌友紹介△

大阪市 萩尾 紀子
紹介者 鶴田 遠野

大阪市 榎本 舞夢
紹介者 田中 廣子
鶴田 遠野
古今堂蕉子
榎本 舞夢

箕面市 榎本 舞夢
紹介者 中山 春代
八尾市 水野 黒兔
紹介者 山川 孝子
高杉 千歩

▽お詫びして訂正△
▼4月号P101下段6行目、王者さえいれ伏す母の深い愛↓れ伏す
▽削除△

▼4月号P53上段16行17行目、「溜息を上げは幸せ逃げてゆく」「隠しても心の闇を照らす月」の2句は先行句があり削除します。

常任理事会 4月7日(火)
①川柳塔社同人推薦書②各地川柳会への文書③第

3回誌上大会報告④川柳塔ホームページ改良案⑤次回 5月7日(木)AM10時

新同人紹介

安 福 和 夫
朝子・昭・楓楽・恭昌推薦

藤 原 大 子
楓楽・扶美代・いさお・ふりこ推薦

江戸川柳で読み解くお酒

盃へ模様の増える花の山
焼酎を口おしそくなつらで呑み
我を見る鏡は友の酒の酔い
うつむいてあくびしている飲まぬ奴



共著 美博 清谷 有史

山愛書院 発行
1,500円+税

第21回 川柳塔まつり

と き 平成27年10月3日(土)

開場：午前11時 出句締切：正午 開会：午後1時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成26年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成27年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「言うだけなら誰にでも言える話」 ～よりよい川柳界のために～

兼 題	「ギャップ」	鳥 取 森 山 盛 桜 選
	「ゆらり」	大 阪 山 岡 富美子 選
	「古 い」	大 阪 川 端 一 步 選
	「宝 」	大 阪 古今堂 蕉 子 選
	「あがる」	青 森 高 瀬 霜 石 選
事前投句	「 森 」(9月1日必着)	川柳塔社 主幹 小 島 蘭 幸 選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午(午後5時頃終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会 費 2,000円(当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎ 呈 記念品

《懇 親 宴》

と き 平成27年10月3日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウィーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込み 130名様

☆宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

*事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(火)までに本社事務所宛、お送りください。

*懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

編集後記

★幻花一閃自転車は赤だつたな 薫風

★3月某日、かつて大阪

文壇の長老と呼ばれた作家

藤澤恒夫郎「西華山房」

跡頭彰碑建立記念イベントに参加。「藤澤恒夫と

住吉」と題して、木津川先

生が講演。秋田実・長沖

一・小野十三郎・庄野英

二・司馬遼太郎・田辺聖

子など大阪ゆかりの作家

・詩人が「西華山房」

を訪れている。薫風先生

も知遇を得たお一人。共

著に「川柳に見る大阪」

(昭和60年保育社)も。

★木津川先生は語る。

「藤澤文学は清潔的・都

会的文学でもっと評価さ

れて良い。顕彰碑建立は

再評価のきっかけとなる

う」と。流行作家藤澤恒

夫原作の映画は17本。そ

のうちの「妖精は花の匂

いする」(大映・昭和28

年2月封切。白黒90分)が上映された。久我美子・根上淳・森雅之らの織りなす青春ドラマに時代の風を感じたひとときであつた。

★3月某日、谷町9丁目

常国寺の梶井基次郎のお

墓に参る。基次郎は明治

34年大阪生れ。昭和6年

3月24日、大阪市住吉区

で死去。享年31。「桜の

樹の下には屍体が埋まっ

ている!」の書き出して

始まる短編「桜の樹の下

には」は有名。昨年暮れ

にお参りした時の供花の

残骸とレモンがそのまま

に。藤澤恒夫を再評価

する動きに比べて、大阪

に生れ大阪に没した基次

郎を顧みる動きはまだ、

無い。

★3月某日、第3回「泉

大津オリアム随筆大賞」

表彰式に出席。選考委員

は難波利三・木津川計・

眉村卓・有栖川有栖。エツ

セイのコツは「書き出し

何を残せるか

虎は死して皮を残すが、自分は先達と同じだが、出来るのは趣味の範疇を超えれぬ駄句ばかり。

何を残せるのか。凡人中の凡人 しかし、川柳塔が、投句先の新聞社が存続していれば、柳誌が図書館等に寄贈されていれば、凡人

か。子孫、仕事、趣味? 子孫はでも名を残す可能性がごく僅かであるが、折角、川

4世代先でブツンかも、せいぜい永代供養の墓石に家名が刻まれるだけ。仕事は同じことの繰り返しで斬新な発明など縁遠い世界のこと。はてさて、趣味らしき川柳

はどうか。一本の鉛筆で描くさまうだ。

は1行でびしっと決め 号」に、お祝いの言葉は年は中年の老年は老年

「手垢のついた言葉 いただいた俳人坪内揅典 の、若さに代わる別の価

は使わない。言葉の達 さんの代表句は 三月の 値があつていい。多彩な

人・木津川先生をして言 甘納豆のうふふふ 価値観で快適」と。

わしめたのは「辞書を引 □揅典さんは「俳句の □揅典さんは、40年の大

くこと。昨年に続いて 日・8月19日」や「俳句 学教員を終えられ「これ

今回もたくさんさんの御教示 甲子園」の提案者である。 からの夢は、高齢者から

を頂いた。 ある新聞のインタビュ 子どもまで3世代が一緒

★「路郎余滴」は5月、 で、「子規の好物が乗り 地に広めていくことで

7月号は休載です。 移って「あんパン・柿に 目がない」「禁句は「忙

★4月号目次に不手際が ありましたことをお詫び しい」「がんばる」「若い」というのは、ぜいたくで、

いたしました。 (朱夏) ・・多忙は人を殺しか ねないし、がんばって無

□昨年9月号「川柳雑誌 理をすることは無い。中

川柳塔90周年記念特集 (勝弘)

ひとこと

虎は死して皮を残すが、自分は先達と同じだが、出来るのは趣味の範疇を超えれぬ駄句ばかり。しかし、川柳塔が、投句先の新聞社が存続していれば、柳誌が図書館等に寄贈されていれば、凡人でも名を残す可能性がごく僅かであるが、折角、川柳という道に踏み込んだのだから、少しでも良い句を創作できること。はてさて、趣味らしき川柳よう継続的に努力するしかないよ

うだ。(糞谷 和郎)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)

地名

市 都
道 府
都 府
姓 雅 号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「決心」(5月15日締切)

7月号発表

古久保和子 選 — 共選 — 牧野 芳光 選

B A

--	--

地名

市 都
道
府 県
姓 雅 号

B A

--	--

地名

市 都
道
府 県
姓 雅 号

切らないで下さい

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

個人用

暑中見舞広告 原稿台紙

きりとりせん

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(ご希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

5月20日締切

川柳など掲載希望事項

電話	住所	姓・雅号
()	〒	
()		

送付先

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

川柳塔社

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 -	 	

○ ○

年 年
月 月
から から
半年 半年
月 月
から 5000円
一年 9800円

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 西出楓楽選
 愛染帖 (3句) 新家完司選
 檸檬抄「決心」 (2句) 牧野芳光共選
 (古久保和子選)

イノセントレションナヒ (2句) 大西泰世選
 岸本宏章選
 「懐かしい」 山田葉子選
 「身軽」 山田葉子選
 「ぷりぷり」 足立茂選
 初歩教室「らくらく」 (3句) 山口光久担当

8月号

檸檬抄「きっかけ」
 一路集「逆らう」「補助」
 「やがて」
 初歩教室「貝」

本社5月句会

とき 5月7日(休) 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間、締切時間を変更していません。ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし「こんな句会をやっています」

兼題「染める」
 席題「金持ち」
 「シヨック」
 「織る」
 「動物」

小島蘭幸選
 山口光久選
 宮西弥生選
 両川無限選
 坂裕之選
 森松まつお選
 北野哲男氏

会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

本社6月句会

5日(金) 午後1時から

兼題「責任」「首」「がたがた」
 「終わる」「鳥」

第33年度 夜市川柳募集

最終回「狂う」小島蘭幸選
 ハガキに3句 5月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円(送料86円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一五年(平成二十七年)五月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―四―一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七七九三三九〇番

振替 〇〇九八〇一四一―二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

オニザキのプレミアムロースト

つばなま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5500

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>